

んだ。

長い詩題は次の通り。「円通禅院は先君（蘇軾^{せんくん}の父の蘇洵^{そじゆん}）がかつて遊んだところである。四月二十四日の晩に着いてここに宿った。翌日はちょうど先君の忌日（命日）であつたので、（維摩經にある）宝積が天蓋を捧げて仏を讃えた一偈を手で写し、長老の遷公に差し上げた。遷公は掌を撫ぜて笑ひ、『昨夜、夢に宝蓋が飛んで下り、着地したところからすぐに火が出ました。それはこのことがあるとの祥だったのでしょう』と言った。それでこの詩を作った。円通禅院には長老に仕える蜀の僧の宣逮^{しよく せんたい}がいて、先君を識^しっていると言った」。

（廬山^{ろざん}の高峰^{せきじほう}）石耳峰^{せきじほう}のあたりの路は天に接し、

（円通禅院にある）梵音堂^{ふんおんどう}の上の月は泉を臨み見る。

我が人生で初めて廬山の水を飲む。

いつの日にか、禅門に入ることがあるのだろうか。

袖の内から書いたものを出そうとすると、

夢の中で天蓋が飛んで、私がぐると伝えたと言われる。

しかし、ここでは私のことなど誰も知らないはずだ。

野の鶴のような気構えだけはあっても、

俗気はまるっきり抜けていない私であるのだから。

■子由在筠作東軒記或戲之為東軒長老其婿曹煥往筠余作一絕句送曹以戲
子由曹過廬山出以示円通慎長老慎欣然亦作一絕送客出門歸入室趺坐化去
子由聞之乃作二絶一以答予一以答慎明年余過円通始得其詩乃追次慎韻。

これも円通禪院で詠んだ詩で、やはり長い詩題がある。「弟の蘇轍^{えんつうぜんいん}は筠州^{いん}で『東軒記^{とうけんき}』を作ったことから、ある人が戯れに弟のことを『東軒長老^{とうけんちやうろう}』と呼んだ。東軒長老の婿殿^{そうかん}の曹煥^{そうかん}は、かつて筠州^{こう}に行く折に黄州^{こう}に立ち寄ってくれた。私は一首の絶句を作って曹煥を見送り、合せて弟への戯れの言葉とした。曹煥は（その後）廬山^{ろざん}を通り、円通禪院^{しん}の慎長老にその詩を見せた。慎長老は欣んで一首の絶句を作った。慎長老は寺の門から出て曹煥を見送り、部屋に戻って趺坐するとそのまま化し去ってしまった（亡くなった）。弟はそのことを聞いて二首の絶句を作った。一首は私の詩に、一首は慎長老の詩に答えるものであった。翌年、私は円通禪院を訪れて初めてこうした詳細を聞いた。それで慎長老の詩に次韻した」。

その詩を読む前に、蘇軾が曹煥を見送ったときの詩を見ておこう。

（蘇轍^{とうけんき}の『東軒記』は第6章135ページで、曹煥^{そうかん}が黄州^{こう}に來たことは第6章332ページでそれぞれ見ている。ここの詩題に、ある人が蘇軾を「東軒長老」と呼んだとあるが、「ある人」とは蘇軾であろう）

こう そうかん
黄州で曹煥を送る詩

君は、幾日あれば、^{いん}筠州に行ってここに帰ってこられるのかな。

筠州に着いたなら、降り積もった塵や埃をすっかり掃うがよい。

君に一つの籠を贈ろう――

きっと受け取ってほしい。

何のための籠かというと、

この中に^{とうけんちやうろう}東軒長老を抛り込んで、

ただちに持って帰ってきてほしいのだ。

^{しん}慎長老の詩に次韻した詩

^{だい し}大士(慎長老)にはもとより生も死もない。

^{しょうじゆ}小儒(蘇軾)はどうしても^{きやう}窮(窮迫)よりは^{つう}通(栄達)を求めてしまふ。

たまたま大士と小儒のささやき声(贈答し合った詩)が、

千の山(^{ろざん}廬山)の上に留まることになり、

もしかしたらそれが風に乗って、

人間世界に一万もの共鳴を生み出したりするだろうか。

■過建昌李野夫公沢故居

^{ろざん}廬山は遠く古代から知られる名山で、多数の山の集合体で、景勝地も宗教施設もたくさんあって見どころが多い。現在でも有数の観光地で、巡り始めたらきりががない。^{えんつうぜんいん}蘇軾は円通禅院に一泊しただけで廬山を離れ、さらに

南へと道を急いだ。廬山観光よりも^{いん}筠州にいる弟に会うことを優先したのである。

^{けんしょう}建昌に至ると、逆に北に向かう^{おうてき}王適（字は^{あざな}子立）と出会った。王適は蘇轍の婿で、第6章171ページなどで見ているように、^{こう}黄州を2度訪ねている。このとき王適は何らかの用事で筠州から旅に出たところだったようだ。建昌では、^{りしん}李莘（字は^{あざな}野夫）、^{やふ}李常（字は^{りじょう}公沢）の兄弟の故居を訪ね、この詩を詠んだ。李常は蘇軾の親友で（第6章72ページなど）、このときは都にいて、その兄の李莘も他郷で官職に就いていたので、故郷の家には誰もいなかった。

^{ほうれい}ここは^{はよう}彭蠡湖（鄱陽湖）の^{みなもと}東北の源にして、

^{ろざん}廬山の西南の麓、

そして、^{しゅうすい}修水のほとり——

誰がここに一對の^{ぎょうり}玉（李兄弟）を生じさせたのか。

二人を想ってもいまは見ることができず、

破れた家に竹が高く伸びあがっている。

近隣の人々は互いに戒めて合ってこの土地を犯すことがなく、

^ぼ十畝ばかりの広さの竹林は束ねられるばかりにぎっしりと生い茂っている。

私がここに来たのは五月の初め、

竹は^{かわ}籜を脱いで緑が新たになっている。

私に向かって鳥が静かに鳴き、
 村の人々はここに宿をとるよう勧めてくれる。
 行きつ戻りつ、去り難くしている間に、
 細い月が高い木の上に掛る。
 遙かに想像する――

いつの年にか、老いた兄弟はここに帰りきて、
 官員の印を解き、緩い衣に着替え、二つの^{ベッド}牀を並べる、
 竹の軒端に夜の雨が鳴り、
 伏して近くの寺の鐘を聴く、
 窓辺では燈火が書物を照らしている……

(蘇轍にとって、^{ベッド}牀を並べて夜の雨音を聞く(夜雨対牀)^{やうたいしやう}のは兄弟愛の象徴(第2章
 21ページ)で、^り李兄弟もまたそれを理想とするであろうというのである)

■将至筠先寄遲适遠三猶子

もう少して^{いん}筠州というところにまできると、蘇轍の息子の^ち遲、^{かつ}适、^{えん}遠がこちらに向かってきているとの知らせが入り、この詩を作って3人に寄せた。

露に宿り、風を食らって六百里、
^{なんこう いん}明朝は南江(筠州の川)の水を馬に飲ませてやることができる。

いまから豊盈犀角(状貌の優れたさま)の諸君等に会うわけだが、

これより先に玉雪(色白の秀才)の王君に会った。

諸君等と牀を並べて連夜の語りをしたいと思っている。

きっと諸君等のことだから、星を上戴着早朝に町を発ったのだらう。

そういえば、私は夜にこどもの虎(蘇遠の幼名は虎を意味する於菟である)を夢に見た。

きっともう立派な髭髥が両耳に垂れていることだらう。

思い出すのは、

時の移りに従って、私が古河東(河中府)へ移動となって済南(齊州)を過ったときのこと、

春がまだ動かない残雪の中で、やはり諸君等が迎えに出てきてくれた、

たくさんの酒や肉を持ってきてくれて、我が家族は大いに喜んだのだった。

それからの私はすっかり落ちぶれ、

一頭の羸馬(疲れた馬)と化し、

宿場の荷担ぎ人夫とも「おれ」「おまえ」で呼び合うような私を見て、

諸君等はきっと驚くに違いない。

それでも身体は健やかなので、

窮愁の内にあるのをひたすら恥ずかしく思わずともすみそうだ。

私は諸君等の父上のために十日間ほど留まるつもりだ。

それとてぴかりと稲妻が光る間のこと、何のたのみにもならない。

だから急いで詩を作らないとならない。

ほろ酔い加減の二人の老人(蘇軾・蘇轍の兄弟)の詩は、

たぶん酒のうまさに勝るであろう。

(蘇轍の第三子の誕生を祝った詩を第5章17ページで見ている。赤ん坊だった「虎」もすでに11歳になった。詩の中ほどで「済南^{さいなん}を過り」とあるのは、かつて密州^{みつ}知事の任を終えて次の任地(始めは河^{かわ}中^{ちゆう}府とされていたが、後で徐州^{じょ}に変更される)に向かって移動する途中で齊南に立ち寄ったことを指す(第5章147ページ)。そのときも蘇轍の子等が町の外にまで迎えに出てきてくれたのだった)

■端午遊真如^{いん}遅^い適^し遠^{えん}従^{じゆう}子^し由^{ゆう}在^{ざい}酒局

蘇軾は4月末に筠州^{いん}に到着した。兄弟の久しぶりの再会であったのだが、弟はなかなか多忙で、端午の佳節も仕事で役場に出なければならず、兄は3人の甥とともに真如寺^{しんにょ}に遊んだ。詩題にある「酒局^{しゅきよく}」は、塩税や酒税の管理をする蘇轍の執務室である。

ひとたび弟と別れてから、

端午の節句はこれで七回を数える。

端午の節句といえば、

五色の糸を身に付け、菖蒲の根を漬けた酒を飲んで悪病をよけるのだが、

私は俗世の糸に繋がれ、心には菖蒲酒よりも苦いものがあり続けた。

今年は、馬にまたがってここにきてからは、佳節の訪れを毎日数えて待っていた。

甥たちは私がきていることを喜んで、かいかいしく馳走を並べてくれた。

水餅——これは食べるのは蜀の風習で故郷を思い出させ、

飯筒——これを水に投げ入れるのは楚の風習で人の心の優しさを偲ばせる。

私は言った、

「ちよいとでも酔ったなら、故郷なまりがぼんぼん飛び出してしまうだろうな」

ところがその日になってみたら、

弟は官に仕える身の悲しさで、酒糟の匂いに埋もれてあっぷあっぷで、

仕方なく私は三人の甥とともに出て、古刹に禅僧を訪ねることにした。

寺にきてみたら、私の出番はなく、

禅僧とのちゃんとした議論は梁くん(蘇遲の幼名)と羅くん(蘇适の幼名)に任せ、

詩を詠む順番は虎ちゃん(＝於菟、蘇遠の幼名)に譲る。

帰ってからは、仕事にばかり精を出す弟をからかって笑い、

長く端午の節句を一緒に過ごすことができなかった憂さばらしとする。

(蘇軾は年次の経過を極めて正確に記憶している。これより前に端午の節句を弟と一緒に過ごしたのは徐州知事として赴任した直後のこと(第5章181ページ)。そのとき42歳であったから、確かにこれはそれから7年後のことである)

(筠州の近くに竜泉県があり、このときの知事は黄庭堅(第6章373ページなど)の兄の黄大臨で、蘇軾は竜泉を訪れたようだ。黄兄弟は蘇兄弟と同様に仲が非常によかった)

■阮郎帰

この詞の制作時期は不明であるが、筠州訪問のころにどこかの寺で休息した折に詠んだとみてもよいであろうか。

緑槐高柳咽新蟬、(緑の槐、高い柳、初めて鳴き出した蟬)

薰風初入弦。(薰風は古代の琴の音を奏でます)

碧紗窓下水沈煙、(碧の紗のかかる窓の下に水沈香の煙)

棋声驚昼眠。(碁石の音で昼寝から目覚めます)

微雨過、(微かな雨が通り過ぎ)

小荷翻、(小さな蓮の葉が翻り)

榴花開欲然。(榴の花が燃えるように開こうとしています)

玉盆纖手弄清泉、(ほっそりとした手で清らかな泉の水を盆に掬おうとすると)

瓊珠碎却円。(珠が蓮の葉の上で碎けて無数の円になります)

(泉の水を汲んだほっそりとした手(纖手)の持ち主は誰なのか。王朝雲であったと想像してみたい気もする。前年の冬に生まれたばかりの遯(第6章446ページ)を伴っての旅はたやすいものではなかったはずで、蘇轍のもとにきたの日々は少しはほっとできるものだったのではないだろうか)

■別子由三首兼別遲

いん 筠州滞在は10日間ほどで、5月8日に兄弟は別れ、蘇軾はこの詩を詠んだ。第一首と第二首を弟に、第三首を甥の蘇^そ遲^ちに贈った。

其の一

僕はわかっているんだ、

君が僕の^{おも}ことを念っているから、この別れを難しくしているのだと。

この別れはこれまでとは違う。

僕は風の中の楊^{やなぎ}の花——いまだに行き先は定まらないけれど、

僕は雨の中の荷^{はす}の葉——決して自身が濡れてしまうことはない。

三年の間、僕等は己を磨くために何百もの書物を読んだ。

僕等を一目見るなら、二つの壁^{たま}が並ぶ以上のものがきっとあるはずだ。

君は、いつまでこの地に留まっていなければならないのかと嘆くことはない。

しょうこう 小劫の六十倍だって風雨が過ぎ去るほどにあっという間なのだから。

((1) 最後にある「しょうこう 小劫」というのは不思議な計算式によって出てくるとてつもなく大きな数。(2) これまでの別れとは違うと言っているのは、兄弟ともに苦難を経た結果として、人間としてより強くなった(現代のはやりの言葉でいえばレジリエンスが増した)という確かな思いがあるからなのだろう。黄州での最初の年の終わりに天慶観^{てんけいかん}に49日間籠る前に秦観^{しんかん}に宛てて書いた手紙に「期が満ちたときには、根本から立ち直っていることでしょう。その後でまた世間の事に関わっても、事がすめば心は根本のところに

返えるので、再び駄目になることはもうないであります」(第6章117ページ)と書いていたのを思い起こさせる)

其の二

先君^{せんくん}(父)は昔、洛陽^{らくよう}に住みたいと考えたことがあった。

僕はいま嵩山^{そうざん}の麓^{ふもと}に行こうとしている。

周公^{しゅうこう}が洛陽^{らくよう}の地^ちをトって都^とを築いたような大げさなことは考えていないけれど、

ために伊川^{いせん}のほとりに姿^{すがた}のよい竹林^{しんりん}でも買ってみようかと思っている。

また、緱山^{こうざん}には泉眼^{せんがん}というよい泉^{いずみ}があって、

氷の玉のような清らかな水が、

町に沿い、林を穿^くって流れていると聞いている。

遙かに想像するのは、

その水に照らされる茅葺^{ちやうり}の庵^{いほ}があり、

二人の翁^{おきな}がそこで向き合っているありさま、

その姿はあたかも白い鵲^{せう}のようである。

(1) 兄弟の父の蘇洵^{そしゆん}は不遇の時代に各地を旅して洛陽^{らくよう}にも行き、貧乏暮らしの身に

は叶わぬ夢ながらこの古都^{ここ}に住んでみたいと考えた。蘇軾^{そし}が指定された行き先の汝州^{じょ}

は洛陽^{らくよう}に近いので、この詩では嵩山^{そうざん}、伊川^{いせん}、緱山^{こうざん}、泉眼^{せんがん}といった洛陽^{らくよう}周辺の名所の名を

詠み込んでいる。(2) 茅葺^{ちやうり}の庵^{いほ}で向き合う翁^{おきな}は蘇軾^{そし}、蘇轍^{そてつ}の兄弟である。「鴻^{こう}のよう

だ」というのは、歐陽脩^{おうようしゅう}の最晩年(66歳)に老友の趙概^{ちやうがい}(80歳)が訪れたありさま

を想像して蘇軾が詠んだ詩句「二人がやりとりする清らかな句は、雪の中で鶉が鳴く声
のようだ」(第4章20ページ)を想起させる)

其の三

二人の翁が帰郷して退隱するのは難しいことではない。

ただし、そのためには、蘇^その家を任せてよい子が必要だ。

憶^{おも}うに、君(蘇遲)の父(蘇轍)がかつて君ぐらいであったころのこと、

筆をひとたび下すと、ばらばらと三千もの文字が落ちた。

世間の人はそれを聞いて、

そんな馬鹿なことがあるものかとひどく笑った。

いつか君が子を持つときには、

決して二人の翁のようであってはいけない。

車を駆って千里の道をひいひい走り回ると、

樗^{ちよれき}櫟(使い道のない木)の大木が家の庭に堂々と聳えるのと、

いったいどちらがよいのだろうか。

■初別子由至奉新作

弟と別れ、奉^{ほうしん}新県に至って作った詩。時は5月半ば、夏の盛りである。

君が好い夢を見たら、そこに僕の手紙が到着した。

二羽^{かきさぎ}の鵲^とが僕^{わが}に先^{さき}んじて飛^とんで、東軒^{とうけん}(蘇轍^{そてつ}の居所^{きょしょ})の屋根^{やね}に上^{のぼ}がったのだ。

かくて僕等^{わがら}は端午^{ぼんご}の佳節^{けせつ}を一^{いっ}緒^{しょ}に過^{すご}した。

ひとつの喜^{よろこ}びをいつまでも玩^{あそ}んではいられない。

いまここで首^{くび}を回^{まわ}らせば、

それはもうすっきりなくなっている。

勢^{いき}よく流^{なが}れる川^{がわ}の上^{うへ}に高^{たか}く架^かかる橋^{はし}――

来^きたとき渡^{わた}った溪^{たに}を僕^{わが}はまた渡^{わた}る。

暑^{あつ}い夏^{なつ}の空^{そら}は茫^{ぼう}茫^{ぼう}としてどこまでも広^{ひろ}がり、

君^{きみ}のいる町^{まち}は藹^{あい}藹^{あい}として遠^{とほ}い彼^{かの}方^{はた}になつた。

青^{あお}い山^{やま}はやるせなさの中^{なか}にあり、

落^{おち}ちゆく日^ひは寂^{さび}しさの外^{ほか}にある。

世^よの盛^{さか}衰^しなど、あれこれと僕^{わが}の思^{おも}うことではない……

離^{はな}合集^{ごくし}散^{さん}だつて、僕^{わが}にとってさわりとなるようなものではない……

だから、僕^{わが}は憂^{うれ}いを解^とくものを求^{もと}める必要^{ひつやう}などないのだ。

最^もも肝^{かん}要^{やう}なことを僕^{わが}はまぼ了解^{りやう}してしまっているのだもの。

(別^{わか}れに際^{さい}して、弟^{てい}はくれぐれも口^{くち}を慎^{しん}むよう兄^{けい}に言^いつたようだ。弟^{てい}の心^{こころ}配^{はい}は痛^{いた}いほどわかるので、この詩^{うた}では敢^あえて、憂^{うれ}いもないし何^{なに}もかもわかつていと言^いつてみせたのだらう)

■白塔鋪歇馬

はくとう ぽ

白塔鋪というところで馬を休ませて詠んだ詩。

前方に、甘山かんざんと廬山ろざんが向き合っている。

林の隙間から、やわらかな日の光が漏れてくる。

東の国では、晚おそい蚕ために桑の葉を切り出したところだろうか。

南の国では、早い稲の苗を植え移したところだろうか。

谷の水は、人が行くのに随はるうかいはるかとして迢迢へと急になり、

巖いわおの花は、馬の鼻先を撃かきなりあっつて冉冉かんて香りが立つ。

望み見るわが眼は、飛ぶ鳥とともに遠くへと及んで行く。

深く白雲の重なり合うところ――

ああ、わが故郷はどこであろうか。

■初入廬山三首

蘇軾は廬山ろざんに戻り、しばらくこの地に遊んだ。勉強嫌いの小児こぞの遷延ぐずぐずである。山中に入った第一印象を3首の詩に詠んだ。

其の一

この青い山々はもとの知り合いてはく、

偃蹇たかぶるありさまは、なかなか親しめるそうにない。

ろ ざん かお し
廬山の面をよくよく識るなら、

後にはなつかしい友のようになるのであろうか。

其の二

昔から、清浄な心地で賞翫^{おも}することを懐い、

こころ 神ばかりを、はる 杳かな藹^{もや}の間で遊ばせていた。

今やこれは夢ではない——

真実しかと廬山^あに在るのだ。

其の三

わ ら じ
芒鞋を履き、

青い竹の杖の先に百錢を引っ掛け、

深い山の中を遊ぶ。

不思議なことがあればあるもの……

お か
東の坡で瓜を作っていたこの農夫を、

山の人々の皆が知っているのだ。

(末句において、原詩では自身のことを「故侯^{ここう}」と称している。「故侯」は第6章15ページなどで見た召平^{しょうへい}を指す。召平は秦の時代には高い位^{しん}にあったが、世の混乱から逃れて一農夫となり、長安^{ちょうあん}の東の農園で瓜を栽培した。召平の作った瓜は甘く、後にその名が知れ渡った。蘇軾はもとより有名人で、廬山では行く先々に待ち受ける人がいた)

■書導師詩

ろ ざん じょう え ぜんいん
廬山の浄慧禅院にある温泉に遊び、この短文を書いた。とうせん
湯泉は硫黄泉が湧き、湯治の場となっていた。

とうせん
湯泉に遊び、そこに書き留めてあった百余篇の詩文を^み覧て、導師のこの一偈がよいと思った。

禅庭誰作石竜頭、(禅寺の庭に誰がこの石の竜の頭を作ったのか)^{から}

竜口湯泉沸不休。(竜の口から温泉が沸いて休むことがない)

直待衆生塵垢尽、(衆生はこの湯で^{ちり}塵や^{あか}垢を流し尽くそうとするのだが)

我方清冷混常流。(私は普通の水の流れの内にあっても清冷である)^{せいれい}

戯れに一絶句を作ってこれに応えた。

石竜有口口無根、(石の竜には口があるが、口には根がない)

自在流泉誰吐吞。(誰がその口から自在に流れる水を吐き出させているのか)

若信衆生本無垢、(もしも衆生が本来は無垢であるのなら)

此泉何处覓寒温。(この泉にしても、熱かろうが冷たかろうが構いはしないのだ)

げん ぼう
元豊七年五月十三日。

(^{じゆん し}導師とあるのは^{か じゆん}可遵という僧で、このときは円通院に退居していた。蘇軾がたまたまこの絶句を作ったことから導師は詩僧として有名になった。しかし、各種隨筆にはその詩は下手くそであると評されている)

■書葛道純詩後

葛格（字は道純）とともに廬山の簡寂観に遊んでこの短文を記した。葛格は筠州の人で、科挙に合格するのが遅く、短期間だけ地方官を務めた後に、このころはすでに引退していたようだ。

（サービス精神あふれる蘇軾は先輩格に当たる葛格を立て、筆を執ってその詩を書き残した。葛格の詩は可もなく不可もないもので、特に訳さずともよいだろう）

淙流絶壁散、靈煙翠洞深。巖際松風清、飄飄灑塵襟。

観蘿玩猿鳥、解組傲園林。茶果邀真侶、觴酌洽同心。

曠歲懷茲賞、行春始重尋。聊將橫吹笛、一写山水音。

高安（筠州）の葛格とともに廬山の簡寂観に遊び、葛格がこの詩を誦した。これを石に刻みたいから、私に書いてほしいと言った。

元豐七年五月十九日、汝州団練副使蘇軾。

■跋太虚弁才廬山題名

同じ日に蘇軾は慧日院にまで行き、この短文を記した。参寥師の名が再びここに登場する。蘇軾が筠州に行っている間は参寥は廬山に留まっていたようだ。

だい がい

大覚禪師と別れて十九年になる。大覚禪師は今は俗世間から離れ、海のほとり

うん ろう こう

の雲楼(杭州の禪院)におられる。思いがけずここで大覚禪師が記されたものを見て、

うやうやしく かん

拳拳も巻を撫せて太息する。またお会いしたいと思って、恐らくはできないであろ

うか。

さんりょう

ろ ざん

たまたま参寥師とともに、廬山の北側から出て東に至ったところ、どこもが大覚禪

師の旧跡(修行時代に過ごしたところ)であった。山中には、そのことを話してくれる大勢

の人がいた。

え じつ いん

しん かん

べん さい

だい めい

ここ慧日院には秦観と弁才大師の題名(訪問記録)がある。その後ろにこのように記

して、参寥師に示す。

秦観は今年三十六歳、参寥師は四十二歳、私は四十九歳、弁才大師は七十

四歳、大覚禪師は七十六歳である。吾等五人が一緒に会えることがあるのだろうか。

か。

生きている者は笑い、死んだ者は嘆く。

げん ぼう

元豊七年五月十九日、慧日院で大雨の中に書く。

(大覚禪師とは杭州時代に会っていて、ここに「別れて十九年」とあるけれど、実際は

12,3年である。秦観(字は太虚)は蘇軾の弟子筋の人で、弁才大師と親交があること

は第6章106ページで見ている)

■世伝徐凝瀑布詩云一条界破青山色至為塵陌又偽作樂天詩称美此句有賽
不得之語樂天雖涉淺易然豈至是哉乃戲作一絶

廬山には有名な香炉峰がある。多くの高校の古典の教科書に、「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ云々」という清少納言の『枕草子』の一文が載っている。これは中宮定子が清少納言の知識レベルを試そうとした問いで、清少納言はすぐに白居易（白楽天）の詩にある「香炉峰の雪は簾を撥げて見る」に倣って御簾を高く上げたので、中宮定子はいたく褒めた。その香炉峰の南に大きな滝がある。蘇軾はその滝を見て、後世に残るような名句を吐いたかという、そうではなかった。

長い詩題は次の通り。「唐の時代に徐凝が（廬山の）瀑布を詠んだ詩が世間に伝承されている。しかし、『一条界破青山色』（一条 界破す 青山の色）の句などは全く塵陋のようなものだ。白楽天がこの句をすばらしいと称え、『これには敵わない』と言ったとされるが、それは徐凝のでっちあげである。白楽天の語は平易で浅いこともあるが、ここまでひどくなることはない。戯れに一絶句を作る」

（徐凝の詩は名作としていまもよく引用される。ここの詩題に引かれているのは「今古長白練飛、一条界破青山色」（古から今に至るまで白練りの絹が長く飛ぶようになり、その一条が青い山を分け破っている）の対句である）

天帝は銀河のひと流れをここに垂らした。

古からこの滝を詩に詠み得たのはただ李白だけだ。

滝の水は飛んで流れて、

その滴^{しずく}はいったいどれほどあるのだろうか。

それでも天帝は、

徐凝^{じょぎやう}の悪詩をすっかり洗い流すのには使わなかったのだ。

(蘇軾^{りはく}が称赞する李白の詩は、

日照香爐生紫煙、(日^{こう}が香炉^{ろう}峰を照らし、紫^{もや}の煙が生じる)

遙看瀑布掛前川。(遙^みかに看るのは、前の川に掛かる瀑布)

飛流直下三千尺、(飛んで流れて直ちに下るは三千尺)

疑是銀河落九天。(あるいは銀河^{ぎやうてん}が九天(天のまた上)から落ちてきたのだろうか)

この李白の詩の勢いに敵う詩は詠めないと観念し、徐凝をだしにして、この詩を踏まえて遊びの詩を作ったのだろう。ごみくず扱いされた徐凝はとんだ迷惑であったろう)

■廬山二勝

廬山^{ろざん}で特に印象の強かった二カ所について詩を詠んだ。序文がある。

私は廬山^{ろざん}に遊び、南に北に歩いて十五、六の奇勝を得た。ほとんど言葉で記述できないほどのものばかりで、しかもものぐさであるために詩を作らなかった。ただ最も優れたところを選んで二首の詩を作った。

開先^{かいせん}禪院の漱玉^{そうぎょく}亭

高い巖^{いわお}に赤い日が下ると、

深い谷に悲しげな風がやってくる。

てん てい せいぎょ(きょう)

天帝は青玉峽を押し開き、

二匹の白い竜(滝)を飛び出させた。

水しぶきが乱れ飛んで霜や雪を散らし、

神さびた滝壺の中で大空が揺れる。

溢れた水は声も立てずに滑らかに流れ、

二つの岩に挟まれた谷へと瀉そがれる。

私はここに來たまま立ち去ることができずにいると、

吊り橋の東に月が昇り、

そうぎょくてい はるかなはるか

漱玉亭が蕩々な白銀の輝きを発し、

ふけゆく すいしゅう

沈沈なかで水精の宮殿に化す。

そうだ、琴高先生(琴の名手であった古の仙人)に随って、

赤い鯉にまたがって水の世界に消え去ってしまうおうではないか。

蓮の葉を手に取り、ふわりと跳んで、清らかな滝壺に飛び込むのだ。

せいいけんけん さんきょうきょう

棲賢谷の三峡橋

私は聞いている、

たいざん

泰山の尖った岩は、

日々に糸のような細い流れによって穿たれたものであると。

今ここに見るのは、

百の雷が一度に落ちるような音を立てて、
万世にわたって滝が岩と闘ってきた結果である。
深さは地の底を九回も突き抜け、
険しさはかの三峡^{さんきやう ちやうこう}(長江の大峡谷)をも凌ぐであろう。
とこしえに尽きることのない溪川^{たにがわ}は、
底なしの寶^{あな}を満たそうとし続けている。
跳び跳ねる波は潜む魚を空に翻らせ、
どよめく響きは飛ぶ猿をも落としてしまう。
ぞっとする寒さは山の骨髓にまで入り込み、
草も木もことごとく堅く尖っている。
煙る霧^{くも}が空濛として立ち込めるなか、
湏洞^{こうどう}として音楽を奏するような音も聞こえる。
彼方に、吊り橋が彎彎^{わんわん}として垂れ下がり、
半月が激激^{れんれん}として弓を張った形で昇ってくる。
玉淵潭^{ぎょくえんたん}は神竜のすまいに近く、
晴れた昼にも雹が乱れ飛ぶ。
そこに瓶^{かめ}を垂れて清く甘い水を汲もう。
それは呑むべきであって、
隠者を気取って口を漱ぐ^{すす}べきではない——
ここは私などがいてよい場所ではないのだから。

(この2首は杜甫や韓愈の詩を踏まえて、天下の絶勝を詠んだ雄篇とされるが、難解な語句が容赦なく連射され、現代のわれわれにとってはあまり興味を誘うものではない。この訳文は、その難解さを8割方削ってひどく薄味にしている)

■題西林壁

廬山の西林寺の壁に書いた詩。

横から見るなら嶺(山の連なり)を成し、
側面からなら峰(ひとつのピーク)を成す。
遠近も高低もおのおの同じではない。
廬山の真面目を識らずにいるのは、
ただこの身がこの山中にあるからだ。

((1) 蘇軾が廬山で詠んだ傑作として人口に膾炙しているのは、上に見た蘇軾が力を傾注した難解な長編ではなく、この短く平易な詩である。「不識廬山真面目、只緣身在此山中」(廬山の真面目を識らざるは、只身の此の山中に在るに縁る)は、物事に渦中にある人にはかえって問題の本質が見えないという意味の成句として、現代の中国においてよく使われている。(2) この詩を読むと、かつて杭州で詠んだ「朝方には呉山が横に並ぶのを見て、夕方には呉山が縦に並ぶのを見る」という句が想起される(第4章89ページ)。蘇軾は常に物事をさまざまな角度から相対的に見ているのである。(3) 廬山を巡り始めたときに「廬山の面をよくよく識るなら」と詠んだ句(本章16ページ)と合わ

せて見ると、いっそう興味が湧くであろう)

■贈東林総長老

廬山には西林寺と東林寺があり、晋の時代の高僧慧遠は廬山に入って初めに西林寺に住み、後に東林寺に移ってからは二度と山を出なかったという。慧遠が入山したことで、廬山は中国仏教の一大聖地となった。これは東林寺の長老の常総に贈った詩。

溪の声はすなわち広長舌(仏陀の説法)、

山の色は仏法を得た清浄身に他ならない。

夜の間に私は八万四千の偈(真理)を聞いた。

いつの日にかこのことを人に挙げ示すことがあるだろうか。

(「八万四千の偈」を長老から教わったのではない。溪の音、山の色から得たのである。

そのことは誰にも示すことができない(言葉では伝えられない)のである)

■書李公択白石山房

蘇軾は筠州に行く途中で李常の故郷の家を訪ねた(本章4ページ)が、廬山には李常が若いときに籠って勉強に励んだ山房(白石庵)があり、そこも訪ねてこの詩を詠んだ。

(李常の山房について蘇軾が記した「李氏山房蔵書記」をすでに見ている(第4章128

ページ)。それは李常の依頼で書いたもので、ここで初めて実地に山房を見たのである)

たまたま流水を尋ねて険しい坂を登ると、

あお ごろうほう
蒼い五老峰が笑い顔を見せてくれる。

もしも、仙人に出会ったら、

貴君^{りじょう} (李常) への伝言を頼みたいものだ。

ろざん
「廬山の先生よ、

もう頭の上が白いのだから、

早くここに帰ってきたらよくはないかい」

(「李氏山房蔵書記」に書かれていたように、李常の白石庵は、蔵書九千巻とともに昔通りに残されていた)

■同年程筠徳林求先墳

蘇軾の行く手には必ず誰かが待ち受けていた。黄州から怪石^きを贈った帰宗寺^{そうじ}の仏印禪師^{ぶつゐん} (了元^{りょうげん}) (第6章 291 ページ) とも会い、ようやく廬山^{ろざん}を出たのは5月末ないし6月初めだった。山の北麓^{ちようこう}から長江を目指し、その途中で程筠^{ていいん} (字は徳林^{あざな とくりん}) を尋ねた。程筠は同じ年に科挙に合格したいわゆる「同年」の間柄で、その依頼で先祖の眠る墓所に建てた思成堂^{しせいどう}と帰真亭^{きしん}のそれぞれについて詩を詠んだ。後者だけ訳す。

き しん て い
帰真亭

昔の人(孔子)は、

桓司馬^{かん し ば}が自分自身のために立派な石の棺を用意しておこうとして、

三年かかっても完成しないのを笑った。

今の人(程筠)は、

自然の石をそのまま墓標^{ていまい ぶ}とした鄭大夫を師としている。

貴君は父祖が亡くなってから悲しみの内にあり、

歲月^{げつ}の流れ徂^ゆくのさえずらずにいる。

楸^{ひさぎ}や 梧^{あおぎ}が空しく老木となりゆく下で、

父祖を祭る礼法を昔のままに守り、

畦道の名も父祖が名付けたままに用いている。

梢^{こずえ}の先に見えるあの石碑のもとに行き、

貴君が記した千字の文を読むとしよう。

(「千字の文」とは父祖の事績を記した文章である)

■陶驥子駿佚老堂二首

陶淵明^{とう えん めい}は廬山^{ろ ざん}の北、尋陽^{じんよう} (江州) ^{こうしゅう}の人であった。蘇軾^{そ せき}は尋陽に行き、その地に住む同姓の陶驥^{とう き} (字は子駿^{あざな し しゅん}) のもとを訪れ、この詩を詠んだ。陶驥^{いつろうどう}は佚老堂^{いつろうどう}を建て、退隱生活を送っていた。

其の一

後漢の時代に孔融と李膺が初めて会ったとき、

「我等は孔子(孔丘)と老子(李耳)以来、先祖代々の旧い馴染みでありますな」と言った。

まして、私は陶淵明を師と仰ぎ、先生はその子孫である。

先生はまさしく陶淵明その人——

わずかな俸禄のために我が身を縛られまいと、

官職に留まって歳月をいたずらに過ごすことをしなかった。

私は「帰去来の歌」を歌う——

陶淵明は千載を隔てたまことの尚友(偉大な古人の友)である。

これまでは書物の中でのみ師と会ってきた、

それはこうして先生と酒を酌み交わすのにはとても及ばない。

先生はお酔いになられたので、私はひとまず帰るけれども、

明朝また来ることをお許し下さるであろうか。

((1) 後漢時代の有名な賢者である孔融と李膺は、孔子(孔丘)が老子(李耳)の弟子であったとの伝説に基づいて、我等(孔氏と李氏)は遠い先祖からの師弟関係にあると言った。(2) この詩にいう「帰去来の歌」とは、陶淵明の「帰去来の辞」を音楽に合わせて歌えるように蘇軾が作った「哨遍」の詞のこと(第6章266ページ)。(3) この詩の終わりで、陶驥が酔ったようだから帰りますと言ったのは、陶淵明の詩に、「わしは酔ったので君は帰りなさい」という句があるのを踏まえている)

其の二

私は廬山ろざんを出たときに、

山に向かって飛ぶ一つの雲を見送った。

すると、道ではったり陸道士りくに出逢い、

これは千年前の人であると知った、

陸道士がこのようなことを言ったからだ。

「あのころの友はいなくなっていましたなあ。

なつかしい虎溪こけいも塵のように消え去りました。

ただ佚老堂いつろうどうには幾世を隔てた子孫がいます。

陶淵明のように五字の詩をよく作り、

頭には酒を漉すための頭巾を載せています」

世間の人は先生のことを「小靖節しょうせいせつ」(靖節は陶淵明の諡おひな)と呼んでいるけれど、

先生自身は「葛天氏かつてんの民」(葛天は上古の帝)と号している。

(この詩は慧遠えおん (本章25ページ)の有名な故事を踏まえて作られている。慧遠とうりんじは東林寺

に籠って仏道を修め、寺の前の川、虎溪こけいにかかる橋を越えることがなかった。ところが、

友人の陶淵明とうえんめいと陸修静りくしゅうせいが訪ねてきたときには、話に夢中になっていつの間にか虎溪の

橋を渡ってしまい、3人で大笑いをした。これを「虎溪三笑こけいさんしょう」という。廬山から尋陽

にくる間にたまたま陸姓りくの道士に会ったのをおもしろくこの詩に詠み込んだのである)

■和李太白

じんよう こうしゅう

尋陽（江州）で道教の寺院を訪れ、この詩を詠んだ。序文がある。

李白に「尋陽の紫極宮で秋に感じる」という題の詩がある。紫極宮はいまの天慶

観である。天慶観の道士の胡洞微は、李白のその詩を刻んだ石を見せてくれた。

胡洞微の師の卓珣が刻んだものである。卓珣はすでに亡くなり、道術に優れ、節義は人を超えるものがあつた。李白の詩に「四十九年非（四十九年は間違っていた）、一往不可復（ひとたび往って復することはない）」とある。私もまた四十九歳である。このことに感じて李白の詩に次韻する。

胡洞微は玉芝を植えて育てている。玉芝は一名瓊田草という。植えて七八年になり、「さらに数年も育てれば食べられるようになります」と言って私に贈ってくれた。そのことも合わせて書いておく。

（李白の詩にある「四十九年は間違っていた」の句は孔子と同じ時代の蘧伯玉の言葉
を踏まえたもので、第6章 466 ページでも見ている）

てんけいかん きょせきどう

天慶観の虚寂堂に身を寄せて臥す。

月の明りがまばらな竹を浸し、

冷や冷やと我が心を洗う。

我が身の内に月の光をおさめたくて、

それを飲もうとしたけれど、手に掬えない。

流れる光に永く嘆息するのは、
私一人だけではなく、昔からのことだ。

四十九歳だった李白が、
この北向きの窓の宿へと、
私に化してまた還^{かえ}って来たのか。

緬^{はるか}に懐^{おも}うのは卓道人^{たく}(卓^{たく}玘^き)、

医者や易者の間にあつて(仙人であることを隠して)老いたのだらう。

仙界から謫せられたという李白はさらに遠くの人、
もとよりまた来ることなどはない。

世間は碁のようなものか、
変化を極めて同じ局面がまた現れることはない。

ただ玉芝^{ぎょくし}はきっと老成し、
待てば蟠桃^{ばんとう}(仙界の桃)も熟すであらう。

(1) 昔の人の詩にも次韻するのは、次韻の達人である蘇軾が始めたことであるらしく、後に陶淵明^{とうえんめい}の詩に和したものを多数見ることになる。李白^{りはく}の詩に和したこの詩は次韻の通弊として、もとの韻の位置に制約されてややごたごたした構成になっている。陶淵明の詩に和したものは、次韻の詩であることを全く意識させないほどに完成度が高い。(2) この詩に「世間は碁のようなもの」(世道^{せどう}は弈棋^{えきぎ}の如し)とあるので、蘇軾が碁について語ることはないようだと第6章173ページで記したのは訂正しなければならない(先に碁石の音を詞に詠んでもいた)。碁の局面には幾通りの変化があるのかと

いうことを同じ時代の人が計算している。宋は科学や技術においても当時の世界の最先端にあった)

■次韻道潜留別

こう
黄州を一緒に発った「異人」^{いじん}たち(第6章496ページ)で最後まで一緒だった参寥師^{さんりょう}(道潜^{どうせん})とも長江^{ちょうこう}のほとりで別れた。そのときに参寥が詠んだ詩に次韻した。

ろざん
廬山に真の隠者が大勢いると貴僧から聞き、
こうじん
私は高人に就いて俗世間との縁を断とうとした……。

喜ばしく思うのは、

禅の心を得た貴僧には、別れの言葉などはないということ。

それでいながら、

詩作にあまりにも打ち込んで髪がまばらになってしまった昔の人のことを、

貴僧は剃髪していながらなぜか気にしている。

疑うことがないのは、儒、道、仏の三教も実は一つであるということ。

我も物もついには無に還るのである。

じょ
私はこれより汝州に行く――

いつか北に開く窓を開けて、

すうざん
貴僧とともに嵩山の三十六青山を見るであらう。

（(1)「儒、道、仏の三教も実は一つ」の原文は「異同更莫疑三語」(異同 更に三語を疑う莫し)で、三教は根本において同一であるとした議論は疑う余地がないということ言っている。欧陽脩や蘇軾が文章の規範として仰いだ韓愈は、衰微してしまっていた儒学のルネサンスを目指して特に仏教を排撃したので、この点では考え方が非常に違っていた。宋代は三教の融合を特徴とする時代であった。(2) 参寥との間で交わされる詩は、仏教の専門語を多用していつも難解である。この詩も、新しい赴任地である汝州で再会しようと詠んだ終わりの部分以外は、見当はずれの訳である恐れが大である。

嵩山は古来有名な名山で、洛陽と汝州の間にある

■石鐘山記

廬山の東側には巨大な鄱陽湖(古くは彭蠡沢といった)がある。蘇軾は長江を少し下ってから、その支流を遡って鄱陽湖のとば口まで行った。鄱陽湖を訪れたのは珍しい風光を見るためだけではなく、この「石鐘山の記」に記されている。

『水経』(河川について記した漢代の地理書)にこう書いてある。

「彭蠡(鄱陽湖)の口に石鐘山がある」

(『水経』に注を付けた)酈道元はこれについてこう書いている。

「下に深い潭を臨み、微かな風が浪を鼓すと、水と石が搏ちあい、洪鐘のような声がする」(だから「石鐘」の名がある)

この説を人々はずっと疑ってきた。鐘や磬(打楽器の一種)を水中に置いて、たとえば強い風が大きな浪を起こしたところで、鳴らすことなどできない。まして石がどうして鳴るのか。

唐代に至って李渤はこの歴史的遺跡を訪れ、潭の上で二つの石を得た。扣いてその音を聆くと、南の石の声は函胡(と濁り)、北の石の音は清越(と澄み)、桴が止まっても響きが騰がり、余韻がしばらく続いてから歇んだ。李渤はこれでわかったぞと思った。

しかし、この説を私は最も疑う。鏗然と声を立てる石ならどこにだってある。ここだけが「鐘」をその名としているのはどうしてなのだろうか。

元豊七年六月丁丑(九日)。私は齊安(黄州)から舟で発ち、臨汝(汝州)に適いつつあった。長男の邁が饒州の徳興県の尉として赴任することになったので、送って湖の口に至った。そこでいわゆる「石鐘」とされているものを観た。寺の僧や小童が斧を持ち、そこらに乱れ散る石の間から一つ二つを選んで扣くと、砢砢と鳴った。私は笑って、もとより(それが石鐘のいわれのものであることを)信じなかった。

その夜、月が明るく、私は邁と二人だけで小舟に乗り、絶壁の下に至った。大きな岩が側き立つこと千尺、猛獸か奇鬼のようで、森然として人を搏たんばかりであった。山の上に鵲が棲み、人の声を聞いて驚き起ち、磔磔と雲の間に鳴いた。老人が山の中で歔をし笑っているような声かし、ある者(船頭)が「あれは鸛鶴です」と言った。

私は心が動揺し、還ろうとした。すると、水上に大きな声が生じた。噌吰と鐘や太

鼓のように鳴りやまない。船頭は大いに恐れた。徐ろに観察すると、山の下にはどこも岩の穴罅があり、その深さはわからない。微波が穴に入ると、涵澹澎湃として音を立てるのであった。

舟が回って二つの山の間に至り、入り江に入ろうとすると、流れの間に大きな岩があった。その上に百人が座れるほどで、中はがらんどんで、たくさんの竅があり、風や水が吞まれたり吐かれたりするたびに、窾坎鏜鏜という声かした。これが先の噌吰と応じて音楽のようになるのであった。

私は笑って邁に言った。

「おまえに識るかい。噌吰というのは周の景王が造らせた無射の鐘の音と同じなのだ。窾鏜というのは晋の魏献子が賜った歌鐘の音と同じなのだ。古の人が『石鐘』と言ったのはまさに正しかったのだ」

この目で見てこの耳に聞くことをしないで、ある事柄をあるとかなないと臆断するのはよろしくない。酈道元が見聞きしたのは私とほとんど同じであったのだろう。ただしその記述が詳細ではなかった。世間の士大夫は夜に絶壁の下に小舟を止めるということをしなかったので、きちんとしたことを知ることがなかった。獵師や船頭は知ってはいても、それを世間に対して言うことがない。それで世に真相が伝えられなかったのである。陋な者が斧でもって石を撃って音を立て、その事実を得たと思いついていたのだ。だから私はここにこのことを記した。

つまるところ、酈道元の記述が簡潔でありすぎたのを残念に思い、李渤の陋なのを笑うのである。

(蘇^そ軾^{まい}は長男の蘇^そ邁^{まい}を見送るとともに、『水^{すい}経^{けい}』に書かれていることの真偽を確かめるために鄱^{はよう}陽^こ湖^こを訪れたのである。蘇^そ邁^{まい}は、蘇^そ軾^{まい}が湖^こ州^{しゅう}で逮捕されて以来ずっと父のそばにあつて支えてきたのだが、ここに書いてあるように、徳^{とく}興^{こう}県^{けん}の尉^{じょう}として初めて官の仕事に就いた。尉^{じょう}というのは地域の治安に関わる職で、警察部長レベルであるという。蘇^そ邁^{まい}は、高官の子弟は科挙に合格していなくても官職に就けるという特典によってこの職を得たので、蘇^そ軾^{まい}がいきなり州政府の幹部になったのとはかなり異なる官界デビューとなった)

■文先去取失当

長男の蘇^そ邁^{まい}と別れた蘇^そ軾^{まい}は、長^{ちやう}江^{こう}に戻って東へと下り、その船の中で、『文^{もん}選^{ぜん}』を読んでこの感想を記した。『文^{もん}選^{ぜん}』は南北朝時代に編集され、その時代までの主要な文学作品を収めた非常に価値ある書物として長く尊ばれ、日本でも奈良・平安時代の貴族の必読書とされた。しかし、蘇^そ軾^{まい}の評価ははなはだ低いというのがこの短文である。

舟^{ふね}の中で『文^{もん}選^{ぜん}』を読んでいる。残念なことに、その編集は無定見で、取捨選択がまるで当を得ていない。(南朝の)齊^{せい}朝^{てう}、梁^{りやう}朝^{てう}の文章は衰えてだらしく、(『文^{もん}選^{ぜん}』の編者の)蕭^{しょう}統^{とう} (昭^{しょう}明^{めい}太^{たい}子^し)の文はひどく冴えない。『文^{もん}選^{ぜん}』の序文を見るがよい、李^り陵^{りやう}の文章や蘇^そ武^ぶの五言詩は偽物であるのに、その見分けすらつかないのだ。いま陶^{とう}淵^{えん}明^{めい}の詩集を見ると、喜ぶべきものが非常にたくさんある。しかし、『文^{もん}選^{ぜん}』

には数首しか取られていない。そのことだけからしても、ほかの人の作品で漏れたものが非常に多いことがわかる。『文選』に収められている陶淵明^{かんじょう ふ}作の「閑情賦」は、『詩経』の「国風」の詩が「好色であるが淫らではない」と評された通りのもので、『詩経』の中でも本当に立派な周南^{しゅうなん}の詩には及ばないのである。屈原^{くつげん}や宋玉^{そうぎょく}の辞は「周南」の類であるのに、蕭統はそれをけなしている。子供が無理に知ったかぶりをして偉そうなことを言っているだけなのだ。

げんぼう

元豊七年六月十一日記す。

(1) 『文選』の序文をけちょんけちょんに叩いて痛快である。『文選』に収録されている李陵^{りりよう}の文章や蘇武^{そぶ}の詩は後人のでっちあげであることは定説になっているし、『文選』に収められている「閑情賦」は陶淵明^{かんじょう ふ}の作品でも特に出来の悪いものだ。蘇軾^{とうえんめい}のこの感想は現代のわれわれの感覚にほぼ合致し、『文選』はあまり興味を誘わない退屈なアンソロジーである。(2) 『詩経』について述べているのは第6章 437 ページを参照。『文選』は本物を選び損なっているというのである。(3) この短文と同じ時期に、李白^{りはく}のものとされるいくつかの詩を読んで偽作であると断定する文章も書いている。蘇軾は自分の見識眼に相当に自信があったが、ときに間違ふこともある)

■郭祥正家醉画竹石壁上郭作詩為謝且遺古銅劍二

船は長江^{ちやうこう}を下って当塗^{とうと}に至った。詩題は「郭祥正(字は功夫)の家で酔い、石壁の上に竹を画いた。郭祥正はその謝礼として詩を作り、二振りの古い銅劍を贈ってくれた」。

酒を得ると、
空っぽだった我が腸^{はらわた}に、何やら植物の生氣^{せいき}が生じ、
肝臓や肺臓から、もそもそと竹が伸び始める。
林を作らんばかりの勢いとなり、
もはや止めようがなく、
貴君の家の、雪のように白い壁に向かって、
ぱっと吐き出す。
普段から私は詩を好むだけでなく、
画も好んで、塀や壁を汚したりしてしまうので、
いつも罵られてばかりいる。
怒られなければそれだけで十分にお釣りがくるのに、
謝礼までくださったりするのは、世間に貴君のほかにいない。
ふたふりの銅剣は秋の水の光を発し、
二首の新詩は切っ先の鋭さをその剣と争う。
いま剣は我が傍らに置かれ、詩は我が手の内にある。
さてさて、竜のように吼えるのは、
銅剣であろうか、詩を吟唱する貴君であろうか。

■竜尾硯歌

とうと ほうげんとく
当塗では方彦徳にも会い、この詩を作った。序文がある。

私はかつて「鳳唼石の硯の銘」を作った。そこに、「私は鳳唼の硯を一目見て、竜尾の硯も、この硯の前には牛尾になってしまうと恥ずかしがるであろう」という趣旨のことを書いた。後に歙州の硯を求めたところ、歙の人から、「あなたには鳳唼の硯があるではありませんか。その上何をお求めになるおつもりなのですか」と言われてしまった。きっと鳳唼の硯を褒めたのが気にさわったのだろう。

ほうげんとく
方彦徳は竜尾の大きな硯を持っている。非常に優れたものだ。方彦徳は、「詩を作って前言を撤回するなら、この硯をさしあげましょう」と言った。そこでこの詩を作った。

(固有名詞がいくつもあってかなりごちゃごちゃしているので整理しておこう。歙州の硯(歙州硯)は天下に知られる名品である。歙州硯の一つに竜尾山の石で作られる硯がある。その竜尾の硯よりも、別の産地(剣浦県)の硯の方が優れていると書いたのが、「鳳唼石の硯の銘」である。その銘には、「竜尾」と「牛尾」(原文は「牛後」。すなわち「鶏口となると牛後となるなかれ」の「牛後」)をかけたかなり皮肉なジョークがあった。それは歙州硯を愛する者にとっては笑ってすまずわけにはいかないものだったのだろう)

ぎよく こはく
黄色い玉も透明な琥珀も、

天はそれを出し惜しんだりしない。

天が恐れるのは、

凡夫が貪って死んでも手放すまいとすることだ。

りゅう び

竜尾は単なる石材ではない。

ぎょく きん
それには玉の徳と金の声が宿っている。

その徳と声から天が石を作ったのはいつだったのか。

人が初めてその石から硯を作ろうとしても石は嫌がらなかった。

ほうしょう しゃれいうん

鮑照や謝靈運といった詩の達人が、

その硯を詩に詠んだところで石は気にも留めなかったし、

しょうよう おう ぎ し

鐘繇や王羲之といった書の達人が、

その硯で筆を使っても石は知らん顔であった。

錦で包もうが、玉飾りのある箱に納めようが、極美の石の机に置こうが、

ちりあくた
石にとっては塵芥の中にあるとの変わりはない。

そ ほうしゅ せき
まして蘇先生が「鳳唼石の硯の銘」を作って、

ぎゅう ご
戯れに「牛後」の語で嘲ったところで、怒ったりするはずもない。

竜尾の硯に水を湛えるなら、

碧い天を映し、雲を吹く風が生じ、

窓辺からも机の上からも塵が消えてあたりは清らかになる。

それでも石は言うだろう。

「わしは天地の間に生まれ出た一つの余り物でしかない」

でたらめ
蘇先生は支離な人間で、

行きあたりばったり、大きなことも言えば、ちまちましたことも言い、

筆を持って書くのは、春の蚓か秋の蛇がのたかった跡である。

どうば
東坡老人が何を言おうとほったらかしにするがよい。

じんしゃ
仁者は細かい是非を問うことなどしないのだ。

(蘇軾はのらりくらりと弁を弄し、はっきりと前言を撤回したのではなかった)

■張近幾仲有竜尾子石硯以銅劍易之

りゅうび 竜尾の硯も ほうしゅ 鳳味の硯の前では ぎゅうび 牛尾になってしまおうと ざごと 戯れ言を書いたことのある蘇軾だが、その実、竜尾の硯に御執心であったというのがこの詩。

ちようきん あざな きちゅう りゅうびさん しせき
張近(字は幾仲)が竜尾山の子石で作った硯を持っていると知り、手持ちの銅劍と交換しようと申し出た。

(この詩を詠んだ時期は必ずしも明らかではなく、類をもって前の詩に続けて訳すが、詩中で「せつどう雪堂」に言及しているので、こう黄州で詠んだのかも知れない。銅劍はもしかすると鄭文から贈られたもの(第6章83ページ)なのか、あるいは上で竹の画の謝礼にもらったものなのか)

我が家の銅劍は赤い蛇のようだ。

せきけん あお たま
貴君の家の石硯は蒼い壁のようで、窪んだ楕円形をしている。

貴君が我が銅劍を得たなら、どこに行くのか――

劔の飾りをがちゃがちゃ鳴らしつつ、唐朝とうちょうの宮殿をのっしのっしと歩くのだ。

私が貴君の硯を得たなら、何に使うのか――

雪堂せつどうの窓の下で、古代の詩歌をさらさらと写すのだ。

銅劔も石硯も、この世に存在するものとしては、

人と異なることはないし、風に随う花と同じく、

高くひるがほに飄ったり、下に落ちたりする。

劔を飾るのが草であろうが宝玉であろうが、

いずれにしても劔自体とは関わりのない外物であり、

皇帝の詔を書こうが道家どうかの教理を書こうが、

どちらにしても硯自体にとっては価値に違いはない。

誰もが知っているように、

昔しん、秦国の王は趙国ちようこくが有する宝玉が欲しくて十五の町と交換しようと申し出た、

趙国りんしょうじょの藺相如は秦国に乗り込んでその偽りを見抜いて宝玉を守り抜いた、

昔ほう、鮑という男は、親戚いの韋君が乗る二頭の馬が亡くなり、

家にいる二人の歌妓と交換したところ、女も馬ももとの家を思っ泣き続けた。

そうした交換に比べたら、

銅劔も石硯も同じく無情のもの、釣り合うのではなからうか。

永よしみく好を結ぼうではないか。

（この詩に応じて、張近は蘇軾に硯を贈るとともに、詩を添えて銅劔を返却した。その詩にさらに応じた蘇軾の詩があるのだが、解し難いところがあって、残念ながら訳出す

ることができない。ついでながら、この詩には以下のような跋文が付してあったともされる。

私は若い頃は、人が声色を好むように書画筆硯の類を好んだ。大人になるにつれて自覚が生まれ、老いてからは己を笑い、この病はもうなくなったように思った。ところが昨日、張君の卵石の硯を見て、この病がまた萌え出て、ついに剣と交換した。硯を手にとると、果たしてこれに何の益があるのだろうか、己の習性を除き尽くすのは難しいと知ったのだった。

いかにも蘇軾が書きそうなことではあるが、偽筆であるとの説もある)

■眉子石硯歌贈胡閨

硯を詠んだ詩をもう1首見ておこう。眉のような形をした硯「眉子石硯」の歌。胡閨という人に贈った。蘇軾の遊び心が充満した詩だといえるだろう。

誰もが知っているように、

唐の玄宗皇帝は成都の画家に命じて「十眉図」(女性の眉の十種のモードを写した図)を描かせた。

「横雲」とか「却月」とか名付けられた眉の新奇を競い合っていた。

風流人は、少々顰める眉(楊貴妃のこと)を描いた図を指さし、

ここに漁陽(反乱を起こした安禄山の根拠地)の馬の嘶く声が潜んでいたのだと言う。

やはり誰もが知っているように、

卓文君は青い扉の細い隙間に碧の眉を寄せ、司馬相如(漢の時代の成都の人)の姿を盗み見た。

司馬相如は卓文君に見染められてその運命が決まってしまう、色に迷って健康を害し、千金を費やして薬を買わなければならなくなった。

司馬相如や楊貴妃に所縁のある蜀の地では、とかく女性の眉のために天帝が憂うほどに騒乱が続いたので、眉を流罪に処し、

貴君の家に伝わる硯に閉じ込めたのだった。

その眉が、小窓の薄い幌の下で流し目を使い、暁の夢に貴君の顔を赤く染めさせようとしたところで、

古の維摩居士のように空を談じる貴君であるから、

いかなる花が飛びかかったところで衣に触れることさえできないのだ。

試みにこの硯で天女に墨を磨らせてみるがよい、

貴君はたちまち千の偈を書くであろうけれど、

その実、そこには一語もないである。

(1) 詩は成都つながりで、漢代の文人の司馬相如を引き出してくる。司馬相如が色に迷って健康を害したというのは不確かな伝説である。(2) 詩の後半で、硯が流し目を使って胡閨を誘惑すると想像するところは、異界の女性と恋に落ちる中国の伝奇小説に

よくあるパターンと類似する。(3) 結びの句は、真理を伝える言葉はいかに多言であっても実は無言であるということ言っているのだろう)

■張庖民挽詞

蘇軾は6月末頃に金陵きんりょう（現在の南京なんきん）に到着した。金陵は南北朝時代に長く南朝の都が置かれ、また五代十国時代には南唐国なんとうの都が置かれた由緒ある大都市である。蘇軾はしばらくここに滞在して様々な人々と交流した。

詩題にある張庖民ちやうほうみん（字は翔父あざな）は金陵の人で、2年ほど前に他郷で亡くなり、黃庭堅こうていけんがその死を悼む詩を作った。誰かがその詩を蘇軾に見せ、張庖民の挽歌を作るよう頼んだ。この詩はさほど興趣を誘うものではないが、頼まれれば断らずに、それなりに巧みに応じるという蘇軾の義理堅さを知ることができるであろう。

ちやうほうみん

張庖民は、

しん どうえんめい かん どうほうさく
晋の時代の陶淵明、漢の時代の東方朔のような人――

心安らかに山水に向かい、文章を作ることに長じ、

こうこう ふくろ うんや
侯公の地位などは軽んじ、囊いっぱいふくろの錢うんやも羨んだりしなかった。

天から与えられた才能が高い人は鬼神に憎まれるというけれど、

骨が朽ちてもその名は永久に芳しい香りを残す。

張庖民が葬られた地は暗く閉ざされた遠くにあり、

きんりょう

金陵の旧宅は荒れたままになっている。

張庖民を偲ぶ人々よ、

私のこの詩は刻むまでもない、

こうていけん

優れた哀悼の辞をすでに黃庭堅が作っているのだから。

■次韻段縫見贈

だんほう あざな やくし

段縫（字は約之）から贈られた詩に次韻した。段縫は州知事などを歴任

きんりょう

し、このころは政界を退いて金陵にいた。なお金陵の南郊には5年前か

おうあんせき

ら王安石が隱棲し、段縫と親しくしていた。

戦国時代に全国を遊説してまわった策略家の蘇秦^{そしん}だって、

らくよう

洛陽の近くによい農地を持っていたなら、

代々の家業に打ち込んでいたはずだ。

蘇秦の知恵をもってすれば、

にん

五十本の薤を植えることから始めて、

ついには三百軒分の稲を収穫するようになったであろう。

きんりょう

金陵の町の北、貴君の隣で農耕に励めるのなら、

じょ

私はきっと(洛陽の近くの汝州に行くことはおろか)故郷に帰ることも忘れて、

ここで老いるであろう。

たん い ひつ ば

短衣匹馬(世の中に使役されること)は元来、吾が事ではない。

門を閉ざし、吾が運命を虚心に天に問うまでもないのだ。

そ しん

(1) 蘇秦は「わしは農地も持たぬ貧乏人であったから、六つの国から宰相並みに遇されるまでになった」と反語的に豪語した。蘇軾はそれを敢えて逆の意味でここに引いて

たん い ひつ ば

いる。(2) 「短衣匹馬」は、軽装で使役される平民と馬に乗る兵士を指すのだが、ここ

だんほう

では役人もその中に含めている。(3) 恐らく、段縫はその詩でほんの挨拶代わりに、隣に住んで一緒に退隠生活を送りませんかと誘ったのだろう。それは意外にも蘇軾の急所を衝き、この詩には本心が漏れ出ているようだ。これがきっかけとなったかどうかはわからないが、蘇軾はこれから一段と「勉強嫌いの小児」のようになってゆく)

■次韻杭人裴維甫

きんりょう こう

はい い ほ

金陵で杭州出身の裴維甫と会い、贈られた詩に次韻した。裴維甫は蘇軾より2年遅れて科挙に合格した人。

こう

杭州の門の外に葉が舞い飛ぶあの秋を、

私はなおも覚えている、

町の人々は、去り行く私の舟を引き留めようとした。

りん へいざん

私は(杭州西北の)臨平山の上の塔に別れを告げた。

うんほうたく

こう

この五年の間は、雲夢沢の南の州(黄州のこと)をさすらい、

我が心からは、淒涼とした悲歌が生まれた。

貴君との出会いによって、私はしばしここに留まることとなった。

貴君の手づるで、

せい こ
西湖の馴染みの風月に謝りたいものだ――

私はいまそこには行けない、

時に夢の中で遊ぶことを許してほしい……

(こう
蘇軾が杭州を去ったのは10年前の秋だった)

■次韻答宝覺

きんりよう じょうりん ほうがく
金陵の定林寺の宝覺の詩に次韻した。

ほうがく
宝覺師は、

あし きゃはん わらじ
脚に脚絆を巻き、足に芒鞋を履き、そして手には竹の杖、

千山、万山もなんのそのだ。

とうだい ば そ
唐代の禪僧の馬祖は尋ね来た僧にこう尋ねた。

「あんたは何者か」

せきとう
「石頭」

「石の頭は滑る。ひっくり返るぞ」

「ひっくり返っていたら、ここには来ておらぬ」

脚がなければ滑らないし、道の困難を知ることもない。

宝覺師の脚固めは何のためなのか。

ば そ せきとう とう
(馬祖と石頭は唐代の著名な禅僧。その問答を踏まえた戯れの詩。意味はほとんどわからない)

■次荊公韻四絶

さんりよう
金陵滞在中に蘇軾は思い切った行動に出た。金陵の南に隱棲する王安石
けいこう
(荊公)を訪ねたのである。先に見た段縫も宝覺も日頃から王安石と交流
だんほう ほうがく
があり、その縁で訪問が実現したのだろうか。王安石は大改革の立案者であり、それを激しく批判する蘇軾とは政治的に鋭く対立した。それから十
しょう し ぶんけんろく しょうはくおん
数年が経ち、会って何を話したのか。『邵氏聞見録』(邵伯温著)という
書物は以下のように伝える。

おうあんせき そしよく りょけいけい
王安石と蘇軾は初めは何ら隔たりがなかった。呂惠卿が蘇軾の才が高いのを忌み、その
間を割いたのである。

しんそう
神宗皇帝が蘇軾を間近で用いようとしたとき、王安石はそれを難じた。蘇軾は文士である
かいほう
から行政の実際には通じていないだろうと、開封府の副知事にして困らせてやろうとした。
蘇軾は(実務をこなした上で)憚ることなくますます政事について論じ、科举制度の改革に対し
て長文の意見書を提出し、現在の政治は甚だ危うい と警告した。王安石は蘇軾をいよいよ
よろこ
悦ばず、蘇軾は地方官として都を出た。

りてい
李定が王安石によって用いられると、李定が母の喪に服さなかったことをもって、蘇軾は李
定のことを不孝者であるとして憎んだ。李定は恨み、蘇軾は詩を作って朝政を誹謗したと彈
こ ぎょうしだい
劾した。李定は湖州知事であった蘇軾を御史台の獄に下して殺そうとした。神宗皇帝は殺

すに忍^{しの}びず、散官^{さんかん}(仕事のない名目上の職)に落^おとし、黄州^{こう ちゅう}に安置^{あんち}(軟禁)した。

蘇軾^{じょ}が汝州^{きんりゅう}に移ることになったとき、金陵^{きんりゅう}を通り、王安石と会^あって非常^{よちこ}に飲んだ。

蘇軾が、

「某^{それがし}には公^{こう}に申し上げたいことがあります」

と言うと、王安石は表情を変えた。蘇軾がかつてのことを言い出すのではないかと思ったのだった。

蘇軾は言った。

「某^{それがし}が申し上げますのは天下の事です」

王安石は顔色をやわらげ、

「言われるがよからう」

「漢^{かん}朝^{どう}も唐^{たい}朝^{てい}も大兵^{たいへい}(外国と大いに戦火を交える)と大獄^{たいごく}(政敵を政治犯として厳しく弾圧する)が減亡の兆^{さう}となりました。宋^{そう}朝^{ちよう}はその弊害^{あいた}を革^{たい}めようと、太^{たい}祖^そ皇帝^{たいそう}、太^{たい}宗^{そう}皇帝^{たいそう}は仁政をもって天下を治められました。いま西北では戦争を起こし、何年経っても終わりが見えません。東南(都)ではしばしば大獄を起こしています。これを救うために公はどうして何もおっしゃらずにいるのですか」

王安石は手を挙げ、二本の指を示して蘇軾に言った。

「その二事は皆、呂惠卿が始めたことだ。私は朝廷の外にいる者、それらについて何も申すべきではないのだ」

「一般的にはそうでありましょう。朝廷にあるときは政治について述べ、外にあるときには言わない。これは君に仕える者の普通の礼法です。しかし、お上は普通の礼法によらずに公を

特に遇されたのです。公がお上にお仕えするのに、どうして普通の礼法によるのでよろしいのでしょうか」

王安石は語気を強め、

「私に何を言わせようとするのか」

そして、

「私の口から出れば、貴君の耳に入るではないか」

王安石には、かつて「このことはお上には知らせてはならない」と密かに呂惠卿に書いたことを、呂惠卿によって神宗皇帝に明かされてしまったという苦い経験があった(それが失脚の原因の一つになった)。それで蘇軾が^{もら}泄すことを恐れたのである。

王安石はさらに蘇軾に言った。

「不義とわかっていてそれをする。無実の人を殺す。天下を得たとしても、この二つをしないのなら、人としてよろしいであろう」

蘇軾は戯れに言った。

「いまの君子は、半年早く昇進できるのなら、人殺しだってしかねません」

王安石は笑ったが、何も言わなかった。

以上のことを記した邵伯温^{しょうはくおん}は蘇軾より 20 歳年少で、父は著名な学者で司馬光等と親しくしていた。必ずしも事実そのままではないとしても、当時の事情通の間でこのようなことが語られていたのであろう。さらに邵伯温^{しょうはく}の息子の邵博^{しょうはく}が記した(したがって信憑性はより薄れる)『邵氏聞見後録』^{しょう し ぶんけんこうろく}には、王安石は蘇軾に三国時代の歴史書を編集し直すことを勧めたと伝^{おうあんせき}

える。蘇軾が歴史好きで、黄州では赤壁の戦いに材を得た詩詞を詠んでいたこともあって、政争よりも学究に生きるよう言ったのだろう。

王安石と蘇軾は詩を詠み合い、蘇軾は王安石が示した 4 首の七言絶句に次韻した。

其の一

李の葉が青々と繁っている。

そこには自ずと鳥が集まりくる。

清真な王羲之(王安石を指す)が手づから栽えたのである。

深い紅、浅い紫、様々な花が争って咲き、

白い鷺、黄色い鵝鳥も翼を広げる。

(王安石の住まいの様子を美化して歌った)

其の二

先生は、

竹を斫り、花を掘り去り、緑の苔を破ってこの庭を造られ、

檀の苗木を得るために、詩を作るまでした。

造物者のするところを仔細に見るなら、

初めから物を造ろうとの意思などはなく、

万物は自然に生まれ出たのだった。

こうなん
春が江南に到るとき、
花は自ずと開くのである。

其の三

る ば の はる ばる ぬまち
驢馬に騎って、私は渺渺と荒れた陂をやってきた。

想い見るのは先生がまだ病気になる前のとき。

先生は三畝^ほの宅(小さな家)を求めてみてはと勧めてくださる。

しかし、先生の教えに従うのは十年遅かった……。

(金陵の町から王安石の住まいまで数キロの道のりであったという。王安石はこの年の初めに病気になり、神宗皇帝が侍医を派遣したほどであったが、このころには回復していた。10年という数字は概数で、王安石が提唱する改革を蘇軾がさかんに批判したころに遡って、腹藏なく議論したかったというのである。もしもそうしたことが行われていたならば、その後の展開は大きく異なっていたであろう)

其の四

立派な屋敷があったところで真に我が物ではない、
趣のある花にしてもまたま栽えたうだけのものだ。

先生は家を仏寺に替えて清浄の場として供し、
仏道を求める人のために門を開いている。

おうほう
(王安石は、長男の王雱を喪うと政治的意欲が急速に薄れ、政界を引退する一因になっ

たといわれる。その王雱の菩提を弔うために私宅を仏寺にしていた。王安石は2年後に亡くなっているので、蘇軾のこの訪問は唯一無二の機会を生かしたものであった)

■同王勝之遊蔣山

金陵きんりやうの東に風光明媚な蔣山しょうざん（鐘山しょうざん、現在名は紫金山しきんざん）がある。標高448メートルで、中国の国家重点風景名勝区の一つに選ばれている。蘇軾は政界の大先輩である王益柔おうえきじゆう（字は勝之あざな、このとき72歳しょうし）とともに蔣山に登り、この詩を詠んだ。王益柔も王安石の改革を強く批判した一人であった。

貴君きんりやうは金陵に赴任してきたものの、
 席の暖まる間もなく、新たな辞令によって他郡に移ることになり、
 この地の人々は口をあぐり開けて呆然としている。
 町から十里足らずのところにすばらしい山がありながら、
 行かずにおいたならばこの先ずっと悔いが残るであろうと、
 貴君きんりやうは南朝時代の寺を敲いて廻ることにした。
 私も小舟に乗せてもらって一緒に山に向かうと、
 かつて高貴な人々が朱色の門を並べていたところは、
 仏寺に代わって紺色の門を連ねている。
 舟を降りると、道の両側には高々と松が聳え、

山裾が斜めに傾いて人を出迎えてくれる。

しょうざん

蔭山は古くゆかしい国に竜のようにわたかまり、

山の重なりの上に鳥の爪のような峰が抜きこんでいる。

こずえ

竹の杪の先に、飛ぶようにして屋根が見え、

松の根もとに細い泉が湧き出ている。

多数の山が巧みに日を支えているかのようであり、

ちょうこう

遠く長江は天に浮かんでいるかのようだ。

丸木橋が秋の水の上に横たわり、

高い塔の先端に夕暮れの靄がまつわりつく。

帰るときになって、己の影を踏んだので、

ふと見ると、ちぎれ雲の間に細い月がある。

(この詩のなかほどでは多数の比喩的表現を並べている。日本語に訳すと「~のようだ」の連発となつてかえって単調になってしまう。「多数の山が巧みに日を支えているようであり、遠く長江は天に浮かんでいるかのようだ(峰多巧障日、江遠欲浮天)」の句を

おうあんせき

王安石が称賛し、この詩に次韻している)

■去歳九月二十七日在黄州生子名遯小名幹兒頎然穎異至今年七月二十八日病亡於金陵作二詩哭之

きんりょう

ここまで見てきたように蘇軾は金陵で大勢の人に会い、いろいろなところ

てんけいかん

を訪ねている。7月16日には、天慶觀の壁に弟の蘇轍が金陵に立ち寄

きんりょう

ったとき（5年前の4月に^{いん}筠州に赴く途中）に詠んだ詩を書いている。それから12日後の7月28日、蘇軾は大きな不幸に見舞われた。

詩題は「去年九月二十七日、^{こう}黄州において子が生まれた。名は遯、小名は^{かんじ}幹兒である。体が大きく非常に賢かった。今年の七月二十八日、病のために金陵で死んだ。二詩を作ってこれを哭す」。遯が生まれたことは第6章446ページで見ている。

其の一

私の年齢は四十九、
旅の間に幼い子を失った。
幼い子は真に吾が子、
生まれながらにして顔の形が私に似ている。
まだ好き嫌いの判断などできそうにない年齢であるのに、
這い這いで書物の後を追いかける。
梨とか栗などは頭を振って退け、
そんなものを欲しがるのは恥であるのを知っているかのようだ。
私は老いるにつれて歡ぶものが少なくなり、
この子を見ての一笑一喜だけを頼りとしていた。
しかし、忽然と奪い去られた――
悪業の報いだとしたら、私の罪が及んだのだ。

薪をもって亡骸の衣とする、
世間のそのやり方に従って葬る以外に何ができようか。
人は一瞬にして変滅してしまうものなのだ。
事を終えて帰りければ、抱く懐いは空しい。
水を瀉^{そそ}ぐばかりの老いの涙……

其の二

我が涙は拭うことができる。
日が経って遠くなれば、きっと日に日に忘れてゆくのだろう。
母が哭すのは聞くに堪えない。
おまえとともに亡んでしまおうとしている。
おまえの衣が今も衣桁^{いこう}に懸かっている。
乳が漲って寢床に流れる。
ここに痛み、私は「生^{せい}」というものを忘れようとする。
ひとたび臥して終日じっと倒れたままとなる。
中年に至って忝^{みぢ}くも「道」について聞き、
「生^{せい}」は夢幻であると、すでに詳しく知っていた。
しかし、おまえのために山のように薬を用意し、
病気が重くなってからはさらに方士^{ほうし}の術も求めた。
恩愛^{やいば}の刃によってこの衰老^{はらわた}の腸はずたずたにされてしまった。

これは迷いなのだ……

もとの自分に^{かえ}反ろうではないか……

ひとたび慟哭して、心に残る傷を送り去るのだ……

(母 ^{おうちょううん} (王朝雲) の悲しむありさまが何よりも辛かったのである)

■葉濤致遠見和二詩復次其韻

^{しょうとう あざな ち えん}
葉濤 (字は致遠) という人が上の詩に和したので、それに次韻した。2 首のうち 1 首だけを訳す。

^{しょうとう}
(葉濤は、蘇軾のもとの詩の韻字の位置を入れ替えて和したので、この詩も韻字の位置がもとの詩とは異なっている。上の詩は真情から発したものであり、葉濤も深く同情して和したのだろうが、時間の経過とともに悲しみもやや薄まり、次韻するという知的作業がさらにそれを助けたということもあったのだろう、この詩は言語遊戯へと流れて行ってしまったかのようである)

其の一

私には娘がないので、

娘の可愛らしさにめろめろになるようなことはなかった。

^{こう}
黄州に滞在する間にこの子が生まれ、

^{る たく}
流謫生活を十分に慰めてくれた。

それが真実のものではないとは知るべくもなかった。

造物者がいささか私に戯れを仕掛けたのだ。

煩惱も、初めから根となるものがあるのではなく、

恩愛が種子となって、そこから生えてくるのだ。

貴公を煩わし、

恩愛などは仮のものであると、反復して御教示いただいた。

苦海の浪を除くには、愛の河の水を乾かさなければならない。

かつて韓愈^{かん ゆ}は、

たかが一寸ばかりの魚に執着して終日釣り糸を垂れる者を笑った。

貴公も同じように私を笑うであろう。

私は貴公への返事としてこの詩を作ったのだが、

これとて酒の上の一時の恥に異ならない。

■次韻葉致遠見贈

同じく葉濤^{しょうとう}（字は致遠^{あざな ち えん}）から贈られた別のテーマの詩に次韻した。

（興趣に乏しく、意味不明の箇所もあるが、このころ悩ましい心情にあったことを示唆すると読むこともできるであろう）

五畝^{いさ}ばかりの地を得て農民になりたく思いながら、

官に仕える身として行商人ように各地を転々としている。

私は我が命運に任せるだけで、

行き先についてとやかく言うことはないのだけれど、

人に逢って語るときには、

いまだにあれこれ言を左右してしまいがちである。

酒を飲めと勧めてくれる言葉よりも、

私には貴公の詩(にある助言)の方が好ましい。

文章などはひとつの遊びであって言うに足りないものだ。

知るべきは仏の教えの深い意味合いである。

■題孫思邈真

隋ずいから唐とうの時代に名高い道士であつた孫思邈そん し ぱくを描いた画を見て作った詩。

先生が世を去ってから五百年、

いまもお峨眉山が び さんの西の峰の中におられるとか。

本当は天上の仙界の高官になっているのであって、

尸解し かいして地上に残した亡骸を蛆虫に食わせるようなへまはしないのである。

(肉体を地上に残して昇仙することを尸解し かいというが、孫思邈そん し ぱくはもっと高度なわざで仙人になったはずだと蘇軾そ しゃくというのである。郷里の山に隠れた仙人に託して、我が心を解放させようとした詩なのだろうか)

■漁家傲

8月中旬に王益柔^{おうえきじゅう あざな しゅう し}（字は勝之）（本章54ページ）は別の任地^{なんけいおうてん ふ}（南京応天府）に赴くために金陵^{きんりょう}を去り、その送別の宴で蘇軾はこの詞を詠んだ。短い序文がある。

金陵^{きんりょう}の賞心亭^{しょうしんてい}で王益柔^{おうえきじゅう}を送った。王益柔は金陵の知事として政務を視ること一日^{なんぐん なんけいおうてん}だけで南郡（南京応天府）に移ったのだった。

千古竜蟠並虎踞、（千古の昔から竜が蟠^{わたかま}り虎が踞^{うず}る金陵）

従公一弔興亡処。（公に従って興亡の跡を見渡すのです）

渺渺斜風吹細雨。（遙か彼方からの風によって吹き込んでくる細い雨）

芳草渡、（渡し場の芳しい草）

江南父老留公住。^{こうなん}（江南の父老は公をここに引き留めようとします）

公駕飛車凌彩霧、（公は空飛ぶ車を走らせて彩^{あや}なる霧を凌ぎます）

紅鸞驂乘青鸞馭。^{あか}（紅い鸞が同乗し、青い鸞^{ぎょ}が車を馭します）

却訝此洲名白鷺。^{はくろ}（（南京応天府に至って）そこに白鷺州があるのをいぶかしく感じます）

非吾侶、（僕らはここの仲間ではないと鸞は思い）

翻然欲下還飛去。（下りかかって、また飛び去ってしまうのです）

（最後の部分は、王益柔^{おうえきじゅう なんけいおうてん ふ}は南京応天府に行っても、こっちがよかったと金陵にまた戻

ってくるという期待を込めたものであるとの解釈によって訳した)

■至真州再和二首

蘇軾^{おうえきじゆう}は王益柔^{きんりよう}とともに金陵^{ちやうこう}を発った。長江^{しん}を少し下った真州に至るまでの間に、先に蔣山^{しやうざん}で詠んだ詩(本章54ページ)に王益柔が和したので、さらに和して返した。2首のうち1首を訳す。

其の一

詩の妙手にして朝廷の高官であつた王維^{おうい}、

窮乏^{ちゆうぼう}した無官の孟浩然^{もうこうねん}——

王維は宮中に宿直した晩に孟浩然を呼び、二人で詩を論じあつた。

貴公も、境遇の違いや年齢の上下を忘れ、

私との旧交を温めてくださった。

北上する貴公のお伴をするのは難しいけれど、

しばしの間、東に向かって貴公の船を追ってきた。

送別^{しやうしんてい}の宴が開かれた金陵の賞心亭では、

貴公は花の輝きに照らされ、

私は、酔つたような目で蓮を窺う鷺と同じように、貴公を見つめていた。

船が進むにつれて、金陵の三山^{さんざん}が消え去り、

順風を受けて船上の旗が向きを転じた。

瓜歩かほにある江の女神かみを祀る祠の前を通ると、
松並木の下に古い石畳が連なるのが見えた。
これから行く真州せいこうかくの清香閣には、
酒はくぎょくせんのような水の湧く白玉泉があると聞いている。

そこに坐して夜も門を掩うことなく、
月が天に流れるのを待とうではないか。
紫檀したんの琵琶の音が華やかに部屋から流れ、
庭には樺かばのきの皮を巻いた蠟燭の煙が立ち昇ることだろう。
そのときに、貴公の詩を朗誦しよう、
かの名妓しょうせんけんの小嬋娟のような女性に命じて。

(官員同士の社交上の詩で、さほど興趣を誘うものではないだろう。最初の部分は、王おう
益柔えきじゆうを王維おういに、蘇軾もうこうねん自身を孟浩然に喩えて、かつて蘇軾が都にいた時期に王益柔が先
輩として目をかけてくれたことを詠んでいる。それは鳳翔ほうしょうでの任を終えて都に帰還し
たところで、蘇軾の官界人生は順風満帆と見えていたのだった(第3章の初め))

■贈袁陟

真州しんに到着すると、王益柔おうえきじゆうはそのまま任地への旅を続け、蘇軾はそこに
しばし留まった。これは真州知事の袁陟えんちよく (字は世弼あざね) に贈った詩。
せいひつ

この身は元来、虚空であるのだろう。

だから、万物はみな我がものである。

どうして、強いて内と外を分別するのか。

百金を出して田や家を買う必要などはない。

えん
袁先生は心の馬、尻の輿に乗って、

ユートピア
無何有に遊び、

一碗の飯のほかに願うものはない。

うみ
官界の湖を我が池とし、官の学舎を我が家とし、

子孫に遺すものは何もなく、

我が身は竹の筵むしろにくるんで葬ればよいとしている。

春の風は自ずと柳を暗く繁らせ、

秋の水は自ずと蓮を清らかに咲かせる。

袁先生のことを私はよく知っている。

袁先生はきっと魚の楽しみを知っているのである。

（この詩の最初の二句「此身如虚空、万物皆我儲」（此身は虚空の如く、万物は皆我が

ちょ せきへき
儲）は「赤壁の賦」（第6章310ページ）で述べた思想を10文字に要約したといつてよいだろう。終わりの部分は、魚の心がわかるのだろうかという『莊子』の問答（第3章129ページ）を踏まえている）

■次韻蔣穎叔

しん しょう し き あざな えいしゆく
真州で官職にあった蔣之奇（字は穎叔）の詩に次韻した。

月明かりの中で鶴が騒かたどきどきいでいる、
その身を安んじる枝がまだ得られていないのだろう。

貴君は想う――

小舟に棹をさして飄然と自分の影だけを随えて行くことを。

江かわの上に秋風が吹き、波は限りなく広がる。

官界で過ごす人生など短い春の夢のようなものだ。

私は貴君と同じ年に科挙に合格し、

都けいりんえんの瓊林苑での祝宴で語りあった――

そのとき、貴君は故郷えん が けいの罨画溪の美しさを語り、

ならばいつしかともに陽羨溪ようせんけいに住もうではないかと私は応じた。

しかし、本当に約束したのは、

隣同士で仲良く行き来することではなく、

宮中で国家の案件を論じ合うことだったのではなかったのか。

((1) 蔣しょう し き之奇の故郷は常州じょう ぎ こう宜興県で、そこにある罨画溪えん が けいや陽羨溪ようせんけいは景勝地である。かつて蘇軾こうは杭州副知事であったときに、しばしば常州を訪れ、陽羨溪で年老いるのもよからうかと諷に詠んでいた (第4章 170 ページ)。その背景には、科挙に合格してすぐに出会った蔣之奇とのちょっとした会話があったのだった。真州で蔣之奇と再会し、昔の約束を思い出したことが蘇軾のこの後の行動を変える。(2) 終わりの部分で「仲良く行き来する約束」と訳した原文は「雞黍けいしよの約」。互いにいつ訪ね合っても「雞にわとりや黍きび」、つ

まり自らの収穫物で歓待することを約束するという意味である)

■次韻滕元発許仲途秦少游

蘇軾^{しん}は真州^{ちやうこう}から長江^{じやん}を少し下り、潤州^{けいこう}（京口）で滕甫^{とう ぽ}（字は達道^{あざな たつどう}ないし元発^{げんぱつ}）に会った。この1月に、滕甫のために皇帝に差し出す文章を蘇軾が代筆したことは第6章462ページで見たが、それによって滕甫の任地は条件のよい湖州^こに変更となり、そこに赴任していた。蘇軾は黄州^{こう}を発ってから滕甫と手紙を交わし、潤州で会うことを約束し、滕甫は湖州から大運河を北上して待ち受けていた。2人の出会いに弟子の秦觀^{しんかん}（字は少游^{しょうゆう}）も加わった。秦觀^{こう}は高郵の人で、大運河を逆に南下して潤州にきていた。これは、滕甫が最初に詩を作り、それに潤州知事の許遵^{きょじゆん}（字は仲途^{あざな ちゆうと}）と秦觀が次韻し、最後に蘇軾が次韻したもの。

二公^{とう ぽ きょじゆん}（滕甫と許遵）の詩の品格は老成し、かつよいは新鮮である。

野人^{や じん}（蘇軾）が酔って狂おしく吟じるのをお許しくださいよ。

南の海の遙か二十五万里には青丘^{せいきゅう}があって、

中国などは沢に浮かぶ芥であるかのように呑み込んでしまおうとしているという。

二公にはまさにその勢いがある。

私は恥ずかしいことに、

小さな水たまりにちよろちよと生える草のようなものだ。

こ　　じゅん
湖州と潤州と二つの旗は輝いて互いに照らし合い、

私は十畝ばかりの農地を自ら鋤や犁で耕すだけの者。

ここにさらに天下の妙手である秦君しんが現れ出たのであるから、

来年あたりはひとつお上にこちらにお出まいたいて、

御前においてお三方の詩の優劣を競ったらよいだろう。

じゅん　　こう
(潤州までくれば、そこからは杭州副知事時代に行き来した馴染みの地である。親しい人々と会えば、蘇軾の心が当然浮き立ち、このような戯れの詩が生まれることになる)

■以玉帶施元長老元以衲裙相報次韻

じゅん　　きんざん
潤州には有名な金山がある。すでに、第3章139ページや第4章166ページで見たように、蘇軾は潤州に行くたびに金山に登っていて、今回もやはり金山を訪れた。金山にある金山寺きんざんで蘇軾は仏印禪師ぶつじん（了元長老りょうげん）に会った。仏印禪師はかつて赤壁せきへきの下で採った怪石かいせきを贈った人である（第6章290ページ）。そのときは仏印禪師は廬山ろにいたのだが、後に金山寺に移り、今回の旅で蘇軾が廬山を訪れた際には、仏印禪師は廬山まで出向いて蘇軾と会っていた。そしてまた金山寺で再会したのである。

この詩が詠まれた状況は次のようであったと伝えられている。蘇軾と仏印禪師が話をしていると、傍らからある僧が蘇軾に戯れ、「公が長老と問答をなさり、もしも公が返答に窮したならば、佩服おするところの玉帶ぎよくたい（官員のしるしである玉飾りの付いた革の帯）を山に寄進されるというのはいかがで

ございましょうか」と言った。蘇軾が同意し、問答が始まるとすぐに蘇軾は答えに詰まり、玉帯を差し出した。仏印禅師は玉帯を受け取ると、その代わりとして衲裙^{のうくん}（僧侶の衣）を贈り、2首の詩を添えた。これはそれに次韻したもの。2首のうちに1首を訳す。

其の二

この帯は駅舎のようなもの。

次から次へと人が入れ替わり、

ようよう私がやってきた。

ごたごた飾りのついた錦^{うわぎ}の袍なんぞは私には合わない。

そうだ、

あの老万回^{ろうまんかい}の阿呆坊主にくれてやったらよいのだ。

（唐^{とう}の時代^{まんかい}に万回和尚という者がいた。遥か西方のシルクロードにいる兄に会うために、朝に都を出て夕方に帰ってくるということを日々繰り返して1万回になると言っていた。皇帝は万回和尚を尊崇して錦^{うわぎ}の袍を与えた。蘇軾は玉帯や錦の袍よりも、衲裙の方が自分に似つかわしいと言って受け取ったのである）

■送金山郷僧歸蜀開堂

金山寺^{きんざんじ}に同郷^{しよく}の蜀^{そう}出身の僧がいた。間もなく故国に帰り、そこで寺を開くということを聞き、この詩を贈った。

ふ ぎょ(きん ちやうこう きんざん)
浮玉山(長江の水に浮かぶ金山のこと)で鐘が撞かれ、

三千の指(つまり三百人の僧)が私を迎えてくれた。

衆僧が談笑するなかから、

まだ語り合わないうちに、貴僧が郷里の人であることが知れた。

私が「^{こ ちやう}箇中の人」(ここにいるべき人、つまり縁のある人)でなければ、

どうして黙ったままで貴僧のことを知り得ようか。

貴僧は衣を振るってたちまち帰り去るという。

千山の彼方にぼつんと貴僧の影が消えて行くのを私は見送る。

さあ、飲みたまえ、

^{ちやうれい せん} 金山の中冷泉の水は^{しよく ふ こう}蜀の涪江の水と同じ味がする。

氷の上に載せられた琥珀のような砂糖よりもずっとずっと甘いのである。

^{きんざん ちやうれい せん}
(金山の中冷泉の水が天下第一の名水であるとされていることは第3章 140 ページ

で見ている。^{しよく ふ こう}蜀の涪江と中冷泉は長江でつながっているのも同じ味であると言っているのである)

■金山夢中作

^{きんざん}
金山に泊まって夢の中で作ったという詩。

^{こうとう} 江東の商人はみな^{コート}木綿の裘。

商人たちの宴会が終わって人々が去ると、
 酒楼は金山にかかる月の光で満たされる。
 夜半になり、よい潮がきて、風もまたよし——
 船(ふね)にごろりと臥せ、簫を吹きつつ、
 商人はたちまち揚州(ようしゅう)に至るのである。

(1) ここでいう江東とは潤州より南東側の地。江東は温暖なので、商人は毛皮ではなく木綿を身にまとう。揚州は、潤州から長江を横切って大運河を少し北上したところにある交易の一大中心地。(2) この詩は天下を自在に往来する商人への一種の憧れを歌っている。蘇軾の先祖が絹を扱った商人であつたらしいことを思えば、官員としての束縛を離れて先祖の業に戻ってみたいとの想いを込めているとみることもできるであろうか)

■秦少游夢発殯而葬之者云是劉発之柩是歳発首薦秦以詩賀之劉涇亦作因次其韻

これも夢に関する詩。秦観(字は少游)が妙な夢を見たという話を、蘇軾、劉発、劉涇に向かってした。劉発は官職に就いている人で、秦観と劉涇はまだ無官であつた。詩題は「秦観は夢に葬列に加わった。葬る者が『これは劉発の柩です』と言った。その話を聞いた劉発は、『ならば自分が発起人になって秦観君を朝廷に勧めようではないか』と言った。秦観がそれを喜ぶ詩を作ると、劉涇が和し、私も次韻した」。葬列の夢は不思議

と縁起がよいものだということがこの詩の中に詠まれている。

雉は死んでも節義を失わない鳥——

古代の士は雉のように、

国に少しでも補うところがあるのなら己を殺すこともした。

官に就いて職務に死ぬのは戦で死ぬのと同じ、

だから、屍を夢に見るのは、官職を得る兆しであると、昔からいわれてきた。

(世界を構成する水火木金土の)五行が正しく身の内に整う者が官に就くのであって、
私などは「土」で、五行の最も下の人間である。

仕官して禄を得ていない者は君主にとっては賓客である。

だから、無官の者が「純良の臣」などと自称するのは古例に反している。

禄を授受することで、君主と臣は仲間内とは異なる呼び方をし合うようになる。

世が衰え、道が微かになって、士は己を失い、

官に就く者のあり方が本来のものとは異なってしまった。

官員でありながら、衣服や住居、車馬のことに気をとられ、

群れをなして飲酒して遊ぶことをもっぱらとしている。

科挙に合格した者は喜びのあまり、川に船を浮かべ、月に毬を蹴って遊び、

葬儀には舞わない、墓所では歌わないとの禁も平気で破り、

花を見て浮かれ、馬でやたらと走り回る狂態を見せる。

秦観君と劉涇君はまだ年少であるが豪逸、

詩を作り酒を飲んで、お上に仕える苦しみを知らない。

天は官の厳しさを示すために、劉^{リョウ}発^{ハツ}殿の棺を夢に見させたのであろう。

諸君等に言おう、

「官員になっても己に本来あるものを腐らせてはならない、

葬礼に用いる泥で作った車、草で作った馬などはみな仮のものだ、

世の中の何が真であるかを仔細に見て、誤るようなことはあってはならない、

時がきたならば、大空に飛翔して鳴くのだ、

劉発殿も朝廷に推挙するようなことはなさらずともよいのではなかろうか」

■送沈達赴広南

潤州^{じゆん}に滞在する間に、遠く南^{こうなん}の広南^{カントン}（いまの広東あたり）へと赴任する
沈達^{ちん き}に出逢い、この送別の詩を作った。

ああ、私と貴君はともに丙子^{へい し けいゆう}（景祐三年）の生まれの四十九歳、

窮したとはいえまだ死んではない。

貴君は幕府に従って西方で戦い、

凍り付いた河を夜に渡し、

雲のように高い要塞へと切り込んだ。

天に飛塵^{みなぎ}が漲り、甲に矢が降り注いだ。

そのような中から帰還し、妻子と再会したとき、

これは夢ではないかと疑った。

^{こう}
私は黄州に五年ほど流され、

^{ちょうこう}
長江の波にもまれるちっぽけな舟のようであった。

知り合いからの音信は絶え、

病と飢えと寒さによって死んでしまうのではないかと疑った。

貴君と会って手を握り合い、大きく笑う。

「白髪でやつれた顔が互いにそっくりではないか」

私は長江から離れて北に、

貴君は万里も軽いと南に行こうとしている。

功名は幻のようなもの、期待して得られるものではない。

学問の道を歩むのならば必ず得られるものがあることこそを喜ぶべきである。

貴君の行く地には^{たんさ}丹砂があるという、

貴君はきっと仙薬を得るであろう。

私が行く地には^{こぶ}瘤の生じる病があるという、

私は運命に甘んじて病んでも恥はしない。

今度貴君が帰還したときには、

私と「^{けいしよ}雞黍の約」を結んで果たそうというのなら、

私は今から田を買い、家を建てることを始めておこう。

（「^{けいしよ}雞黍の約」は本章 65 ページでみている。ここではいわばリップサービスとして「雞黍の約」を結ぼうと言ったのだろうが、このころ蘇軾は本気で農地を買うことを考えて

いた)

■次韻周種恵石銚

これも潤州^{じゆん}滞在中の詩。周種^{しゆうとう}という官人が詩を添えて石の銚^{ちよう}（茶や飲食物を煮たり温めたりする器）を贈ってくれたので、それへの謝礼。

銅^{なまぐさ}の腥^{じゆん}い臭いや鉄の渋^{じゆ}みは泉水によろしくない。

この石の器^{そうぜん}の蒼然とした色合い、深く^{ゆる}かつ寛やかな形は愛すべきである。

これを火に置けば、

蟹の眼のような泡が浮かんで湯がすぐに沸き、

竜の頭のような柄は火をよく防いで冷たいままである。

新鮮な生姜と少々^{せうせう}の塩を加えると、

湯に漬かった茶葉は雲に蒸された苔のような状態になって、

よい仕上がりの茶ができあがる。

昔からいうように三本足の鼎^{かなえ}はたいていどれかが折れてしまう。

無脚^{むきゃく}こそが軽やかで安らかなのである。

（茶に生姜や塩を加えるのは古風な飲み方で、蘇軾^{そしつ}は好んでいたようだ（第6章 398ページ）

■贈潘谷

墨を作って売る潘谷はんこくという人に贈った詩。最初に同姓の潘岳はんがくの故事を引いている。

晋しんの潘岳はんがくが河陽かよう県の知事だったとき、
自ら植えた桃李とうりの花を、多数の美女を連れて見に行き、
町の人々はそのありさまに驚嘆した。
潘岳は天下第一の大金持ちせきすうの石崇に憧れ、
馬の蹄の下にかしまって石崇の姿を拝んだ。
つまるところ、潘岳の胸の中は泥と塵だらけだったのだ。
今日の潘谷君はんこくは全く異なり、
身にまとうのは真っ黒な破れた衣、
手は亀のようにひび割れ、
黒い笏しやくで墨の長さを測り、からからと音を立てて切って売っている。
しかし、心を内は、氷の壺に秋の月を貯えている。
世間の人はとかく耳で聞いたことを重んじ、目の前に見えていることを軽んじる。
張遇ちやうぐうとか李庭珪りていけいとかの名を聞くだけで、
その墨が極上であるかのように言い争う。
かの李白りはくは仙界から流された「謫仙たくせん」といわれたが、
その李白に問うなら、

潘谷君こそはいま人間界で空しく暮らす「墨仙」であると答えるだろう。

（「大金持ちの石崇」はすぐ後に見る「豆粥」の詩（本章83ページ）にも登場する。贅沢三昧に暮らしただけの愚物の最高峰として蘇軾はよくその名を引いている。それに憧れたのだから潘岳はよほどの愚か者だということになる。先にさんざんな評価を下した『文選』には、潘岳のかなり感傷的な作品が幾つか収められていて、すこぶる有名である。蘇軾は世間の評判よりも自身の眼が確かだとして、しばしば異論を唱える。定評のある張遇や李庭珪の墨よりも潘岳の方が優れているというのである）

■蒜山松林中可卜居余欲儗其地地属金山故作此詩与金山元長老

「勉強嫌いの小児」のようにぐずぐずする蘇軾の本心がいよいよここに明かされる。詩題は「（長江のほとりにある）蒜山の松林の中に土地を借りて住んでみたいと思った。その地が金山寺に属すると聞いたので、詩を作って我が希望を金山寺の了元長老（仏印禪師）に伝える」。了元長老は本章67ページですでに登場している。

太古の魏王の巨大な瓠、

そんなものが本当にあったかどうか誰も知らない。

その種を植えたら、五石の水を入れることのできる実が成り、

割ると二つの大きな樽船ができたとか。

ただ困ったことに、

どこの川も湖も、浅くて狭くて、それを浮かべられなかった。

私は現代の魏王の瓠なのか、

本来何の役にも立たないのに、

虚名ばかりが大きく膨らんで世間を驚かせている。

大きな駄法螺を吹くやからは昔からいて、

かん どうぼうさく 漢の東方朔先生は「こうし知恵と勇氣は孔子の高弟二人分」とほざいていたし、

とう とほ 唐の杜甫先生は「老いて愚かなことは古代の大馬鹿者二人分」とぼやいていた。

私なんぞはもうし孟子が褒めたりゅうか けい柳下恵の奥ゆかしさを学ぶとか言っているくせして、

これは酸っぱいだの塩辛いだのとつまらない言い争いに首を突っ込んでしまう。

さんざん 金山にもおかしな人がいると、以前から聞いていたけれど、

ようやく今になって知り合うことができた。

我は酔うといつも「世間とはもうおさらばだ」と言うのだが、

傍の人は笑い飛ばして聞こうとしてくれない。

金山のその和尚だけは本気であると見抜いていて、

「どこに帰るつもりかね」

と私に尋ねてくれる。

私は笑ってさんざん蒜山を指さし、

「『せい生は浮くがごとく、死は休むがごとく』と言います。

あそこが浮いて休む身を寄せるところです。

どうかこの『む か いちぼう無家一房の客(定まった住処を持たない旅人)』を招き入れてください」

こう（黄州を發つて以来、じょ蘇軾は汝州への道を進むべきか、それとも別の道があるのかと、
 ずっと悩み続けていた。弟に会って相談し、ろざん廬山で考え、ちやうこう長江を下りつつさらに考え、
しょうしき あざな えいしゆく蔣之奇（字は穎叔）に会ったころ（本章64ページ）から思いが一つに定まっていっ
 ようだ。どこか隠棲する場所を得て官界から退くことにしたのである。そのためには、
 落ち着ける場所を得て、その後で朝廷に許可を願い出ようと、りやうげん了元長老との縁を頼り
さんざんに蒜山の土地を借りようとした。しかし、それはうまくいかず、別の場所を探さなけれ
 ばならなかった）

■王中甫哀詞

じゆん おうえん し あざな げん ろ潤州で王沆之（字は彦魯）と出逢い、その父のおうかい王介（字は中甫）を偲ぶ
 詩を作った。王介はかい ゆう嘉祐6（1061）年に一緒にせい か制科に合格した間柄で、そ
 の死を悼む詩を第5章 119 ページで見ている。序文がある。

じん そう仁宗皇帝の御世にせい か制科に合格したのは十五人。私が忝くも合格となったときには
 そのうちの九人が世にいた。すなわち、ふ ひつ富弼、ちやうほうへい張方平、せんめいいつ錢明逸、ご けい呉奎、か がく ちん夏噩、しん ちん陳
しん ちん舜俞、せん そう錢藻、おうかい王介、それに私と弟の轍であった。それから十五年、密州で王介の
 死を哭し、詩を作って弔った。このときすでにせんめいいつ錢明逸、ご けい呉奎、しん ちん陳舜俞が亡くなってい
 た。さらに八年、私はこう黄州からじょ汝州へりやう い量移となり、たまたま京口（潤州）で王介の
おうえん し子王沆之と遇い、手を取って泣き合った。このとき十五人のうち生きているのは
 三人だけとなっていた。すなわちちやうほうへい張方平と私と弟の轍である。ああ、悲しいではな

いか。

ここに先に王介を哭した詩と同じ韻を用いて王沈之に詩を与える。ときに王沈之もまた罪を得て流謫となり、^{せんとう こう}錢塘(杭州)に住むという。

貴君の父上は、一束の藁でその^{あつ}篤い心を示した昔の^{こうし}高士のような人であった。

貴君は、一束の藁を盗んだ^{どうぼく}童僕のために連座した昔の忠臣のような人である。

貴君は達観し、これからいかにしろうかと思ひ煩ったりしない。

私は衰え、これからいかにしようかと、夢の中で空想することさえできない。

昔の寓話に、

Aさんは世間のために何もしないで長生きをしたが、最後は虎に食われてしまい、

Bさんは世のために奔走したけれど、若くして病死してしまった、

CさんがDさんに「おまえは間もなく死ぬ」と言ったところ、

Dさんは「俺が死ぬなら、俺は俺の死んだことを知らないし、おまえが生きていることだって知らない、どっちが死んだのかわかりはしない」と答えた、

つまりところ、A、B、C、Dのどれがよいのかわかりはしないのだ。

はっきりしているのは、東の^{おか}坡にくずでとんまな野郎がいるということ。

その者は、

舟から川に剣を落して、急いで舟ばたにしるしを付け、「ここで落とした」と叫び続けているようなことばかりしているのだ。

((1)「哀詞」という題ではあるが、諷は王介のことよりもむしろ蘇軾自身のことを多

く歌っている。(2) 原詩は、いくつかの故事を並べ、その解釈は読む人に委ねている。この訳詩は含意するところのものをやや顕わに出している。全体として、運命に翻弄される身ではあるけれど、いたずらに己の過去に縛られることなく、高潔な志は失わずにいたいということが言いたいのだろう。(3) 仁宗皇帝^{じんそう}の世に制科に合格した15人中の最後の3人であるとは、蘇軾の強烈な自負心を示すとともに、時代の流れと乖離してしまった焦燥感をも示すのだろう。両者の葛藤からは、これ以上罪人としての屈辱を味わうよりは、誇り高く退くべきであろうとの結論が出ることは容易に推測できる。(4) 潤州^{じゆん}では蘇頌^{そしやう}（字は子容^{あざな}）のためにその母の陳夫人^{しやう}の挽歌を作っている。蘇頌は蘇軾よりも16歳年長でかつて宰相も務めた政界の大物で、蘇軾は25歳のときに都で面識を得ている。蘇頌はこのときは母の喪に服して郷里の潤州に帰っていた。その詩は内容が乏しいのでここでは訳さないが、かつて蘇軾が母の墓誌銘^{しばこう}を司馬光に書いてもらったことを思い返すなら、当時の士大夫が互いにその両親を重んじる付き合い方をしたことが知れてくるであろう。(5) このころに趙抃^{しやうべん}（第5章223ページなど）が亡くなっている。趙抃は蘇軾父子にとって大切な恩人である。蘇軾が制科の試験を受ける準備をしていたときに、父の蘇洵はその学識によって特別に官職を得たのだが、朝廷に蘇洵を推薦したのが趙抃であった)

■減字木蘭花

蘇軾は9月中頃に潤州^{じゆん}を發った。船に乗り込もうとすると、2人の女性が「どうかあのときのお願いを叶えてくださいませ」とすがりついた。見

れば、潤州知事の許遵きよじゆんが催した宴席ていよう こうえいにいた鄭容と高瑩という妓女で、2人は宴の隙を見て、「我らは『落籍』らくせき（官妓かんぎの身からの解放）と『従良』じゆりょう（良い夫のもとに嫁ぐ）を願っております。どうか手助けしてください」と蘇軾にささやきかけていた。蘇軾はうなずいただけであったが、蘇軾がしばしば官奴かん（官に仕える妓女は自由を奪われているのでこのようにいわれていた）を解放してきたことを知っていたので（王朝雲おうちやううんがまさにその1人）、この機会を逃すまいと、蘇軾が旅立つ前にと懸命に追いかけてきたのだった。蘇軾は微笑み、「これを知事殿のところに持って行きなさい。見ればわかってくださるであろう」と、一篇の詞をさらさらと書いて渡した。それが以下の詞で、詞としての意味は特にないので訳さないが、各句の頭の文字を並べると「鄭容落籍、高瑩従良」となっていて、2人の妓女の希望をこの詞に托して許遵に知らせたのだった。

・
鄭莊好客。

・
容我樽前先墮幘。

・
落筆生風

・
籍籍声名不負公。

・
高山白早。

・
瑩骨氷膚那解老。

・
從此南徐。

・
良夜清風月満湖。

(この詞によって 2 人の妓女が解放されたかどうかは伝えられていないが、許遵はきつと無視することはなかっただろう。なお、妓女の身を管理する権限は知事にあった)

■菩薩蛮

・
潤州じゆんを發はなつて蘇軾じよはどこに行つたのか。皇帝から指定された汝州に行くには長江ちやうこうの対岸に渡つて大運河を北上するのだが、逆に大運河を南に下つて常州じやうに向かった。そして州の西南の宜興ぎこう県しやうしき(蔣之奇の故郷)の陽羨やうせんにまで行き、そこで土地を買つた。そのときにこの詞を作つた(弟に向けて詠んだものとして訳す)

(土地を獲得するに当たっては、すぐ近くこの湖州の知事になっていた滕甫とうほの助力もあり、郷里の大先輩はんちんの范鎮(第6章423ページなど)からの資金援助もあったらしい。得た土地の管理は蔣公裕しやうこうゆうという者に頼み、それが蔣之奇の一族の者であるかどうかはわからない。後にその土地の所有権を巡ってトラブルがあったと伝える記事もあるが、土地取得の実情は詳しくは知られていない)

・
買田陽羨吾将老。やうせん(田を陽羨に買い、そこで僕は老います)

・
従来只為溪山好。けいざん(これまではただ溪山のよろしいところでありました)

・
来往一虚舟、(これから舟に一人乗って行き来し)

聊随物外遊。(世俗の外に出て遊ぶのです)

有書仍懶著。(君からの手紙に物憂くてまだ返事をしていません)

水調歌歸去。(かつて「水調歌頭」の詞に早く退隱すべきことを歌いました)

筋力不辭詩。(僕の身体の力は詩を詠むくらいならまだできます)

要須風雨時。(待たれるのは、君と牀を並べて夜の雨の音を聞くことです)

(かつて詠んだという「水調歌頭」の詞は第5章204ページで見ている。「夜雨対牀」

は兄弟の最も望むものである(第2章21ページ))

■豆粥

この詩は常州で詠んだかどうかはわからないが、この時期の心情を推し量るよすがにはなるであろう。

誰もが知っているように、

劉秀(後の光武帝)が戦に敗れ、滹沱河の流れで車軸を折られてしまったとき、

將軍の馮異は急いで豆粥を用意し、

参謀の鄧禹は湿った薪を破れた竈にくべ、

劉秀は濡れた衣を自分で乾かした。

豆粥で飢えと寒さを免れた以上に、

劉秀は馮異と鄧禹の心に感じ入った。

やはり誰もが知っているように、

きん こく しん せきすう
金谷にあった晋の石崇の邸宅では、

不意の客人があっても、帳のもとに美女をずらりと並べて豆粥を煮させ、

氷を敲いて割る厳冬の季節であっても、春の野菜がふんだんに入れられていて、

どのようにしてそれを用意したのか知る者はいなかった

石崇は戦が迫ってきても、声色にまどわれつかれたまま心は酔い続け、

どこにも身を寄せるところがなくなってしまった。

身も心も顛倒ひっくりかえっているのが自分でわからなくて、

どうして人間世界の真実を知ることなどできようか。

石崇の贅を尽くした豆粥などは、

川のほとりの葦原の茅ぶきの小屋で細い煙を上げて煮た劉秀の豆粥にはとても及ばないのだ。

粗末うすな碓こめでも杭ひを挽けば玉のように輝き、

粗末かめな瓶でも豆を煮れば酥ヨーグルトのように柔らかくなる。

私はいま老いて所有するものは何もない。

東の地に来て、書物を売り払って、ここに住もうと思っている。

臥したまま鶏の鳴き声を聞き、

寝癖のついた髪のみまで杖をついて君の家に行くと、

ちょうど豆粥が煮え上がっているのだ。

(この詩は先に見た「眉石硯の歌」と同じ構成になっていて、対照的な二つの故事を並

べて、己の考えを提示している。最初に引いた故事は、漢王朝を再興しようと立ち上がった劉秀（光武帝）が命運をかけた一戦に大敗し、最大の危機に陥ったときのことである。蘇軾もいま大きな岐路に立っていると感じていたのだろう。朝廷の実権を握る人々に靡いて、石崇のような贅沢な暮らしを志向するのは論外としても、汝州に行けばさらなる恥辱を蒙る恐れは多分にあり、かといって量移の命令に背くことはできない。ならば退隱する以外にないと、ささやかな農地を獲得したのだった。この詩の最後の句にある「君」とは誰なのか、次に見る手紙の相手であるのかも知らない)

■答賈耘老

宜興県から常州に戻る間にこの手紙を書いた。賈収（号は耘老）への返書である。賈収は湖州に住む隠者で、かつて蘇軾が湖州知事であったときに交流があり、黄州に流されて経済的に逼迫したときには賈収から教わった節約術を実践している（第6章121ページ）。

私はすでに陽羨に農地を買いました。我が余生に憐れみをかけてくださいますよう聖主（皇帝）に申し出て、そこに住むことをお許しいただくつもりです。幸いにも許可が得られましたなら、荊溪のほとりに住まいを築き、そこで老いを迎えるつもりです。私は門を閉ざして外出しませんので、貴公におかれてはどうか舟でお越しください。酔ってまともな字が書けません。お許しください。

■陶淵明詩

上と同じ舟中で陶淵明^{とうえんめい}の詩を写した。蘇軾自身の言葉はないが、このときの心情を十分に窺い知ることができるであろう。

丈夫志四海、(男兒たる者、天下を志せというけれど)

我願不知老。(私が願うのは——老いを知らずに)

親戚共一处、(親戚が一緒に暮らし)

子孫還相保。(子や孫もそろって元気で)

觴弦肆朝日、(朝から盃やら楽器やらを並べ)

樽中酒不燥。(樽の中の酒が途切れずにあって)

緩帶尽歡娛、(帯を緩めて楽しみを尽く)

起晚眠常早。(起きるのは遅くて、いつも早く眠ること)

孰若当世士、(どっちがましなのだろうか——いまの世間の連中が)

冰炭滿懷抱。(氷と炭のような互いに反することをいっぱい願って)

百年歸丘壟、(百年後に墓に納まるまでの間に)

用此空名道。(ずっと虚名にひきずられっぱなしでいるのと)

元豐七年十月二日、宜興^{ぎこう}の舟中で写す。東坡居士^{とうばこじ}記す。

■与王定国書

蘇軾^{じょう}は常州からさらに潤州^{じゆん}に戻り、知事の許遵^{きょじゆん}に送別の詞を送って長^{ちやう}

江を渡り、10月中旬頃に揚州に至った。ようやく汝州に至る順路に乗ったことになるのだが、汝州に行く気はすでになかった。揚州から王鞏（字は定国）に送った手紙の一部を訳す。王鞏は蘇軾に連座して遙か南方に流されるという重い罰を受け（第6章2ページ）、前の年に赦されて都への帰還を果たしていた。

私は揚州に来て一つの文章を書きました。常州に住むことをお上に願うものです。当地の役所を通じて朝廷に提出しようとした。しかし、規則に反するという事で、出してもらえませんでした。改めてもうひとつ書いて、都に使いの者を行かせようかと思っています。近頃、私は常州の宜興県に小さな農園を買いました。一年に百石余り収穫できれば食べていけることでしょう。揚州もよいところだとは知っていますが、追い詰められた猿が逃げ場を求めて、木を選んでいる余裕はないのです。

（蘇軾は「窮猿」と自分のことを表現し、究極の選択として宜興県に隠退することを決めたと言っている。王鞏が、同じ隠棲するにしても揚州の方がよいのではないかと勧めたことは後の詩にも出てくる）

■乞常州居住表

上の手紙にある朝廷に差し出そうとして書いたのがこれである。「表」とは皇帝や役所に願い出る文章。

じょしゅうだんれんふくし ほんしゅうあん ち ふ とうせんしやこう じ さ と い

汝州団練副使本州安置不得簽書公事騎都尉の臣蘇軾、

右の者は狂妄をもって罪を得ましたが、伏して聖恩を蒙り、なお余りの生を賜り、善い地に置いてくださいました。それより歳月がいまだいかにほどでもないのに、お目こぼしを蒙り、都に近い^{りやう い}ころに量移されなることとなりました。この再生を賜り、万死をもってしても酬いることができません。

臣^{わたし}の家は貧乏を重ね、すぐに安置される所へと向かうべく船に乗りましたが、黄州^{こう}を離れてからは、波風の恐ろしさに驚かされ、一家を挙げて病気となり、幼い子を喪いました。今はすでに揚州^{よう}に至りましたが、旅費が尽き果て、陸に上がることもできません。汝州^{じょ}に参りましても、そこに土地があって農業を営めるわけでもなく、いかに生きたらよろしいのか、飼い主のない犬や馬と同じように憂い、飢えやが寒さに厳しく迫られることとなりましょう。密かに思いますに、朝廷は仁の至りによって臣^{わたし}の命を全うさせていただきましたからには、それが失われることはきっと憐れんでくださるであります。

臣^{わたし}は先にわずかな農地を得まして、それは常州宜興県にあります。薄い粥^{じゅう}くらいならどうにか得られますので、聖慈^{せい じ}をもって特に常州に居住することをお許いただきたく希望するものであります。もしも罪の深さにもかかわらず生きながらえられ、さらには身を捨てて酬いることができるのならば、死んでも留まるものではありません。

臣^{わたし}はいまここで敢えてぐずぐずすることなく南京応天府^{なん けい おう てん}に至り、朝廷からの御指示を仰いで従うようにいたします。

天威を犯し、伏して罪を待つこと戦々恐々の至りにございます。謹んでお伺いを立

て、伏して勅旨をお待ちいたします。

元豊七年十月十九日、汝州団練副使本州安置不得簽書公事騎都尉臣蘇軾、
状を以て奏します。

（この文章を朝廷に提出しようと揚州にある国の出先機関に持って行った。しかし、王
鞏への手紙にあるように、規則にないからと受け取ってもらえなかった。罪人である蘇
軾に下手に関わったら何があるかわからないと警戒したのだろうか）

■広陵後園題申公扇子

朝廷に提出しようとした上の文章で、移動の旅の困難を言い、旅費が尽き
たと書いていた。自分がいかに困難な状況にあるかを強調したものでは
あろうけれど、実際に蘇軾の懐はかなり苦しかった。知人から種々の支援
を受けてどうにか旅を続け、土地も得たのだらう。いろいろな人に会って
詩や書を贈ったりしたのは、支援を引き出すために必要不可欠のことだ
ったのかも知れない。揚州は物流の一大拠点で、北宋の四大都市（都、揚
州、杭州、成都）の一つで、ここでも蘇軾は積極的に大勢の人々と交流し
ている。その1人に呂公著がいた。そのときの様子が『邵氏聞見後録』
（邵博著）という随筆に記述されている。

（呂公著は蘇軾より18歳年長の保守本流の超大物政治家。父は長く宰相を務めた呂夷
簡（范仲淹が批判して左遷の憂き目に遭った当の相手）で、初めは父が高官であつた
特典で官職に就いたが、後に科挙に合格し、朝廷の中核を担うに至った。王安石の改革

に強く反対して都の外に出たのだが、超大物であるだけに、揚州知事の地位にあった。
先に蘇軾と王安石の会見を伝えた記事を見たが（本章 47 ページ）、それを記録したのは
邵伯温で、ここに見るのはその息子が書いたものである）

呂公著が揚州知事であったとき、蘇軾は黄州から汝州に移る折に揚州を経由し、呂公著
に会った。呂公著は蘇軾に酒を出したが、終日一語も交えなかった。蘇軾は酔って眠り、
歌妓が「夜は寒く、羅衣の薄さをそぞろに覚えます」と歌う声に、蘇軾は驚いて目を覚ました。
歌妓はこっそり笑い合った。酒が終わって庭に出て、座が改まると、蘇軾は筆と墨を求め、
歌妓の団扇に詩を書いた。

露を宿す葉、風に揺れる枝、

暁の風儀はともに等しい。

そして、緑の陰の青い実は^{きよ}浄く塵もない。

家を巡って樹木がたわわに繁ると歌ったのは陶淵明^{とうえんめい}であった。

ここでその句を吟じると、

なるほど陶淵明は^{ゆかいひと}可人であったと知れる。

呂公著はこれを見ても何も言わなかった。

((1) 蘇軾の詩は、呂公著を陶淵明に比して讃えただけのもので、内容は乏しい。(2)

呂公著が終始無言であったのはなぜなのか。朝廷の目を気にしてのことであるのは間

違いないだろう。呂公著は名門の大家であり、蘇軾は人気随一の文人、2人が会って何を話したのか、必ず世間の耳目を集めることになる。(3) 歌妓が歌った歌詞は「夜来走卻羅衣博」という当時の諺にひっかけた駄洒落になっているようなのだが、その諺の意味が訳者にはわかっていないので適切な訳ができていない)

■書韓魏公黃州詩後

蘇軾が8歳のときに憧れたスーパースターの1人に韓琦^{かん き}がいた。韓琦は若い頃に一時期^{こう}黄州に滞在していたことがあり、それから40年後に黄州出身の孫賁^{そん ぶん}という官員の訪問を受け、一篇の詩を詠んだ。孫賁はそれを石に刻んで黄州に置きたいと考え、蘇軾に記念の文章の執筆を依頼した。これはそれへの返事として書いて送ったもの。揚州^{よう}滞在中に書いたと推測されている。

黄州^{こう}は、山水^{せい せん}は清遠、気風^{こう ぜん}は厚善である。その民は求めることが寡^{すく}なく、争いごとがない。そこの士^しは静かで風采があり、朴訥^{ひん}であっても陋^{びな}びていない。路地裏の貧者であっても、賢者を敬愛することを知っている。

黄州の人々は、「吾が州は都から遠く、ちっほけなところではあっても、かつて王禹偁^{おう う}様も韓琦様もお住まいなされた」と、四方の人々に向かって誇らしげに言う。王禹偁^{しょう かん き}は黄州から蕲州^きに移り、そこで亡くなったのだが、世の人が王禹偁を語るときは必ず黄州を言い、黄州の人は「吾が王禹偁様」と言う。韓琦は黄州を去って四

十余年経っても黄州のことを思い、忘れることなく詩に詠んだ。

そもそも賢人、君子は天下の民のために何かを遺し、天下の民はそれを共有する。黄州の人だけが二公の遺したものを専有しているのだろうか。あるいは、徳を尊び、道を楽しむことが他の土地の者と異なっているのだろうか。二公と黄州の人の間に、遠い昔から知ることできない契りがあったのだろうか。

王禹偁は黄州の郡守となりその民に対して徳があった。だから、黄州の民が王禹偁のことを懐^{おも}って忘れないのは理解できる。韓琦は家人の喪に服し、その兄に従って黄州に住んだだけだった。それでいながら、黄州の民はどうして韓琦のことを知ったのだろうか。

『詩経』にはこうある。「匪^ひたる君子(立派な君子)あり、金の如く、錫の如く、圭^{けい}の如く、璧^{たま}の如し」。この句は、金、錫、圭、璧のあるところを瓦礫や草木が覆ってその光沢を隠したとしても、その本質を失わせることはないということから、君子の徳も隠せないことを歌っている。韓琦はまさにそういう人なのである。

奉議郎^{ほうぎ ろう}の孫貴^{そんき}は黄州の人で、韓琦の客人となり、韓琦は孫貴のことを深く知って、属官として用いた。私は韓琦の門人で、五年の間、黄州に謫居^{たくきょ}した。東の坡^{おか}を耕し、雪堂を築き、そこに老いることとなって、自分もまた黄州の人であると考えた。我等二人は、韓琦の詩を写して石に刻み、もって黄州の人々が韓琦を思うことを無窮に伝えようとするものである。そして、我等二人はここに託して韓琦と黄州のつながりを忘れまいとするのである。

元豊七年十月二十六日、汝州団練副使蘇軾^{げんぼう じょしゅうだんれんふくし}記す。

(なお韓琦^{かん き}は9年前の熙寧^{き ねい}8 (1075) 年に亡くなっている)

■与杜幾先

蘇軾は11月初め頃に揚州^{よう}を離れ、大運河を北上し始めた。黄州^{こう}を出てからすでに7カ月が経っていた。このとき、友人の杜介^{と かい} (字は幾先^{あざな き せん})、徐大正^{じょたい} (字は得之^{とく し})、禅僧^{ぜん ぶ}の無沢^{む たく}らが同行したようだ。その3人について順に見てゆく。

杜介^{と かい}は引退した元の官員で、数年前から揚州^{よう}の平山堂^{へいざんどう}の近くに居を構えていた。平山堂^{おうえいしやう}は欧陽脩が建てた当時有名な建物で、蘇軾は何度か訪れている (平山堂で詠んだ詞を第5章350ページで見ている。その詞は今回の旅の折に詠んだとする説もある)。ここに訳すのは、蘇軾が4年前に黄州から杜介に宛てた手紙の一部で、これを読んで、今回の揚州訪問で杜介とどのような思いで再会したかを想像していただきたい)

お別れしてからもう何年にもなりますが、かつてお話ししたことはいまも忘れておりません。このごろはいかがお過ごしでしょうか。

思えば昨年の八月初めに私は逮捕され、(都に護送される途中に)揚州^{よう}を通過しました。天長県から平山堂^{へいざんどう}の下にさしかかりましたときに、塙根^{かき ね}の向こうに貴君の家が見えました。紙の窓、竹を葺いたさまは以前通りで、貴公^{どう し}が道士のなりをして、薬を煮る炉と碁を打つ盤の間におられるありさまを、ありありと想い見たのでした。私は

綱に繋がれ、生死のほども知れぬ身で、貴公は銀河の彼方の存在であるかのよう
に思われ、羨慕してやみませんでした。

すでに聖恩を蒙り、罪罰を寛めて善い地(黄州)に置いてくださることになりました。門を
閉ざし、外出することなく、蕭然と為すこともなく過ごしています。酒が醒めてまだ夢
の中にいるような心地であります。

■徐大正閑軒

徐大正は、かつて黄州知事の任にあった徐大受の弟で、兄が亡くなったた
めに、その棺を携えて遠く南方に帰郷していたのだが(第6章478ページ)、
蘇軾に会うためにわざわざ遙かな道のりを超えて揚州にまできたのだろ
う。徐大正の住まいである「閑軒」に寄せる詩を作った。

氷雪の中で繭を作るという「氷蚕」は、寒さというものを知らない。

火山の中で毛を伸ばすという「火鼠」は、熱さというものを知らない。

だから、閑ということを知り、閑なところを知る者は、

実は閑を侶とする者ではないのである。

ここに東の坡の翁がいる。

誰よりも懶散で、身体を酔夢の内に置き、

暮らし向きことはほったらかし、

早くに眠るから灯火を見たことがなく、

遅くに起きるから普通の人の晩飯が昼飯になる。

盗人が毛氈もうせんを盗っていかうとしても横になったまま眺め、

麦が雨に流されても座ったまま眺めている。

話すのが稀であるから舌はこわばってしまい、

歩くのは少しだけであるから足腰は屈まってしまう。

黄州の町にいること五年、黄州の太鼓の聞こえないところにまで出たことがない。

人は言う、

「東の坡の翁かんじんはもとと閑人かんであるから、閑なところに置かれているのだ」

翁は問う、

「はて、閑かんとはどういう味わいのものなのだろうか」

眼が自分の眼を見ることができないように、

翁かんには閑というものがわからない。

翁いぶかが訝るのは、

「徐君じょは閑軒かんけんとかいっておるようだが、どれほどの閑かんを得ているものやら」

とかく世間の者は閑かんには耐えられない。

伝介子でんかいしという人は、遠く西国に刺客として行くことを敢えて志願したし、

尹翁歸いんおうきという人は、文官と武官を分けたときに敢えて両方を兼務したいと言った。

二人はこうして家の名を輝かした。

翁かんは閑であるから詩でも作るしかない。

かくてこの詩を作るうちに、

だんだんと閑^{かん}でないことをいうようになってしまった。

徐君は閑軒に住んでいながら、

いったいどういうわけで千里を走る汗^{かん}血^{けつ}馬^ばのように遠くやってきたのだろうか。

まあ背に鞍を載せるくらいなら、

塩を満載した車を鞭で打たれつつ塩を満載した車を曳^ひくよりはましだろう。

(詩の終わりは、遠い南方から徐大正がわざわざきてくれたことを、国の専売品である塩と運ぶ労役よりはましだろうと、やや微妙なジョークを交えてねぎらったのである)

■別無^{べつ}挾^{けつ}

無^む挾^{たく}は禅僧で、今回初めて知り合ったようだ。揚^{よう}州^{しゅう}郊^{こう}外^{がい}の竹^{ちく}西^{せい}寺^じまで蘇^そ軾^{しつ}に同行し、そこで別れ、この詩を贈った。後で見るとようにまた会うことになる。徐大正ともここで別れたようだ。

揚^{よう}州^{しゅう}の北^{きた}に、隋^{ずい}の煬^{よう}帝^{だい}を葬^{むす}った塚がある。

わざわざそこに立ち寄って煬帝を弔^{なぐさ}うほどの暇は、

無^む挾^{たく}師^しは持ち合わせていない。

それでも、竹西寺に来れたのはなぜなのか。

揚州から流れくる遊興の音楽を聴こうというのだろうか。

(1) 揚州は繁華な都会であったから、歓^{かん}楽^{らく}街^{がい}も繁盛し、その賑^{ちか}わい^{せい}が竹西寺にまで聞こえるのだろう。巷の喧騒を耳にするのもまた仏道に帰依する縁になるというのだろ

うか。(2) 竹西寺には秦観^{しんかん}の肖像画があり、蘇軾^{さん}はそれに賛を記した。本章 66 ページで見たように、秦観^{じゅん}は潤州にまできて蘇軾と会っていたが、蘇軾^{じょう}が常州に行っている間に高郵県^{こうゆう}に帰り、北上してくる蘇軾と再会するのを待ち受けていた)

■元豊七年十一月十三日与幾先自竹西来訪慶老不見独君卿供奉蟾知客東閣道話久之

詩題は「十一月十三日、杜介^{と かい}（字は幾先^{あざな き せん}）とともに竹西寺から（ある寺に）来て慶老^{けいろう}を訪問したが不在であった。寺には君卿^{くんけい}（元の官員）と供奉^{ぐ ぶ}（接待役の僧の）蟾^{せん}がいたので東閣^{とうかく}でしばらく仏教について語り合った」。

黄色い落ち葉が長い廊下を走る。

香^{こう}の煙は長く垂^{すだれ}した簾の内に籠ったまま。

主人^{けいろう}（慶老）が帰り来るのを待っているのだが、

ついに帰って来ない。

紅い火は消え尽く、香は灰となって雪のようになる。

（これより 10 年余り後にのこと、ふとこの詩を思い出して記したと、蘇軾自身の添え書きがある。蘇軾は日付も一緒にいた者の名も正確に記憶していたのである）

■邵伯梵行寺山茶

蘇軾は杜介^{と かい}とともに北に進み、邵伯鎮^{しょうはくちん}の梵行寺^{ぼんぎょう じ}に立ち寄り、山茶花^{さざん か}を詩

に詠んだ。

さざんか
山茶花の木が対をなしている。

誰が植えたのだろうか。

細かい雨が降り、あたりに人はない。

私は独りここに来て君に問う。

らんこう
「爛紅 火の如くに 雪中に開く——

その真実の意味は何か」

問いかけたところで、君は理解しない。

(山茶花は蘇軾の問いを理解しないのではなく、真理はもとより山茶花に宿り、それを理解しないのは蘇軾の方であるということであろう)

■高郵陳直躬処士画雁

蘇軾は11月下旬に秦観しんかんの故郷、高郵県こうゆうに至る。ここに画を得意とする陳ちん直躬ちよくきゆうという官に仕えない者がいた。陳直躬が描いた雁の画を見ての詩。

其の一

野の雁は、人が来たと見ると、

飛び立つよりも前に、まずその意こころを改める。

君はどこからみ見て、

人がいないときの雁のこのありさまを写し得たのか。

雁は枯れた木とも変わらないかたちで、

その雁を写した君も同じ「自在」(自ずから^{じざい}在る^あまま)であつたのだろう。

北風が枯れた葦を振るい、小雪がきらきらと落ちかかる。

雲水は淡く^{くら}昏く、水際に細かい砂礫がある。

矢を負って雁を獲ろうとしたところで無駄だ。

ひとたび起つなら、

雁はもう^{こうかい}江海の遥か向こうを飛んでいるのだ。

其の二

もろもろの鳥はしばしばもめごとを起こす。

野の雁だけは静かで潔い。

^{こころ}意に自得して^{おもむろ}徐に進み、

首を上げ下げする動作にもきちんとした節義がある。

私は衰えた身^{こうこ}を江湖に寄せ、

老に伴うのは鶯鳥やら鴨やらの騒がしい連中だ。

書を作って^{ちん}陳先生に尋ねたい――

この夕暮れの景色は^{ちようすい}苔水あたりなのか。

雁は互いに^{したしみあつ}依依て^{まる}円い沙のあたりに集まり、

斜めになった月のもとで^{こまやか}稍稍に動いている。

一羽が鳴いて翅はねを鼓つと、

蘆あしについていた雪が一面の花吹雪となって舞い上がる。

(描かれた雁に託して自身の心情を詠んだのだろう。茗水ちようすいは湖州の名勝であることは第4章68ページなどで見ている。茗水の名を出して、土地を得た江南こうなんの風光に思いを寄せているのだろう)

■蔡景繁官舎小閣

高郵こうゆうで杜介とかいは帰り、蘇軾しんかんは秦觀を伴って船を進め、冬至(11月22日)の頃そに楚州に到着した。そこで官職に就いていた蔡承禧さいしやう き(字は景繁あざな けいはん)の官舎にある小閣でこの詩を詠んだ。蔡承禧と蘇軾は同じ年の科挙で合格したいわゆる「同年どうねん」の間柄。蔡承禧の父の蔡元導さいげん どう(字は濬仲しゅんちゆう)もそのときの科挙で同時に合格し、父子で「同年」という極めて珍しい例であった。父の蔡元導は先に亡くなり、蔡承禧は当時の執行部に批判的であったために地方に出されていた。なお、蘇軾が黄州の臨臯亭りんこうていの南に南堂なんどうを築いたときに支援をしてくれた人として蔡承禧の名をすでに見ている(第6章380ページ)。そのときは蔡承禧は海州かいにいて、その後、楚州に移ったのである。

貴君は東南の地の誇りであるだけでなく、

お父上の立派な振る舞いをそのまま保っている。

昔むかし、蔡謨さい ぼは権力者の激怒を買っても連中の阿呆な行為を嘲り笑った。

昔むかし、^{さいりやう}蔡郎は権力者に強要されても愚かな政策に署名するのを拒んだ。

貴君は都を出されて三年、

風月のうちで千首の詩を詠んで^{おもひ}懐を放ってきた。

小閣の扉を開いて、秋の清らかな光のもとに座り、

東の川の明るい照り返しに目を細める、

傍らにあるのは琴と酒、

夕日が靄を染めるまで眺め続け、

千里の彼方へと独り鳥が飛び去るのを見送ると、

貴君は窓の紙に詩を記す。

いつしか小閣の前の柳に、

都から来た立派な船が繋がれるであろうか。

近頃朝廷は制度を一新し、才ある人を集めようと大騒ぎになっているとか。

私と貴君がここで会うのは天の定めによるのか。

貴君は寂寞としてこの東南の地にいる……

((1) 都から見て楚州は東南の地である。(2) 同じ^{さい}蔡姓の人の優れた行為を挙げて、^{さい}蔡承禧^{しやうき}父子の節義を讃えている。(3) 神宗皇帝はこれより3年前に官制の大改革を断行した。^{そうちょう}宋朝の官僚制度は^{とうちやう}唐朝からの制度を受け継ぎつつ、新たなものをその都度付け足してきたために複雑かつ無駄の多いものになっていた。制度変更に伴い、出世の道が開けるかと期待する者が大勢いたのだろう。蔡承禧も蘇軾もそういうこととは無縁であるというのがこの詩の終わりの部分)

■和王旂二首

楚^そ州^{ちゅう}で王旂^{あざな げんりゅう}（字は元竜）に会い、その詩に和した。王旂は王安国^{おうあんこく}（字は平甫^{へい ぽ}）の子。王安国は王安石^{おうあんせき}の弟。王安国は兄が^{りょけいけい}推し進める改革には必ずしも賛同しないところがあり、特に兄が呂惠卿^{りょけいけい}を重用するのを見て警戒するよう忠告した。そのため呂惠卿によって罪に陥れられ、政界を去って郷里に帰り、これより 10 年前に 47 歳で亡くなっている。この詩の第 1 首は父の王安国のことを詠んでいる。

其の一

かの李白^{り はく}は仙界から人間世界に追放された人であろうといわれていた。

貴君のお父上は、

その謫仙人^{たくせんじん}が長くそのままこの世に留まったその人ではないかと怪しまれた。

舌を動かせば雷の勢いがあり、筆を揮えば神のようにすばやかだった。

聞くところでは、

いまは鯨にまたがってのんびり遊んでおられるとか。

思い出されるのは、

かつて大官の前でも風をつぶしつつ辛辣な批判をしていたお姿。

その気迫は衆人を呑み、人々は目を開けてお父上を見ることができなかった。

お父上の詩は子弟に伝えられ、いま絶倫の技を誇っている。

旧知の私も白髪となり、
心空しくお父上の詩巻を掩い、
涙を河に注ぎ、天に問うのである。

其の二

私はかつて軟らかな春風に送られて、
ここから遠い地に行き(^{こう}黄州に向かったことをいう)、
澄み切った冬の月の光もと、
ここに還ってきた。

一年が終わろうとしているいま、
^{ちようこう}長江と^{わい}淮河の間に留まったままで、

もっぱら貴君一家の人々の間を行き来している(^{おうあんせき}先に王安石を訪ねたことをいう)。

^{らくよう}洛陽から新たに掘削された運河に氷が流れるのを嫌うわけではないけれど、
しばらくはここの山々の松に雪がつくのを眺めていようかと思っている。

野の梅や官道の柳に春の兆しが動くのはいつだろうか。

貴君の車はそのときに長い橋を飛ばして走りたいと、
貴君が閑になるのを待っているのだ。

(このあたりは水路が複雑に交差し合い、都に行くことも洛陽方面に行くこともできた。真冬に向かって運河に氷が浮かぶようになってきたのだろう。それを理由に、蘇軾の歩みは一段と遅くなる)

■王平甫夢靈芝宮

上の詩で見た王安国（字は平甫）とは、蘇軾がかつて都にいた頃と交流があり、その縁で、王安国が亡くなった後に遺族からの依頼でこの文章を書いてい^そた。楚州に^そ来たこのときから7年ほど前のことである。

王安国は熙寧癸丑の歳(1073 年)に(皇城の)崇文館に宿直し、夢を見た。

人に連れられて海上に至った。見ると、海の中に極めて堂々とした宮殿があり、音楽が聞こえてきた。笛を吹き太鼓を叩く人が大勢いるようだった。宮殿に「靈芝宮」の額が掲げられていた。出迎える人がいて、王安国は一緒に行こうとした。すると、宮殿のかたわらにいた人が、水を隔ててこう言った。

「まだその時ではありません。しばらくお帰りなさい。いずれそのときにお迎えがまたあるでしょう」

そこで恍然と夢から覚め、禁中の鐘が鳴った。

王安国は心にはっきりと知ることがあり、詩にしてこのことを記した。

万頃波濤木葉飛、(木の葉のような船が万頃の波濤の上を飛び)

笙歌宮殿号靈芝。(笙の聞こえる宮殿があって「靈芝」と号した)

揮毫不似人間世、(額の文字は人間世界のものには似ていなかった)

長樂鐘来夢覺時。(皇城の長樂殿の鐘が鳴って夢から覚めた)

それから四年で王安国は病気で亡くなった。家の人々は哭し、その霊に向かって

尋ねた。

「かつて靈芝宮に行かれた夢を御覧になりましたが、その通りになりましたでしょうか。

私たちにどうか教えてください」

夕暮れに香を焚くと、人々に語りかけるような声をした。家の人々は紙銭を燃やし、

「靈芝宮に本当に行かれたのでしょうか」

と尋ねて占うと、「そうだ」という答えが出た。

昔、ある人が海の彼方ほうらいどうの蓬萊島はくきょいに行き、樓閣が並ぶ中はくらくてんに白居易(白樂天)の部屋があるのを見た。白樂天は詩にそのことを記した。王安国の夢とよく似ている。思うに二人は天が生んだ逸材で、その精神が寓するものは特別で、物の道理がそこに具わり、窮め尽くすことができないほどであった。

王安国の家の人々は泣いてこのことを書いてほしいと私に言い、それでこの文章を書き、家の人々の心を慰めることにした。

(この夢のことを踏まえて、上の詩の第1首で王安国を仙界から来た人、「謫仙人」たくせんになと言ったのである)

■和田仲宣見贈

楚州知事の田待問そ でんたいもん あざな ちゅうせん(字は仲宣)から贈られた詩に和した。

江南こうなんの酔っぱらい知事さんは大らかで、

町の人々にも気さくに声をかける。

旅を続ける私には川の水さえ応えてくれず、
 月だけが情があるかのように一緒にいてくれる。
 知事殿に弟子入りすることは叶わないとしても、
 「酒の友として君に勝るものはいないなあ」
 と言ってもらえたりするだろうか。
 知事殿のすばらしい歌に、
 私のこんな悪声では和しようがないので、
 とにかく燈火を継いで、觥を重ねるとしよう。
 (詩の冒頭で、「酔っぱらい知事さん」(原文は酔司馬)とあるのは、「酔吟先生」と号した白楽天の故事を踏まえている)

■浣溪沙

楚州知事の田待問のもとに小鬟という妓女がいて、2首の詞を贈った。
 第2首を訳す。

其の二

一夢江湖費五年。(あれは一つの夢、川や湖で費やした五年のこと)
 归来風物故依然。(ここに帰れば風物はずもとのまま)
 相逢一醉是前縁。(互いに会って酔いをともにするのは前からの縁によるのでしょう)

遷客不応常眊▲、(さすらいの旅人が憂いに悶えて何もいわずにいると)

使君為出小嬋娟。(知事殿は嬋娟^{かわい}い女性を出してくださいました)

緑鬟聊著小詩纏。(その緑の鬟^{まげ}にこの小さな詩を付けましょう)

(▲は目+梟という字。眊▲は煩悶するありさまをいう)

■虞美人

船は楚州から淮河^{そ わい が}に入り、少し上流に遡った維揚^{い よう}にまできたところで、同じ船に乗ってきていた秦觀^{しんかん}とも別れ、この詞を詠んだ。蘇軾は川の流れを遡ってさらに西に、秦觀は川の流れに乗って東に行く。

波声拍枕長淮曉。(波の声が枕を打つ、長大な淮河^{わい が}のこの曉)

隙月窺人小。(隙間から人を覗くのは、小さな月)

無情汴水自東流。(無常にも川は東へとひたすら流れ去ります)

只載一船離恨、(君と離れてしまう恨みを載せて船は)

向西州。(西へと向かって行くのです)

竹溪花浦曾同醉。(君と竹林の谷や花咲く川辺でともに酔いました)

酒味多於淚。(酒の味にはいつも多くの涙が混じっていました)

誰教風鑒在塵埃。(君の顔を看て占うに、どうして君の相には塵埃^{そう}があるのでしょうか)

醞造一場煩惱、(ひとつの煩惱が造り出され)

送人來。(君は人を送ってここにまで来てしまったのでしょ)

(後半でかつてともに酔ったといっているのは、先に潤州^{じゆん}で会ったことを指すのだろう。「塵埃」や「煩惱」は、才能がありながら秦觀が科挙に合格できずにいることをいうのであろう。蘇軾^{きんりやう おうあんせき}は金陵で王安石に会った後で、秦觀の詩文を王安石に送って後押しをしてくれるよう頼んでいる)

■ 龜山弁才師

維揚^{いよう}から少し進むと左手に龜山^{きざん}という小さな山が見えてくる。かつて杭州^{こう}に赴任した際に龜山の詩を詠んでいる(第3章132ページ)。今回は山に立ち寄って弁才大師^{べんさい}にこの詩を贈った。

(杭州^{こう}の西湖^{せいこ}のほとりの寺にいる弁才大師(第6章107ページ、本章18ページ)とこの龜山の弁才大師は別人である)

我が人生は、一念ごとに、空に浮く雲のように変化する。

淮河^{わいが}よ、そなたは変わることなく流れ続ける。

淮河にかかる虹の橋の南、

龜山^{きざん}の背後に新たな運河が開削され、

そのほとりに我が師はいま宴坐^{えんざ}している。

木魚の音が林を震わして私を迎え、

鉄の竿の先に赤い旗が靡いている。

進むにつれて堂宇が大きく奥深くなり、
聞くにつれて大師の声から風が生じ雷が鳴る。
大師が浮ふ漚おう（空である世）の間に遊び戯れるのを羨み、
指を弾く間に栄枯が入れ替わる中にいる己を笑う。
大師のもとで、茶を嘗め画を見るだけでもよい。
仏法について問い、詩を求めれば、融ゆう通ずう無碍むがいに応じてくれる。
私は千里の旅の途中で再びきざん亀山に立ち寄り、
五年も一つの夢、
そのときに会った人はいま誰がいるのだろうか。
来世においては香火の縁を結び、
永く名山の内で大師のために井戸の水を汲んでお仕えしたいものだ。
（終わりのあたりで「五年も一つの夢」というのは、都からこう黄州に流されてからのことをいう。先にも 5 年ぶりに戻ってきたと歌っていたが、黄州に向かう際にはここは通っていないようなので、広く淮河の流れに立ち戻ったことをいうのであろうか）

■如夢令

かつて杭州に赴任する旅では、泗州を暁に経って朝食の前にきざん亀山に着いたと詩に詠んでいた（第 3 章 131 ページ）。今回は逆に亀山から流れを遡って泗州に至った。泗州到着は 12 月 1 日で、すぐに有名な僧伽塔（そうが ようきとう雍熙塔）（第 3 章 130 ページ）を訪ねた。そこで仏舍利を見せてもらったり、沐浴し

たりして、この詞を詠んだ。2首のうち第1首だけを訳す。短い文章が付いている。

げんぼう し ようきとう じょむれい
元豊七年十二月、泗州の雍熙塔の下で沐浴をした。戯れに「如夢令」の詞を二
首作った。この曲はもと後唐の^{こうとう そうそう}莊宗が作ったもので、一名を「憶仙姿」という。そ
の曲名が雅でないのを嫌って後に「如夢令」と改めた。莊宗の詞にはその終わりに
「如夢、如夢、和淚出門相送」(夢の如く、夢の如く、涙とともに門を出て送ります)とあり、
そこから曲名を取ったのである。

そうそう こうとう りそんきよく
(莊宗は、五代十国時代の後唐の初代皇帝李存勗である。約300年の歴史を誇った大
唐帝国の末期、李克用と^{りこくよう しゅぜんちゆう}朱全忠が激しく争い、勝利した朱全忠が唐を滅ぼして皇帝の
位に就いて^{りよう}梁王朝を立てた。それが五代十国時代の始まりであった。李克用の息子の
李存勗は復讐を誓い、朱全忠の後継者を破って梁を滅ぼし、自身は大唐帝国の後継者だ
として唐王朝を立てた。李存勗は天才的な戦術家で、戦争には滅法強かったことから自
信過剰になり、遊興に耽り、将兵の信頼を失い、その身を滅ぼした。李存勗による原曲
は、仙界での宴を歌ったもので、宴を終えて、泣きながら別れた後は夢のようである
というのが「如夢」である)

其の一

水垢何曾相受。(冷たい水で垢を落す修行などしなくてもよろしいのです)

細看両俱無有。(よく考えてみれば、水も垢もともと無なのですから)

寄語揩背人。(背中を擦っている人に申し上げます)

终日劳君挥肘。(ひねもすあなたの肘をどうぞ疲れさせなさい)

軽手。(軽やかな手)

軽手。(軽やかな手)

居士本来無垢。^{どうば こじ}(東坡居士は本来無垢なのです)

■次韻王定国南遷回見寄

^し泗州に滞在する間に^{さいしやう き}蔡承禧(字は^{あざな}景繁) (本章 100 ページ) からの手紙が届き、そこは^{とうとう}唐垌(字は^{りん ふ}林夫)の手紙と唐垌から^{あざな}蘇軾に贈る硯が添えてあった。唐垌からかつて筆の名品を贈られたことは第 6 章 441 ページで見ている。ちょうどその手紙を受け取ったころ、^{あざな}蔡承禧は不幸にも 12 月 12 日に急逝している。その一方で、^{おうきやう}王鞏(字は^{あざな}定国)から、都への帰還を果たしたことを詠んだ詩が送られてきた。王鞏はこのとき^{なんけいおうてん ふ}南京応天府の^{ちやうほうへい}張方平のもとにいた。王鞏は張方平の婿である。王鞏の詩に次韻したのがこの詩。

秋の水のような輝きを放つ銅剣。

土の中に置かれると、剣に曇りが生じ、光が蝕まれてしまう。

それでも、^{と いし}硬い砥石でこしこし磨けばよいのだ。

美食と美服によって具わってしまったなまぐらな習性だって、

苦い木の実を十年間食べ続け、万里の荒波に洗われるなら、
すっかり鍛えなおすことができる。

帰還を遂げた貴君の詩は清らかにして激しく、
百丈の高さから落ちる滝壺の中に鯉を見るかのようにである。

代々の名家の余沢を享受するさまはもはや消え去り、
仙境で香草を摘むかのような風情をかもし出しつつある。

貴君は遠い流謫の地は^{るたく}いずこであったかと思いを馳せ、
かつての彭城での遊び^{ほうじょう}(徐州知事であった蘇軾を王鞏が訪ねたことをいう)はまことに夢で
あったと詩に歌う。

貴君も知るように、
甘い水を湛える井戸はすぐに汲み尽くされてしまう。

私が願うのは、
苦い^{すもも}李こそが大きな実を全うできるようになるということ。

^{みだ}妄らな心によって九回もねじくれてしまった腸はもとにもどらないというし、
道の奥義を究めるには骨の髄を三回も洗わなければならないともいう。

貴君は陽羨^{ようせん}(宜興県)よりも広陵^{ぎょうりょう}(揚州)の方がよいといってくれるのだが、
大切なのは私にとっての無何がどこなのかということだ。

^{らんぜんろうし}楽全老子(張方平)は現在の禅の大家で、

雷^{らい}を掣^{ほこ}え鋒を制する勢いは他に及ぶ者がいない。

楽全老子は人の心を見通し、

あれこれ問うまでもなく、印可^{いん か}すべき者には「如是^{よろしい}」というだけである。

貴君と逢うなら話が尽きることなく続き、

桃の花のもと、春の川にいつまでも舟を浮かべることになるだろう。

(詩の構成がごたごたしているのは韻字の位置に制約される次韻の詩であるからだろ
う。それでも王鞏への気遣いは伝わってくる。終わりの部分は南京応天府での再会を楽し
みにしているということ)

■乞常州居住表

上の詩にあるように、隠棲するとしては揚州^{よう}の方がよりよいのではない
かと王鞏^{おうきよう}は提案していたが、蘇軾^{そし}はすでに常州宜興^{じようぎこう}県に土地を得てそこ
に退くことを決めていた。そのことを朝廷に願う「表^{ひょう}」を先に書いたが、
揚州の役人は受け取ってくれなかった。そこで、より委細を尽くした文章
に書き改めて朝廷に提出した。

^{わたし}
臣蘇軾が申し上げます。

^{わたし}
臣が聞いておりますに、聖人が法を行いますと、その怒りの威力は雷が草木を震
わせるように甚だしいものがありまして、最終的には人は聖人のもとで生きようと帰
するのであります。また、人の上に立つ君主が人を罪しますと、父母がその子孫を
譴責するように鞭打つことが甚だ厳しくても、死なせるまではしないのであります。

^{わたし}
臣は棄てられて漂流する者、枯れてなお生きながらえている者、血を流して泣いて

詞を書き天を呼んで命を請う者であります。願うところは、日月の光がいま一度臣を照らしていただき、向日葵が日に向かうのと同じ心が臣にもあると明らかにされることであります。このことが朝にお上にお耳に達するなら、夕べに死んでも悔みはないのであります。

臣蘇軾、誠惶誠恐頓首頓首。

臣はかつて宮中の便殿において皇帝陛下の前にこの身を置き、陛下の徳あるお声をお聞きし、陛下にお知りおかれること人を超えるものがありました。しかし、妄りに狂狷を發し、お上の御恩に背いてしまったのであります。しかるべき職務にあった者は臣を誅すべきでであるとし、いかなる明主でありましても決して赦せるものではありませんでした。しかし、お上は衆議に従われ、臣は官職を廃することと五年となりました。臣は憂いを積み、心は塞がれ、たちまち齒が抜け髪は白くなってしまったことに驚き、罪を犯した悔恨を骨に刻み、傷ついて皮や肉がわずかに存するのみとなっていましたのであります。

近ごろ御恩を蒙り、汝州に量移となりました。伏してその訓詞を読みますに、「人の材は実に得難く、ついに棄てしまうのは忍びない」の語がありました。単に獄に繋がれることを免れただけでなく、晩年に望みをつなぐものであります。まだ死なずにいてついに天に日を見ることができたのであります。こうなりましたからには、独り年老いることを嘆いたり、僥倖を望む心をさらに生じさせたりすることはもはやいらないのであります。

しかしながら、禄を頂戴することが久しくなかったために、衣食を継ぐことができずに

おります。^{わたし}臣には係累が多く、汝州への道は遠くて舟で行くよりなく、黄州を離れましてからは、波風の激しさに驚き恐れ、一家を挙げて重い病いとなり、一子を喪うに至りました。いますでに^し泗州に着きましたが、ここで旅費が尽き果て、汝州はなお遠く、ここから陸地を行くこともできません。汝州には住むべき家はなく、食を得る田もありません。二十余人の者が帰するところがないのです。飢えと寒さの憂いが朝夕に迫っております。恥を忍んで周囲の者に無理強いして求めるよりは、誠の心を投じて、父のごときお上に命を託すのがよいと思う次第に^{わたし}^{じょう}ございます。臣には常州^{ぎこう}宜興県にわずかばかりの農地があります。薄い粥くらいはどうか得られるであります。聖なる慈悲によって常州に居住することをお許くださいますよう切に望むものであります。

^{わたし}臣の罪が至って重いことから、^{わたし}臣のこの希望に従うことが許されないのを恐れます。そこで、^{わたし}臣にもわずかながらの功勞がなきにしもあらずでありますことをここに述べ、お上の御恩をお貸いただきますことを願うものであります。^{わたし}^{じょう}臣が徐州知事でありましたときに、^{こうが}黄河の水が町を浸し、ほとんど沈みかけたのでありますが、^{わたし}臣は日夜守り防ぎ、どうか町の安全を得ることができました。それによって朝廷からお褒めのお言葉を頂戴しました。また、^{ごん}沂州の民の程棐を選び用いて凶悪な連中を捕えさせましたところ、^{りたく}^{かくしん}謀反を企てた妖賊の李鐸、郭進等一十七人を捕え、聖恩を蒙りまして罪を赦して保釈したのであります。このようなことは臣下として普通に行うべきことであって、小指の先ほども言うべきではないのですが、敢えて自ら申し上げますのは、現在の窮迫した状態によるものであります。願いますのは、僥倖を仰

ぎ、臣^{わたし}の功罪^{きしゅう}を比べ、羈囚^{わたり}の身から少しく出て臣^{わたし}の便宜^{べんぎ}とするところに従ってもよろしいとしていただけることであります。

重ねて念^{おも}いますに、臣^{わたし}の本性^{ほんせい}が強情^{きやうじやう}にして偏狭^{へんきや}で、その運命^{うんめい}はもとより窮迫^{きやうぱく}すると決まっております、すでに天^{てん}には罪^{つみ}を得て、下^かには助けてくれ者はおりません。怨^{うら}み仇^きとする者がこもこも集まって、臣^{わたし}の罪惡^{ざいご}をたくさんに明らかにしました。群臣^{ぐんしん}の言^{こと}はあるいは愛憎^{あいそう}より起こることもあり、孤忠^{こちゆう}もついには疑わしきに陥^{おと}ることもあります。

臣^{わたし}の心^{こころ}に愧^{はじ}えることはないと自ら明らかにできないいま、人主^{にんしゅ}より保全^{くわんぜん}を賜^{たま}うことがなければ、臣^{わたし}のささやかな命^{いのち}は今日存在^{そんざい}することもないのであります。

伏^ふして思いますに、皇帝陛下^{せいてんてんじゆう}は聖神天縱^{せいしんてんじゆう}、文武生知^{ぶんぶせいち}、天下^{てんか}の英才^{えいざい}を得て、すでに三樂^{さんらく}を完全^{かんぜん}にしておられます。皇帝陛下^{せいてんてんじゆう}はその民^{たみ}の天寿^{てんじゆう}を全うさせ、一人もお棄^{あきら}めてになることはないのであります。まことに善^{ぜん}を尽くされたというべきであります。臣^{わたし}は百年^{ひゃくねん}続^{つづ}く嘆きを抱^{かか}き、そのために一回^{ひとへ}の満足^{まんぞく}な食事^{しじ}さえ得^えることもできずにあります。貧病^{ひんびやう}にこもこも攻められ、命^{いのち}を保ち難^{がた}くしております。鳥^{とり}は川^{かわ}や湖^{うみ}があれば生きられましょう。しかし、犬^{いぬ}や馬^{うま}でも君父^{きんぷ}のような主人^{しゅじん}を求めます。敢^あえて仁聖^{にせい}に祈^{いの}り、憐^れみをかけてくださいますようお願い申し上げます。

臣^{わたし}は前に進^{すす}んで南京^{なんきん}応天府^{おうてんふ}に至^{いた}り、朝旨^{あそめ}をお待ち申し上げます。

干冒^{かんぼう}天威^{てんい}、臣^{わたし}無任^{むにん}。

■行香子

泗州^し知事^{ちじ}の劉士彦^{りゅうしげん}とともに南山^{なんざん}に遊び、この詞^しを詠^よんだ。都^{みやこ}から南東側^{なんとうがわ}

は水流が縦横に走る低地で、初めて行き当たる山が南山だという。

北望平川。(北に望むのは平らな川)

野水荒湾。(野の水が勝手放題に流れます)

共尋春、(ともに春を尋ね)

飛步屣顔。(急な斜面も飛ぶように歩きます)

和風弄袖、(やわらかな風が袖にまわりつき)

香霧縈鬟。(香しい霧が髪を巡ります)

正酒酣適、(ちょうど酒^{たけなわ} 酣)

人語笑、(人は笑い合います)

白雲間。(白い雲の間で)

飛鴻落照、(落ち行く日に向かって鳥が飛び去り)

相将歸去。(さあともに帰りましょう)

淡娟娟、(淡く美しく)

玉宇清閑。(玉宇^{そら}は清らかに^{のどか}長閑です)

何人無事、(誰なのでしょうか、何事もなく)

晏坐空山。(この山で安らかなに座っている人は)

望長橋上、(ところが、長い橋の上を見ると)

燈火乱、(灯火が乱れています)

使君還。(知事殿は還ってしまうのです)

(後半は、山中に留まるわけにはいかず、残念ながら多忙な日常に戻らなければならないと歌っている。この部分について『揮塵後録』(王明清著)という随筆は次のような話を伝えている。

東坡先生は黄州から汝州に移る途中で泗州に停泊し、この詞を作った。

「晏坐空山。望長橋上、燈火乱、使君還」。

泗州知事の劉士彦は法家の学問を学び、山東出身の堅物であった。この詞のことを聞くと、東坡先生のもとを訪ねて言った。

「新しい詞のことを伺いました。先生のお名は天下に知られています。詞はきっと都にも伝わるであります。しかし、法として、夜に泗州の長橋を渡った者には二年の徒刑が科せられることになっています。まして知事が禁を犯したならどうなるでしょうか。どうかその詞を引込め、人に見せないようにしていただけないでしょうか」

東坡先生は笑って言った。

「私の一生は罪過ばかりです。口を開けば、いつでも徒刑二年どころではすまないのです」

(1) 黄州の「牛酒帖」(第6章408ページ)で見たように、蘇軾が禁令を犯したという話は人々に好まれる。泗州の長橋の話もいかにも蘇軾らしくて面白いが、これを記録した王明清という人は眉唾の話を好む癖があり、信憑性はかなり低い。(2) 知事が山東出身であるとわざわざ断っているのは、融通のきかない武骨な土地柄であると思われるからだろう。逆に、江南出身なら、先に江南の商人を歌った詩で見たように、目端の利く小器用な人間ということになるだろうか。(3) 上に見た朝廷に提出した文章の

重々しさとこの詞の軽さの落差がいかに蘇軾らしいのだろう)

■泗州南山監倉蕭淵東軒二首

上の詞と同じときかどうかはわからないが、泗州の南山に遊んだ帰り道に、官の倉庫を管理する蕭淵（字は潜夫）という人の東軒に立ち寄り、この詩を詠んだ。南山には都梁という香草があるので都梁山ともいうと、蘇軾自身の注記があり、詩の冒頭にその草のことが詠まれている。

其の一

きこり 樵に従って都梁草を採取しようとした。

竹葺きの屋根、松の枝を編んだ扉があったので、水を求めたところ、机によりかかって悠然と過ごすにちょうどよいところであった。まさかこの主人が倉の管理をするお役人であるとは誰も気がつかない。前を流れる溪川の底には石が乱れ、ここを囲む垣根には古びた趣がある。

寒い山中で採った草を茹で上げると、箸までも高く香る。

私は江南の地から来た旅人、

冠が無造作に門にひっかけてあったのを見て、

ここに白樂天が褒めた蕭爺さんのような風流人がおられると知ったのだ。

(唐の白樂天に蕭 という隠者を讃えた詩があり、同姓の蕭淵になぞらえたのである)

其の二

北を望むと塵が飛びかい、

ここから先に進んだなら、昼間も空から降り来る土に苦しめられるのだ。

心を洗って、しばらくこの東軒にこの身を寄せたく思う。

珍しい鳥の音がするのは、

南方の地を想って鳴いているのだろうか。

野の橘たちばなの香りがすがすがしいのは、

まだ淮河わいを北に渡っていないからだ。

有信ゆうしん(まごころがある)のせせらぎは遠くの嶺からここへと流れ来て、

無心の明月が誰もいない階段の上で光を移して行く。

小さな役目を担う役人として老いることこそがよいのだろう、

松の根が断崖に絡みつかりさまを坐して見ていられるのだから。

(詩の初句「北望飛塵苦昼ちり霾つちふる」(北に望めば飛ぶ塵、昼も霾 ことに苦しめられる)は、実際の光景として間もなく黄砂の季節がくることをいいつつ、蘇軾の心象風景を表すものでもあるのだろう。つまり、淮河を渡ってさらに都に近づくなら、自分は土の降るような中に置かれてしまうと感じているのである。かくて蘇軾は、北からくる運河に氷が浮き航行が困難になったとして、しばらく泗州に留まり続ける)

■贈梁道人

泗州から先に進むことをためらう蘇軾の眼は「異人」たちに注がれる。梁道人という奇行の人にこの詩を作って贈った。

貴君は市で薬を売る。

夕方に市が閉まると、かの仙人と同じく、壺の中に身を投じて消える……

長安に行ったなら、

銅人の手を撫ぜ、「五百年ぶりだなあ」と微笑み合う……

老人や長老は貴君のことをずっと昔から知っている。

貴君からしたら、造物者だって小児のようなもの、

貴君が気ままに振る舞うのを見ているだけだ。

山では、暦がないから、寒さが尽きると春が来たと知る。

川では、雨が降ろうが蓑をまとして、舟に任せて自由に行く。

聞けば、神仙の世界はどこかの官界のように序列がやかましいとか。

それで貴君はいまも人間界に留まって、

酔って歌いつつ歩むのである。

（死後の世界にしても仙人の世界にしても、現世のコピーのように厳重なヒエラルキーがあると考えられていた。社会モデルとして、皇帝を頂点とするピラミッド構造以外のものを考えつかなかったのだろう）

■次韻張琬

し ちょうえん
泗州の張琬という人の詩に次韻した。張琬は官職にある者であろうが、詳しくはわかっていない。

両岸が高くなったかのように見えのは、新たに霜が降ったからだ。

塵埃にまみれた袂を挙げて、初冬の風の冷たさを識る。

わい が いにしえ
淮河に臨むこの地には古より名士が多く、

他郷より寄寓する人がいれば酒を携えて楽しませようとする。

貴君は半日の閑を偷んで、

私が歌嘯の内で過ごせるようにしてくれているけれど、

人の一生の百年などは、

知らず知らずのうちに往来の内で尽きてしまうのである。

しかし、貴君は窮愁のうちにあっても老いることはなく、

詩を詠めば虹を吐く勢いがある。

■題雍秀才画草虫八物

し ようしゆうさい
泗州に画を得意とする雍秀才という人がいた。8種の虫を描いた画を見てこの詩を詠んだ。8首のうち5首を訳す。

草むらに注ぐ月の光の聲は耿耿、
露を宿す葉の裏に鳴くおまえの聲は溥溥。

長い夜に、
おまえは自分自身を暖めることもできないのだから、
世に容れられない男児が寒さに震えているのを憂う余裕などはない。

がまがえる
蝦蟇

睨みつけているのは誰を瞋っているのか。
腹ばいになってやたらと脹らんでいる。
百足を困らせるようなことはしない方がよいのではなからうか。
そうしているうちにおまえだって飢えた蛇に吞まれてしまうだろうから。

かみきりむし
天水牛

おまえの二本の角はやたらと長い。
よくいうように、牽牛星は美しいけれど箱にしまってはおけない。
おまえも牛仲間だから箱に入れられまいとぴょんと飛ぶ。
しかし、牛だという割にはできることといったら、
枯れた桑の葉に穴を開けるだけなのだ。
(牽牛星は箱にしまえないとは、真に価値あるものは独占できないというような意味
の諺)

やもり
蠍虎

よたよた
跂跂と這うのは足のある蛇なのか、

にまるにまる
脈脈と走るのは角のない竜なのか。

笑ってしまうのは、

虎は虎でも、食らうのはつまらない虫どもである。

かつこ
(蠍虎を主題にした詩は第5章198ページでも見ている)

かたつむり
蝸牛

ねばねばの液は殻を満たすほどはなく、

どうにか己を潤すだけである。

高いところに上るだけでもとに戻ること知らないものだから、

壁に張り付いたまま涸れて死んでしまう。

(これらの一連の詩は何か飄^{ふう}するものとされ、例えば、蝸牛^{おうあんせき}の詩は王安石のことを歌っていると解釈されたりする。特定の人物を指すとするのは牽強附会の説であることを免れないだろうが、泗州から先に進むのをためらう心理を映し出すものであるのは確かであろう)

■与藩彦明

し はんへい あざな げんめい こう
泗州から藩丙(字は彦明)にこの手紙を送った。藩丙は、黄州で親しく

した藩一家の次男で、恒例となった1月20日のピクニック（第6章141ページなど）に毎回同行していた。

別れてから貴君のことをずっと思って心を去りません。変わらずに安らかにお過ごしのことと遠く想像しています。皆さまも恙なく^{つつが}されておられませんか。

地方試験の結果を見ていないので、お祝いを申し上げるのを控えておりましたが、必ずやよい結果を得たものと想っています。二度ほどお手紙を差し上げましたが、届いていますでしょうか。

東の坡^{おか}で笑って語り合う夢をしばしば見ます。覚めた後で呆然としてしまいます。

宜興^{ぎこう}に小さい農場を買うことができ、そこに住むことをお上に願い出ています。ついに^{じょう}は常州の民になるのです。

貴公はすでに都での試験を受けるために向かっていることでありましょう。このお手紙は出したものの、見てはいただけないでしょうか。

どうぞどうぞ御自愛ください。

（潘丙^{はんへい}については、蘇軾^{しんし}の文章に「進士潘丙」と記されているものがあり、科挙の地方試験には合格したものの都での試験には受からなかった人物であると第6章141ページで書いたが、この手紙を見ると、潘丙はこの年に地方試験を受けているらしく、事情が少し異なっているようだ。あるいは後年合格したので「進士潘丙」という表現になったのかも知れない。それはともあれ、潘丙との友愛は長く続き、短文ながらも潘丙宛の手紙が10通伝えられている）

■浣溪沙

蘇軾^しは泗州^しで年末を迎える。この詞には「元豊七年十二月二十四日、泗州^{げんぽう}の劉倩叔^{りゅうせんとく}に従って南山^{なんざん}に遊ぶ」との蘇軾自身による添え書きがある。劉倩叔がどういう人であるのか、土地の人間であろうとだけ推測されている。

細雨斜風作曉寒、(細やかな雨と斜めの風が作るのは曉の寒さ)

淡煙疏柳媚晴灘。(淡い霧とまばらな柳が媚びるのは晴れてきた川辺)

入淮清洛漸漫漫。^{らくすい} (洛水の流れは^{わい}淮河に入りますますのびやかです)

雪沫乳花浮午盞、(雪か乳のように白い泡が花のように開いた午後の茶)

蓼茸蒿筍試春盤。^{たでのめ} (蓼茸に^{よもぎのくさ}蒿筍を盛った春を迎えるための御馳走)

人間有味是清歡。(人間世界の味わいとは、こうしたちょっとした飲みなのです)

(前半は眼前の風景のスケッチ。朝は寒いけれど、流れに注ぐ日の光は明るい。遠く洛陽の方から流れてきた水は、淮河に合流した後もその本性を保っていると見ている。後半は、一服の茶や新年を迎える用意といったささやかなことに喜びを見出している。5種の辛いものを盆に盛った「五辛盤」を元旦に食べる風習があるということは第4章163ページで見ている)

■満庭芳

泗州^しで偶然、古い友人に出逢い、この詞を詠んだ。序文がある。

私は十七歳のときに始めて眉山^{びんざん}において劉仲達^{りゅうちゅうたつ}と行き来するようになった。今年四十九歳となり、泗州^しにおいて劉仲達^{りゅうちゅうたつ}に逢った。洛水^{らくすい}が浅く凍ってしまっているために私はしばらく泗州に留ま^るっていて、十二月三十日に劉仲達^{りゅうちゅうたつ}とともに南山^{なんざん}に遊んだ。昔のことを語って感じる^るところがあり、この詞を作った。

三十三年、(三十三年)

飄流江海、(川に海にさすらい)

万里煙浪雲帆。(万里の煙る浪、雲に帆を掲げて私はここにきました)

故人驚怪、(古い友人同士驚き怪しむのは)

憔悴老青衫。(憔悴し、老いて落ちぶれてしまった姿)

我自疏狂異趣、(もとより私は人と趣を異にする物狂い)

君何事、(貴君はいったいどうしたことなのでしょう)

奔走塵凡。(塵のなかを奔走し続けているとは)

流年尽、(今年も流れて尽きようとし)

窮途坐守、(道が行き詰まってここ留まるしかなくなり)

船尾凍相銜。(並ぶ船は凍りついたように船尾^{くわ}を銜^{くわ}合っています)

巉巉。^{たか たか}(巉巉)

淮浦外、^{わい がい}(淮河の浦の外に見えるのは)

層楼翠壁、^{みどり}(楼閣の翠の壁)

古寺空巖。^{いわた}(人気のない巖の上に古い寺があります)

歩携手林間、(手を携えて林の間を歩き)

笑挽纖纖。(笑って曳くか細い指)

莫上孤峰尽处、(峰の尽きる先まで上るのはもうよしにしましょう)

縈望眼、(遠く望んで眼に入るのは)

雲海相攙。(雲と海とが支え合うありさま)

家何在、(我らの家はどこにあるのでしょうか)

因君问我、(貴君も問い、私も問うのです)

帰夢繞松杉。(夢は帰り行きて故郷の木々を巡ります)

(劉仲達の名はここにしか出てこないようで、どのような人であるのか不明。恵まれた境遇にはなかったのであろう)

■如夢令

^し泗州での年の瀬に^{せいはいろう}清淮楼でこの詞を詠んだ。「^{じょ む れい}如夢令」の曲は本章 109 ページでも見ている。

城上層楼置巘、(町を上から見下ろすのは高い楼閣と重なり合う峰々)

城下清淮古汴。（町の下の流れるのは淮河と古汴河）

挙手揖呉雲、（手を挙げて南の雲に挨拶すると）

人与暮天俱遠。（暮れの空は人から遠ざかって行きます）

魂断、（魂は断たれ）

魂断、（魂は断たれ）

後夜松江月満。（夜更けの松江に月の光がいっぱいに満ちていることでしょう）

（松江は蘇州のあたりを流れる川。その名を借りて、そこからほど近い常州の隠棲地を想っているのだろう）

■泗州除夜雪中黄師是送酥酒二首

泗州で除夜を迎えた。雪が降る中、黄寔（字は師是）という官人が酒を贈ってくれたので、その謝礼に詩を詠んだ。2首のうち1首を訳す。

其の一

暮れの雪が、砕けた米を投げ付けるかのようにしきりと降りくるなかでも、春の流れが、ひそやかに沙の上を走り始めているのだろうか。

これまで過ごした日々は夢にも似て、
だたらとした無駄話のようなもの。

世間から逐われた旅人は、
僧と同じくもはや定まった家を持たない身である。

何か書こうとして、硯の水は凍ってしまい、
 かたわらの燈火は蠟がたまって薄暗い。
 そんな夜更けに、貴公から酒を贈られてきた。
 妻は驚いて起き上がり、
 我が宿はいつとき賑やかな笑いにつつまれたのだった。

(泗州に留まっていた理由には、氷が流れ来て航行しにくいこと、前進をためらう気持ちがあることに加えて、経済的な理由もあったのだろう。たぶん他の物品とともに酒が贈られてきたことに、即座に謝礼の詩を書いた。その詩に対して、^{しょう せん}章と銭という土地の人が和して(たぶん支援物資とともに)詩を蘇軾に贈ったので、さらに和して詩を返した。その詩に「我亦飢腸夜自呼」(夜に自分の腹がぐうぐう鳴る音で起きてしまう)という句がある)

■正月一日雪中過淮謁客回作二首

^{げんぽう}元豊8 (1085) 年、蘇軾 50 歳。

^し泗州で迎えた元日に雪が降った。町に行って人に会い、船に帰ってからこの詩を作った。2 首のうち 1 首を訳す。

其の二

^{ひそ}眉を顰めている——

何か憂いているのかというと、句を得るためである。

よい句ならいくらたくさんあっても構いはしないだろう。

寒々とした谷あい^あを埋めていた霧が晴れたので、

雪に覆われた町へと、

飢えた鳥が出かけて行った。

橋の上がにぎやかなのは、

春の市はもう終わってしまったのだ。

(あてのはずれた鳥、つまり私は帰るしかなく、)

暮れ行く淮河^{わい が}の平らな水面に、

長々と塔の影が引かれる。

今宵は乏しくなった燈火の油を使わなくてもすみそうだ。

夜になっても、雪明りで船の窓は自ずと明るいだろうから。

(この訳文は相当程度に空想の産物である。町に行ったのは、いよいよ泗州^しを発とうと、その段取りを定めるためで、しかし、思った通りに事が運んだわけではなかったという、ほとんど根拠のない想像のもと、珍解釈を加えている。この詩には「詩としての味^{あじわい}は無い」との評があり、敢えて面白げに訳してみた。同じ頃に、劉^{りゅう}という人の弓の練習場について詠んだ詩あり、相手をやたらと褒めるだけで、それこそ味わいがないので訳さないが、いくばくかの支援を得る都合もあって作ったのかも知れない)

■孫莘老寄墨四首

孫覚^{そんかく あざな しんろう} (字は莘老) の名を見て、久しぶりの登場だと、いささか懐かしさ

を覚える人は、すでにかかなりの蘇軾通であるといえるだろう。孫覚は第4章 47 ページから第5章 297 ページにかけて何度か登場し、蘇軾に連座した幾人かの中にその名があった(第6章1ページ)。その後、孫覚は都の要職に就いたのだが、改革派に靡いたのではなく、皇帝が孫覚の学識および書の腕前しよを重んじて近くに呼んだのである。この詩は孫覚が墨を贈ってくれたので、その謝札に作ったもの。

其の一

墨を作るための良材をかつて供給した徂徠そらいの山にいまは老松ろうしょうはなく、

墨を作る良工をかつて輩出した易水えきすいの地にいまは腕利きはいない。

いまや珍重される松の材は朝鮮らくろうの楽浪郡から採られ、

現代の妙手ほんこくというただ潘谷はんこくがいただけだ。

墨を作る秘方は、

鯉ぎょほうの魚胞ぎょほうを用いて杵つで一万回も搗くことで、

犀の角のように黒く、二匹の竜が蟠った形のものができるといふ。

このようにしてできあがった墨は私的に使われることはなく、

昼永く明るい日差しが注がれる蓬莱宮ほうらいきやう(宮中)に献上されるのである。

遙かに慕わしく思うのは、

そのような墨を用いて飛白ひはく体の書に筆を揮う貴君の姿、

長い虹に瑞祥を伴った霧がまとうその書に、天子が微笑むのである。

(この第 1 首は、皇帝への献上品として用いられる墨および孫覚の書を讃えたもの。
飛白体は余白の大きなかすれた書体である (第 6 章 5 ページ)。続く第 2 首は、そのよう
な墨を自分に贈ってくれたけれど、流落の身にはもったいなくて恥じるばかりである
と歌っているのだが、ここでは省略する)

其の三

私は貧乏で、飢えた鼠のようだ、
だから夜長に空しくざしざし歯をかみ合わせている、
——というわけではなく、
硯に水を湛え、^{かまど}竈の消炭のような粗悪な墨を磨っているのである。
そして、葦の軸を筆にし、柿の葉に書くのだ。
近頃、^{とう}唐先生が鳥の羽のように真っ黒な墨を贈ってくれた、
すると、貴君からもまた贈られてきて、
箱の中で二つの墨が輝いている。
晴れた日に、硯を洗って窓辺に座り、
^{へび}蛇や^{みみず}蚓がぬらぬら這うような字を書いてみたら、
世間には物好きがいるもので、
千鳥足で歩いた跡のようなものが欲しいと、門を叩くのだ。

(唐先生とあるのは、^{とうとう あざな りん ふ}唐垌 (字は林夫) で、唐垌が墨を贈ってくれたことは第 6 章 181
ページで、硯を贈ってくれたことは本章 111 ページで見ている)

其の四

私が窮したのはもとより詩のためだ。

だから、友人たちの戒めに長らく従って、

五年の間、江湖のほどり(黄州のこと)で口を閉ざし、

これまでの借りを償おうとしてきた。

ところが、このごろはまた少しずつ詩を作り出し、

悪いできものを掻きむしるかのよう、

それが実に快感なのである。

先生はそのことをお叱りにならないばかりか、

詩のせいで拷問を受けるようになるのを手助けするものを贈ってくれた。

墨の放つ鈍い光は、奇怪な思いを誘い出し、

荒く怪しい句を黒々と書かせようとする。

かくて詩ができ、自分で自分を笑ってしまう――

体にさわるからと蟹や蝦えびを断ってみたところで、

一度口にしたら最後、元の木阿弥もくあみなのである。

(1) 最後の第4首は、「^わかつちやいるけどやめられない」と戯れたのであるが、かなり際どいジョークである。(2) このころ都では重大な事態が進行しつつあった。孫覚が墨に添えてそのことを蘇軾に伝えたかどうかはわからない。神宗皇帝しんそうは前年の秋から病み、予断を許さない状況になっていた。皇帝が絶対的権威である時代において皇

帝の病気は国家の重大事である。まして、王安石^{おうあんせき}が提案した大改革は神宗皇帝であつたからこそ実行に移されたのであって、神宗皇帝の死は政治の大転換に直結することが予想された)

■泗岸喜題

1月4日、蘇軾^しは泗州を離れ、船の上でこの短文を記した。

私は黄州^{こう たくきゅう}に謫居すること五年、今日、泗州^しを離れて北に向かう。

騾馬^{ら ば}を連れ、鐸^{たく}(鈴)が籠と触れ合って、じゃらじゃらと鳴る音が岸の上から聞こえてくる。心の内に喜びが生じる。私はこの声を長らく聞いていなかった。

韓愈^{かん ゆ}の詩に、

照壁喜見蠟^{さそり}(壁を照らして蠟を見ても喜ばしく思える)

とあるが、この語はまこと虚しいものではない。

しかしながら、私は常州^{じょう}に住むことを願う書面を朝廷に差し出している。魚や鳥の本性は最終的には江湖^{こう こ}においてこそ安んじられるのではなからうか。

元豊八年正月四日に書く。

((1)「南船北馬^{なんせんほくば}」の語があるように、南中国では水運が、北中国では陸運が主である。

中国を南北に分ける淮河から北側に入り始めるとすぐに、蘇軾^{わい}は驢馬の列の音を耳にし、心地よいものを覚え、久しぶりに北側の地に入る実感を得た。(2)ここに引かれていた韓愈の詩は、地方官として外に出ていた時期に、都に召喚されるとの知らせを受け、

いままでは厭わしく思えた蠍も嬉しく眺められると詠んだもの。蘇軾の心情は韓愈のように単純ではない。(3)「江湖」は字義通りに江や湖を指すだけではなく、都(都会)に対する田舎(自然)をも意味する。今後頻出するので「江湖」のまま用いる)

■留題蘭皋亭

れいへきちん らんこうてい 靈壁鎮の蘭皋亭でこの詩を詠んだ。蘭皋亭は張碩が所有する庭園にある建物。その庭園を蘇軾は6年前に訪れて「れいへきちょう し えんてい き靈壁張氏園亭記」を書いている(第5章343ページ)。

雪の後の風は、
 まだ春の陽気のものではない。
 夜になろうとするいま、
 門を叩くのは各地を移ろう旅人である。
 庭園に入ると、
 竹のもとに新たに生じる筍はまだ見えない。
 (しかし、この張氏ちやうには代々立派な子孫が生じている)
 ここまでは川の水が濁っていたけれども、
 ここでは清らかな水に置き換わっている。
 (しかし、昨今の政治情勢がそうであるかは知らない)
 蘭皋亭に往来するのは、贅沢な車馬に乗る者ではない。

(世間に羽振りのよい連中は必ずしもここでは歓迎されない)

今夜、ともに笑って語らうのは東の坡のこと。^{おか}

来年には、私もここに倣って隠棲する場を整えようと思っている。

そこはひっそりとして、雀さえ訪れることはないのである。

(1) 終わりの部分は二つの故事を踏まえている。一つは「三径」。^{さんけい}昔の有名な隠者はその住まいに至る道を三本だけ開き、本当に心を許せる者にしか通らせなかった。それで「三径」といえば、そのような意味合いの隠棲の場を指すようになり、この詩では「明年、我も亦三径を開かん」と詠んでいる。「亦」とあるのは張氏の庭園もやはり「三径」であるからだ。もう一つは「雀羅」。^{じゃくら}隆盛を誇って、訪問客がひっきりなしにあった人も、ひとたび地位を失うと、誰一人来なくなって、門の前に雀を捕る網を張れるほどになるというのが「雀羅を張る」という成語。蘇軾はそれをひねって、あまりにもひっそりとして、網を張っても雀も捕れないとこの詩では詠んでいるのである。(2) 6年前に書いた「^{れいへいちょう しえんてい き}霊壁 張氏園亭記」に、^{しすい}「泗水のほとりに田を買って、そこで余生を送りたいと思う。そうなれば、南に霊壁を望み見て、鶏や犬の音が互いに聞こえ合う距離にあり、ふらりと歩いては張氏の園庭に往き来して、季節ごとにそこの子孫と遊べるであろう。必ずその日があるに違いない」とあった。ここに特別な思いを寄せていたのである。(3) ここを後にしてから、年末に詠んだ「^{ししゅうじょや}泗州除夜」の詩などを船中で書いた。その跋文に「^し酒を過ぎてこの^よ数篇の詩を作った。たまたまこの佳^よ紙と精^よ墨を得たのでこれを^{せいとくくん}写した。もって旌徳君(妻の王閏之のこと)に贈った。^{げんぽう}元豊八年正月十日、東坡居士^{とうば こじ}書す」と記した。黄州を発ってからの長旅をねぎらうためであったのだろう。蘇軾は家

族について記すことがまれなので、貴重な記録である)

■和人見贈

潤州(京口)から送られてきた詩を船中で受け取り、それに和した。詩題にある「人」が誰であるのかはわからない。

私の詩は、東の坡のありようを写しただけで、

自分の名を顕そうとしたものではない。

この身は宿場の駅舎――

入れ替わり立ち代わり来ては去り行くのである。

川には春の水が増えきているが、

私に壮な心が起こることはもはやなく、

髪は衰えて病葉のように落ちるに任せている。

貴公のところでは「雪児」(美しい歌妓の名の例)が筆や硯を用意してくれているだろうけれど、

私のところでは「竈婦」(炊けた妻をいう)が盆や瓶を洗っている。

きっと迷惑であろうけれど、

いずれ京口に戻ったときには、貴公に酒を求めるつもりでいるので、

そちらではきっと「おねたり経」が流行るだろう。

(この詩の眼目は、常州での居住が許されたなら再び京口を通るので、酒の無心をす

るというのである。最後の「おねだり経」の原文は「^{さ かいくきょう}作客経」で、その意味を訳者は承知していない。おおねねこのような意味であろうかという当てずっぽうの訳である。今後、同様の訳し方を「ずっぽ訳」と略称する)

■南郷子

この詞には「^{しゆくしゆうじょうげん}宿州上元」の副題がある。つまり1月15日に宿州に至つての作である。

千騎試春遊。(春の遊びに出したのは千騎)

小雨如酥落便收。^{ヨーグルト}(酥のように白く煙っていた小雨がちょうどおさまります)

能使江東歸老客、^{こうとう じょう}(江東(常州)に帰ろうとしている老いた旅人は)

遲留。(ここにぐずぐずと引き留められています)

白酒無声滑瀉油。(白い酒が音もなく油ように滑らかに注がれるのです)

飛火乱星球。(火が飛び、星が乱れます)

浅黛横波翠欲流。^{まゆずみ みどり}(薄く黛を施した女性が翠の波のように流れて行きます)

不似白雲郷外冷、^{はくうんきょう}(神仙が住まう「白雲郷」の冷やかさには似ずに)

溫柔。(ここは温かく柔らかです)

此去淮南第一州。^{わいなん}(こここそは淮南第一の都会なのです)

(前半は、上元節の郊外の昼間に賑わいを、後半は、灯火を飾り付けた夜の街の賑わい

ろ歌っている)

■跋翰林錢公詩後

しゆくしゆう なんけいおうてん ふ

宿州から南京応天府を目指して北に進む途中で記した短文。

私は齒が生え換わるころに町の寺子屋に入り、すぐに^{せんえきこう}錢易公の詩を朗誦した。ここに幸いにも錢易公の遺墨を見ることができた。

げんほう

元豊八年正月二十日。

せんえき

ごだいじっく

こう

ごえつ

そう

(錢易は、五代十国時代に杭州を都とした呉越国の四代目の王の子。呉越国が宋朝に帰順した後は、錢易は学問をもって仕えた。その錢易の詩が、蘇軾が入学した寺子屋で教材として使われていたのである。誰かが蘇軾に錢易の書を見せに来て一文を求めたのだろう。このようなメモ書き程度のものでも蘇軾の書は珍重された)

■寄蕲簞与蒲伝正

なんけいおうてん ふ

これも南京応天府に至る途中での作であろう。蘇軾が本来行くべきとさ

じょ

れたのは汝州で、その汝州で前年の11月まで知事を務めていたのが蒲伝

ほでん

正(字は宗孟)であった。蒲伝正は奢侈を好み、違法の行為があった疑

せい

あざな

そうもう

いで亳州知事に左遷され、このときは移動の旅にあった。黄州からもしも

はく

こう

真直ぐに汝州に向かっていたなら、親しく付き合うことになっていたで

あろう蒲伝正に、蕲州産の竹で編んだ^き簞^{たけむしろ}にこの詩を添えて贈った。蕲

州は黃州の東隣りである。

^き蕲^{らんけい}州の蘭溪の竹は美しい。

^{ぎよく}玉の箬のように、霜を帯びた幹が並び立ち、

千の谷に万の竹が連なり、自然とそこから風が生じる。

蘭溪の竹からは笛を作ることができないので ^{たけむし}簫を編む。

それを手にすると、

まだ開く前から、風が吹き出して来て、ぞくっとさせられる。

貴公の家は軒を連ねた豪邸で、

内に美女を^{とさ}鎖し、

^{たま}珠の^{すだれ}簾に花の影が静かに移ろい、

^{とばり}帳に^{こう}香の煙が漂い、

貴公は銀の^{ベッド}牀で目覚めると、

象牙で作られた碁石を打つよりすることがない。

東の^{おか}坡の病気の老人は、

長い旅に出て、凍えて臥し、饑えて吟じ、

まるで餌のない痩せ鼠のようだ。

春の風に破れた^{ふすま}衾を洗ってみたところ、

あいにくと雪の降る夜になってしまい、あわてて^{わた}ぼろ絮を被った。

舟からの子供たちの嘆きの声をもれる始末だ。

青いかすかな燈^{ともしび}のもとで呻吟するこの姿を、

果たして誰が知るのだろう。

天はいつになったら暖かな天候をもたらしてくれるのか、

そればかりを望んでいる身を恥じらいつつ、

この八尺の黄色い簾^{たけなほ}を貴公に献じる。

たかどの
高殿を掃き清めてこれを敷き、その上に臥し、

ここから吹き出す風にさざ波が立つ音を聞いていただきたい。

貴公の両脇から清浄な風が生じて(それによって奢侈の習性が改まるならば)、

その風に乗って貴公は朝廷に戻るであろう。

■与欧育等六人飲酒

旅のどこかで、杭州^{こう}の任地へと向かい、つつある欧育^{おういく}と出逢い、6人で飲んだという詩。

たちまち驚くのは、

春の風物の半分が早くも空しくなってしまったこと。

ここに置かれている紅い花を見ていられるのもあとわずかだ。

貴君は、白い扇を使いつつ詩を詠もうと苦戦している。

私は旅に倦み、酒樽の黄色い封を切ることばかりを思っている。

ここ何年かで、私は髪も齒もすっかり老いてしまった。

貴君はここを去って、^{わい が ちようこう}淮河も長江も渡り、

さらに東へ東へと行かなければならない。

さあ、覚えておこうではないか、

ここに六人が集まって、

杯を引き、剣を看て、風が吹き立ったことを。

（「春の半分が空しくなった」と歌っていることから2月の詩であることがわかる。「剣を看て」と最後にあるのは、欧育が立派な剣を蘇軾に見せたからで、その剣と戦袍（陣羽織）^{せんぽう}を詠んだ別の詩がある）

■満庭芳

蘇軾は2月の初めごろに南京応天府^{なんけいおうてん ふ}に着き、この詞を詠んだ。短い序文がある。

私は黄州に謫居すること五年、汝州に赴くことになり、「満庭芳」の詞を作って黄州の人々を別れた。南京応天府に至ると、皇帝の御恩を蒙り、陽羨に放ち帰されることになり、また「満庭芳」の一篇を作った。

（黄州を発つときに作った「満庭芳」の詞は第6章487ページで見ている。この序文によって、南京応天府に着いた時点で、先に朝廷に提出した願いが容れられたことが知れる。この詞は黄州での作と同じ韻を用いている）

歸去来兮、かえりなんいざ(歸去来兮)

清谿無底、(どこに帰るのか——底がないほどに清らかな谷へ)

上有千仞嵯峨。せんじん(上には千仞の山が聳え立っています)

昼樓東畔、(昼は東の川べりの樓閣にあって)

天遠夕陽多。(空の彼方を見るうちに、とっぴりと暮れて行きます)

老去君恩未報、(もはや老いて、お上の御恩には報いられぬまま)

空回首、こうつへ(空しく首を回らし)

彈鋏悲歌。はさみ(使われない鋏の悲しみを歌うのです)

舡頭転、(船の頭の向きを変えて)

長風万里、(風に乗って一万里)

歸馬駐平坡。おか と(さらに帰り行く馬を、平らな坡に駐めるのです)

無何。ユートピア(無何は)

何処有、(どこにあるのでしょうか)

銀潢尽处。あま がわ(天の川の尽きるところ)

天女停梭。はた お と(天女の機織り機の停まるところでしょうか)

問何事人間、(人間世界には何があるのでしょうか)

久戲風波。(しばらく天の風や波と戯れていましょう)

顧謂同来稚子、((仙界に迷い込んで)子供らが遊んでいるのを見ているうちに)

応爛汝、(斧の柄が腐ってしまったように)

腰下長柯。(空しい時を過ごしてしまうのです)

青衫破、(青い^{うわさ}衫はぼろぼろになり)

群仙笑我、(もろもろの仙人に笑われ)

千縷挂煙蓑。(漁師の蓑を身にひっかけて、霧の中へと舟を進めるのです)

(後半は、空想をたくましくして、常州^{じょう}に住むことを天の川で遊ぶことになぞらえて歌っている。途中で、「斧の柄が腐ってしまう」と言っているのは、仙界に迷い込んだ^{きこり}樵が斧の柄に顎を載せて、2人の仙人が碁を打つのを眺めているうちに、斧の柄が腐ってしまうほどの時間がたちまち流れてしまったという説話に基づいている)

■書楞伽経後

南京^{なんけい}応天府^{おうてん}で大恩人の張方平^{ちやうほうへい}に会った。張方平とはかつて徐州^{じょ}から湖州^こに赴任する途中で会っていて(第5章 343 ページ)、6年ぶりであった。蘇軾が獄中に拘留されていた間は、蘇軾の家族は蘇轍とともに張方平のもとに身を寄せていた。父の蘇洵^{そ じゆん}が都の人知られるきっかけを作ってくれたのは張方平であったから、張方平には言い尽くすことのできないほどの恩義があった。張方平は蘇軾の到着を待って、一つの頼み事をした。その事情を7カ月後に記したのがこの文章である。前半の3分の2ほどは「楞伽阿跋多羅宝經^{りやうが あばつた らほうきやう}」という仏典の解説であるので省略する。

(前略)

私は張公(張方平)の門下^{もんか}に遊ぶこと三十年、今年(元豊八年)二月、南京^{なんぎん}応天府^{おうてんふ}を過^より、公の私邸^{しだい}でお目にかかった。公は七十九歳、もはや現世の幻に惑わされることがなく、仏陀のまろやかな光に包まれている。私は憂患の内に老い、冷え切った灰のような思いを多々抱いていた。公はそんな私は教^{しやう}え導^{きやう}こうと、「楞伽經」を授けてくれた。

公は三十万銭を出資して、「楞伽經」を書写^{しやうかい}して配^{ちやうこう}り、江淮^{わいが}(長江、淮河の下流域)のあたりに広めようと考えられた。すると金山寺^{きんざん}の長老^{ぶつじん}である仏印大師^{りやうげん}了元^{りやうげん}が「書写して配っても数に限りがあります。版に刻めば無限に増やすことができます」と言われたので、私が版の元になるものを書くことになった。

私が書き終わると、仏印大師は弟子の曉機^{ぎやうき}を錢塘^{せんとう}(杭州)に走らせ、よい職人を求めて板に刻んだ。そしてその版は金山寺で保管することとなった。

(仏印大師は本章 66 ページで登場している。ここで興味深いのは、仏印大師が印刷を勧めたことである。世界史でいう「宋の三大発明」とは火薬、羅針盤、印刷で、まさに印刷術の発展の流れに乗って、仏印大師は仏典の木版印刷を張方平に勧めたのである。さらに興味深いのは、杭州で版を刻んだことだ。都でも印刷術は発展しつつあっただろうが、杭州の方が何かにつけて文化の先進地だったのだ)

■記夢

張方平が見た夢から生まれた詩。序文がある。

らくぜん

楽全先生(張方平)が見た夢で、ある人が三篇の詩を示した。どの字も流れるように書いてあり、読むことができなかった。傍らに道衣を着た古めかしい容貌の人がいて、その中の一篇を読み上げた。「人事且常在、留質悟円間」(人事且常に在り、^{かつ}質を留めて円間を悟る)。もとは四句あったのだが、他の二句は忘れてしまった。その夢の話私に告げたので、私なりに一篇の詩にしてみた。

えん

円の中に物がある、

物は本来、^{くう}空である、

ならば、円の中は空であるのか。

井戸の中に空間がある、

円をその中に入れる、

ならば、空の中に空が入るのか。

天は円の形をしているとか、

自らの眼力をもってそれを窮めることができるのだろうか。

円の内に円がある連環を、人知で解きほくことができるのだろうか。

天地の全体が共鳴するような風は吹くのか。

頭を下げて、種々の疑問を楽全先生に問うと、

先生は大きく笑って言う。

「真理に通じるのを妨げる者は誰もない」

(張方平は仏教に深く傾倒し、蘇軾も仏典に詳しい。この詩は仏典にある特殊な用語を多用し、訳者には全く理解できない、よってはなはだしい「ずっぽ訳」である。結語は、ごちゃごちゃ理屈で議論するより、人それぞれに悟るところがあるという意味だとするのはおおむね正しいであろう)

■西江月

この詞には「姑熟(当塗)で再び勝之に会った。前の韻を用いてまた『西江月』の詞を作った」との注記がある。当塗は金陵の西側の長江沿いの町で、蘇軾は前年の7月に通過している。そこでこの詞を詠んだと言っているのだが、『揮塵後録』(王明清著)は次のようなエピソードを伝える。

徐大受の後房には甚だ麗しい女性が大勢いた。蘇軾はかつて徐大受の家でその女性た

ちが演奏する音楽を聴いて詞を詠んだ。最も寵愛されていたのが勝之であった。

蘇軾は黄州から北に向かう旅の途中で南京応天府を通り、張方平に会ったところ、勝之はその息子の子厚の情けを受ける身となっていた。蘇軾はそれを見て思わず顔を覆って慟哭した。勝之はかたわらの女中たちを顧みて大笑いした。

蘇軾はそれからいつもこのことを語り、妾を貯えることの戒めとした。

先の黄州知事の徐大受(字は君猷)のもとに大勢の歌妓がいたことは第6章340ページで見ている。その中の勝之という女性に蘇軾は「西江月」の詞を贈っていた(訳出はしなかった)。その勝之が張方平の息子の妾になっているのを見て同じ「西江月」の詞を詠んだと『揮塵後録』は記して

いるのである。ここではそれに従ってその詞を訳すことにする。しかしながら、王明清は前に記したように眉唾物を好んで記録する人物であるから（本章 125 ページ）、この話はあまり信用できないだろう。

別夢已隨流水、(別れの夢はすでに水とともに流れ去ってしまったのでしょうか)

淚巾猶裊香泉。(涙に濡れた ^{ハンカチ}巾にはなお香りが残っているではありませんか)

相如依旧是臞仙。(昔のある人は真の美は仙界にあると説きましたが)

人在瑤台閬苑。(人はやはり華やかな場所に留まるものなののでしょうか)

花霧縈風縹緲、(やわやわと風に送られて霧が花にまわりつき)

歌珠滴水清円。(歌声は珠^{たま}となって水に滴り落ちて清らかな円を描きます)

蛾眉新作十分妍、(美しく引き直した眉は非常に美しいけれど)

走馬歸來便面。(走り去った馬が戻ってくると顔を隠さずにはいられないのです)

(この詞の各句が何を意味するのか訳者には十分に掴めていないので、またしても「ずっぱ訳」である。全体としては、徐大受が亡くなったときに流した涙がまだ乾かないうちに、また美しく化粧して宴席に出ていることをたしなめるような内容であるのだろう。そこから王明清が伝えるような話が生まれたのだろう。しかし、潤州で ^{じゅん}2 人の官妓の解放に力を貸した蘇軾であるから、前のパトロンが亡くなってすぐによその土地に流れて行かなければならない女性の境遇に同情を寄せることはあっても、妾を持つなどの戒めとしたとは考えにくい)

■和王勝之三首

詩題に「勝之^{しょうし}」とあるから、上に見た同じ歌妓かと早合点してはいけない。こちらの「勝之^{しょうし}」は王益柔^{おうえきじゆう あざな}の字である。王益柔^{きんりょう}が金陵の知事から南京^{なん}応天府の知事に移ったことは本章 59 ページで見ている。南京^{けいおうてん ふ}応天府の知事となった王益柔と再会し、その詩に和した。3 首のうち 2 首を訳す。

其の一

城^{まち}の楼閣から湖を見ると、
 暖かな光に波が立とうとしている。
 湖上の船から、
 美しい女性が私に向かって、
 「春の遊びに出ませんこと」
 と歌いかける。
 知事殿の客人はみな詩と酒をよくするのだが、
 その中で神仙の域に達するのは誰であろうか。

其の三

知事殿は独り旅する者を憐れみ、
 知事殿のすばらしい詩に、

「鈍臭く和しても構わぬぞ」

と、その者に言うのだが、

その者は、酒樽の前で座ったまま眠ってしまい、

呼んでも応えない。

ようやく寝ぼけまなこで言うには、

「工夫を凝らしてはかえって天の和を損ないますので(眠っておりました)」

(宴席での戯れの詩である)

■跋李伯時孝經図

なんけいおうてん ふ り こうりん あざな はく じ
南京応天府に滞在する間に李公麟(字は伯時)の画を見てこの跋文を記した。李公麟は北宋を代表する画家の1人で、生年は蘇軾より13年あとで、没年は蘇軾の5年後であるから、ほぼ同じ時代の人である。蘇軾が都でさかんに改革を批判していたころに科挙に合格し、官員としても活動したが、後世にはもっぱら画業をもって伝えられる。このとき見たのは儒学の經典の一つである『孝経』から題材を採った画。

この図を観る者は、まさに『礼記』にあるところの「易直子諒の心、油然として生じる」(和やかな誠の心がふつふつと沸き立つ)となるであろう。筆跡の妙は顧愷之、陸探微に劣るものではない。『孝経』第十八章(親を喪った子の悲しみをテーマとする)の図は、人の子として忍びざるありさまを、見事にありありと描いている。道を得た君子でなけ

ればこのように描けるものではなく、顧愷之、陸探微といえども及ぶものではない。

(この文章だけからすると、經典のプロパガンダ画のように思えてしまうが、李公麟の画が高い精神性を有していることを評価したものなのだろう。後に、蘇軾は李公麟と深い交友関係を結ぶことになる。なお顧愷之と陸探微は高校世界史の教科書にもその名が載るような中国を代表する画家である)

■寄怪石石斛与魯元翰

魯有開(字は元翰)に怪石(奇怪な形状の石)と石斛(自然石で作った鉢)を贈り、それに添えた詩。魯有開は杭州副知事時代に交流があった人(第3章145ページなど)。「怪石」は黃州の赤壁で拾ったもの(第6章290ページなど)であるが、「石斛」はどこで入手したのかは不明。魯有開はこれまで都にいたのだが、何かの落ち度があつて左遷となり、それを慰めるために蘇軾はこれらを贈ったのである。

斛は山の骨が四角に裁たれたもの、

珍しい石は長江の浅瀬で拾ったものだ。

清らかな池を湛える斛は机の上に置くのがよく、

月を砕いたような石は盤の上に置くのがよいだろう。

私は老いて白樂天のいう「三友」(酒、琴、詩)を懐うのだが、

日常的には一碗の飯にも困っている。

ます

斛の堅い姿はいささか自らの戒めとし、

怪石の秀れた色を腹の足しとしてきた。

ます

さあ斛と怪石よ、行くがよい、髯ひげの美しい卿きみ(魯有聞)のところへ、

どうがん

道眼(真理を見抜(慧眼)をもって看てもらえるであろう。

この怪石は東坡居士のもとに残った最後のもの、

霜や雪のような輝きが人を寒く照らすであろう。

(「寒く」とあるのは、温度のことをいうのではなく、精神性の高さをいう)

■贈眼医王生彦若

なんけいおうてん ふ

南京応天府の眼科医、王彦若に贈った詩。蘇軾自身の注記によると、王

彦若は張方平ちやうほうへいの門人である。

はり

鍼の頭は麦の芒のように小さく細いものだが、

その先端からは車軸のような勢いでき気が流出する。

体の中は絡らくや脈みゃくやらが複雑にからみ合って、

生命は毛筋のごとく、あるいは粟粒のごとく、ごく微小なものに依拠している。

とりわけ眼は清浄なもので、内部しよくに天の燭が収められている。

それは琉璃の中に貯えられている露のように弱もろく脆いもので、

触れることさえ危うい。

おう

ところが、王先生は眼の中で鍼を用い、

ほこ やじり

鋒や鋸を縦横に振り回すかのようにして、

しかも、全く普段通りに談笑しながら行うので、

観る者は驚きのあまり首を縮めてしまう。

おの

さ

かげ

斤を動かして家を拆くようにして眼から翳を取り除く。

常に疑われているのは、

王先生は幻を見せているのであって、

実は鍼のほかにはまじないを用いているのではないかと。

先生は言う、

「私のしていることは道に敵っています。

ことわり

貴君はその理がまだわかっておられないのでしょう。

人の身体はひとかたまりの塵や垢のようなもの、

身分に貴賤の上下があっても、どの人も草木と変わりがありません。

世間の人は外見を重んじ、やたらと瓦と玉ぎよくの違いを見ています。

私も初めはわかっていなかったので、

眼を刺すのは肉を刺すのと同じであるように思っていました。

かげ

病んだ眼を見ると翳があり、翳は眼ではありません。

眼と翳が別々の物であるのなら、

それを分けるのは麦と豆のように簡単なのです。

農夫に聞いてみればわかるように、

雑草を取り去って穀物が損なわれるということはありません。

鼻の頭にだって広い空き地があり、

肝と膽も^そ楚国と^{しよく}蜀国ほどに離れています。

私は、人の体の中に^{どうとう}蕩蕩とした空間を見ているので、

鍼を使うのは、九台の車を並べられるだけの幅がある道を走るようなもの、

二台の車が疾駆してもぶつかり合うことはないのです。

眼中に花が散るような翳は誰が取り除こうとも、

三日月が自然と満月になるように、眼は明るくなるのです。

さらに尋ねたいことがあるのなら、

いまは言葉を忘れた境地にある^{らくぜんどう}楽全堂先生(^{ちほうほうへい}張方平)にお聞きください」

(蘇^{こう}軾が黄州で赤眼を患ったことは第 6 章 354 ページで見ているが、ここで王彦若の診察を受けたかどうかはわからない)

■春日

^{なんけいおうてん ふ}南京応天府でのある穏やかな午後の詩。

夫婦呼び合う鳩も、雛を育てる燕も、

いまは声なく静まりかえっている。

西の窓から、日が目にまぶしく射し込んで来る。

昼の酔いから醒めはしたけれど、

何もすることがない。

ならば、春の眠りをもって、
春のこの晴天を賞玩するでしょう。

■李憲仲哀詞

同じ年に科挙に合格した友人の子のために作った詩。序文がある。

同年^{どうねん}の友である李惇^{り じゅん}、字は憲仲^{あざな けんちゅう}、は賢にして才能があった。不幸にして早世したために、私には親しくさせていただく間がなかった。その子^{り せん}の李薦^{り せん}が、この年^{ようてき}、陽翟^{やうてき}から出て来て南京で私と会った。

李薦は泣きながら言った。

「私の祖母^{へん}の辺氏^{へん}、母^ばの馬氏^ば、前の母^{ちよう}の張氏^{ちよう}、そして父までも、いまだに葬礼が終わっていません。貧乏であっても、飢えや寒さなら憂いはしません。四人の葬礼が終わらないうちは、私は死んでも死に切れないのです」

このときまたま知り合いの梁先吉^{りやうせんきち}が、私が陽羨^{やうせん}に帰農すると聞いて、絹十匹、絹糸百両を贖^{はなむけ}として贈ってくれ、辞退しても許してくれなかった。そこで、それらを李薦に贈ることにした。

「これは仁^{まごころ}のある人から饋^{おくりもの}です」

と、私は李薦に言った。

さらに詩を作って、李惇や李薦を知る者に見せることにする。李薦を助けてくれることを願ってのことだ。

李薦は二十五歳、その文章は矍然き^{かがや}気節のあることは並大抵でない。決して窮したままで終わる者ではない。

人の一生は大きな夢のようなもの、

ゆくゆくは覚める……

百年の期限を満たすことはなかなかない。

私ははなはだ悲しむ、

貴君^{りじゅん}（李惇）がその半ばに至らずしてすでに^ゆ逝き、

さびれた建物の内で長い眠りにつき、

いまなお葬られずにいるのを。

^{おも}念うに貴君と私は同年、

友愛^{こうご}の意は長くあろうとしたのだけれど、

貴君に許された歳月は短いものであった。

名馬でありながら塩を運搬する労苦に苦しみ、

貧困のために先祖を祀るための道具も失ってしまった。

貴君の子は奇骨があり、語りっぷりはすでに精悍である。

野生の鶴さながらの姿で、将来はきっと古^{いにしえ}の名臣を凌ぐであろう。

生きるものは大塊^{たいかい}（肉体）に生命を寄せ、

死んだ者はみな土の穴の中に入る。

ああ、貴君だけはいまだに現世に留まり、地下の暖かさを知らずにいる。

私は孝子を助けようと衣を差し出す、
 それとて、日照りの大地に一杯の水を注ぐようなもの。
 さらに支援してくれる者はいないのか。

昔の人も大事なことはゆるがせにはならないと言っているではないか。

（旧中国の人々にとって最も大きな願いは科挙に合格して官員になることだった。それでも、若くして死ねば妻子がたちまち困窮してしまうようなことも珍しくはなかった。蘇軾自身も経済的な余裕はなく、人からの支援（序文には具体的な数量が示されていて興味深い）を得ることでどうにか凌いでいたのだが、せっかくの頂きものを友人（といっても「同年」というだけで生前に特に交流があったわけではない）の子に与えたのだった）

■王伯敷所蔵趙昌画

なんけいおうてん ふ おうていろう あざな はくよう ちょうしょう
 南京応天府にある王廷老（字は伯敷）の家を訪問したところ、趙昌が描
 いた画があった。趙昌は蜀^{しよく}の人で、蘇軾より少し前に活躍し、花虫草木
 を描くことを得意とした。その画を見ての詩。4首のうち2首を訳す。

黄葵

あおい
 葵は弱々しくも夏の日中の永さに苦しみ、
 暁の涼しさによって、そのすてきな姿が蘇る。
 低く、あるいは高く、黄金の杯が揺れ、
 昇ったばかりの日の光を受けて照り輝く。

紅い花の芯に暈^{かさ}がかかり、

翠^{みどり}の葉の先に芒^{のぎ}が突き出る。

昔から葵を写生する人はいたけれど、

趙昌^{ちやうしょう}の絶妙な技には誰も及ばない。

朝^{よそお}に粧った姿も、昼に酔った姿も、

陰陽合わせもった真のありさまを描いている。

この花の枝を見るがよい、

宿った露の香りまでも感じ取れるではないか。

山茶

冬の強い風が吹くと、

山の松が寂しげに鳴り、黄色い葉が飛んで落ちる。

誰が憐れむのか、

氷雪の中で、少女のようなこの花が、火の如き明るさを発しているのを。

年の瀬の寒さの中の山茶花^{さざんか}の姿を写し得たのは、

昔からただ邱文播^{きゅうぶん は}がいただけだとされた。

趙昌はその妙所を得ただけでなく、

膠^{にかわ}の粉を使う技法も一掃してしまった。

掌^{てのひら}の中で丹砂^{たん さ}を調合し、鶴の頂の紅の色を染め出してみせたのだ。

墨^{こうなん}だけで花木を描いてみせた江南のかの名人だけが、

賞賛の対象となるのではないのだ。

（「墨だけで花木を描いてみせた」というのは徐熙^{じょき}のこと。五代十国時代の南唐国^{なんとう}の都^{きんりょう}の金陵で、官に仕えずに自由人として画を描いた。彩色の技法についても詠んでいるのは、蘇軾自身も画を描くからであろう）

■代張安道進功德疏文

3月5日、神宗皇帝^{しんそう}が死去し、息子の趙煦^{ちょうく}（哲宗^{てつそう}）が即位した。神宗はこのとき38歳。もしも50歳を過ぎるころまで生きていたならば、蘇軾の運命のみならず宋朝の行く末も、さらには中国の歴史も大きく変わっていたかも知れない。王安石と神宗皇帝が始めた改革は当初の目的をかなりの程度達成しつつあって、宋朝は再び隆盛に向い始めていた。そのまま息子の哲宗に改革が引き継がれていたならば、宋が北方の新興勢力によってもろくも瓦解するようなことにはならなかったであろう。神宗皇帝が亡くなったとき哲宗はまだ10歳で、自ら政治を見ることはできなかった。そのような場合によくあるのは、母もしくは祖母が摂政となって、宰相等による集団指導体制をとるということであるのだが、改革派は実権を握り続けることに失敗し、哲宗の祖母である高氏^{こう}（英宗^{えいそう}の皇后。以下、高太皇太后と表記^{こうたいこうたいごう}）が政権運営に意欲を燃やし、壮絶な卓袱台返しを行った。高太皇太后は神宗皇帝が改革を始めた当初からそれに懐疑的で、いまこそ国を正しい姿に戻さなければならないとの使命感に駆られ、改革派

によって朝廷から排除されていた人々を次々に都に呼び戻し、改革のために作られた諸制度のほぼ全てを廃止した。後に、哲宗の親政が始まると、再び卓袱台返しが行われて改革政治に戻ることにになり、宋朝の政治体制は極端から極端へと揺れ動いて混迷を深めてしまう。後の歴史家は、そうした混乱をもたらしたそもそもの原因は改革にあったとして、王安石は史上稀に見る大悪人のようにされてしまうのだが、素直に見れば、混乱をもたらしたのは無理やり改革をストップしたことにあるのであって、もしも引き続き改革が進行していたならば、王安石は大功臣として評価され、同様の改革がその後の王朝でも実施された可能性もあり、中国史はかなり違っていた可能性もなくはない。ただし、そうであれば蘇軾^{ようせん}は陽羨に隠棲したまま平穏な後半生を送り、その詩文が「愈^{いよ}いよ窮^{きゆう}すれば則^{すなわ}ち愈^{いよ}いよ工^{たく}みなり」となるチャンスを失って、我々がこれから読み進める楽しみは大幅に薄れてしまったであろう。

この文章は神宗皇帝の安樂往生を願う文章を張方平^{ちやうほうへい}に代わって書いたもの。意味は詮索せずにお経と同じように音読みで重々しく朗誦すればよいであろう。蘇軾にはいかなる種類の文章でもたちまち作り上げてしまう特殊能力があるので、張方平は代筆を頼んだのである。

ふ い せいしん じ か き こうおく い じやうかん ほんしよ か ち ほうめいごう じ えいたん ふ ちゆうすうせん かつしん
伏以聖神示化、棄黃屋以上賓、凡庶何知、抱鳴号而永嘆。不有崇薦、曷伸
こんせい こ い みやうたん し さん とうせつしやうじやう し きやう しょみん ほうりき ぎやうどうしん ちゆう きやう い しん そうこうてい
悃誠。故依妙湛之尊、特設清浄之供。庶民法力、仰導真游。恭惟神宗皇帝

へい か ふくがんえいちようぶつじょう えんじょうどう か ちよしん む きょく しやうやうぼんしゃく し かん ぼくせい け えん こ えつ
 陛下、伏願永徴仏乗、円成道果。儲神無極、逍遙梵釈之間、ト世逾延、跨越
しょうしゅう し せい し う がん し き へいちやうてん わ
 商周之盛。至于含識、併暢天和。

■神宗皇帝挽詩

しんそう おうきやう ちやうほうへい
 蘇軾は神宗皇帝の悼む詩を詠んで王鞏等^{おうきやう}に示した。王鞏は張方平^{ちやうほうへい}の婿で、
なんけいおうてん か
 このとき南京応天府にいた。この 3 首は皇帝の徳をひたすら讃えるもの
 で、我々にとっては重々しい虚飾の語句を並べただけの作品としか見え
 ないのだが、蘇軾は真剣に神宗皇帝の死を悼んでいる。かつて直接に神宗
 皇帝に会って話をした蘇軾は、真に優れた帝王であったのを知っていた
 のである。

其の一

ゆる
 陛下は文も武もとより天から縦されたお方で、
つつし
 欽み明らかであられること日々に新たであった。
 民を化育されることでは「聖」というにとどまらず、
 万物の妙所に通じられて、ただ一人「神」と称えるべきお方であった。
まつりごと さんのう
 政は古代の「三王」の上に超え、
りくきやう すい
 おっしゃる言葉はどれも「六経」の粹に適っていた。
かたち
 高く聳える徳はもはや象なきまでに優れ、
わたし はずか
 臣は詩に刻もうとしてもとてもできないのを愧しく思うのである。

（「三王」は古代の伝説的な3人の聖王。「六経」は儒学の最も重要な6種の經典。当時の人々が抱いていた皇帝への畏敬の念は、我々には理解不能としか言いようがない）

其の二

堯ぎょうに比すべき陛下の徳は名状し難く、
舜しゅんに比すべき陛下の功績はととも数え挙げられない。
陛下は小心翼翼として孝に努められ、
そのついでに外敵を平定された。
典禮しりょうは周代の旧例通りに用いられ、
官儀の盛んなことは漢代かんの最盛期と同様であった。
最高の徳は何もしていないように見え、
民は千年に及ぶ徳化の風を承けたのである。

（この第2首に歌うのは事実とはまるで一致しない（夏国かと戦争を起こして失敗し、従来の法規を大幅に改めた）。皮肉な「褒め殺し」と受け止めるのは100パーセント邪推である）

其の三

陛下は千年にわたって続く大宋の皇統を受け継がれたのだが、
皇位にあられたのはわずかに十八年であった。
臣わたしが周南しゅうなん（黄州をいう）に留滞する間に、

朝廷はついに淒涼としたありさまになってしまった。

病んだ馬は(用いられる機会を失って) 櫪かひいばこけに空しく嘶き、

枯れた葵あおいは霜をかぶって萎れてしまうしかない。

我が余生こうかい ふは江海に臥し、

夢で皇廟に至って泣くのである。

(蘇軾は「江湖」に余生を送ることを朝廷に願ったのだが、ここでは神宗皇帝の恩に報いる機会を永久に失って「江海」に臥す無念さを歌っている。皇帝の徳は完全であったけれど、その治世に何か問題があったとすれば、臣下の者が朝廷を淒涼とさせてしまった(それで蘇軾は活躍できなかった)からである)

■薦誠禅院五百羅漢記

南京なんけい応天府おうてん ふに滞在中に、鄆州うんにある薦誠禅院せんせいぜんいんの五百羅漢についてこの文章を書いた。事情は本文中に記されている。

熙寧きねい十年、私は徐州知事じょであったときにこのようなことを聞いた。

黄河こうがが澶淵せんえんで決壊し、巨野きょや(鉅野)に溢れ出し、鄆州うんの東平郡とうへいに水が灌がれそうになった。東平の吏民りみんは驚き恐れ、どうしたらよいのかわからなかった。僧の応言おうげんがある策を建言した。清冷口せいれいこうを鑿ち、黄河から溢れた水を北へと導き、古く廃れた河道に入れて北東へと流し、海に入れるというものであった。役人はその議論を聞いただけで放置していたのだが、応言が強く弁じ続け、また黄河の決壊した状況

がひどかったので、役人は無視できなくなり、ついにそれを実行した。水は言った通りに流れ、東平郡はそれで助かり、応言の功績は大きかった。衆人は応言に褒美を与えようとしたが、僧は笑って辞退した。

私はその僧を ^{すむれている}異 と考えた。

その二年後に私は ^こ湖州知事となり、移動の途中で ^{なんけいおうてん ふ}南京応天府に行ったところで、鄆州から応言が来ていた。応言は私に会うとこのように言った。

「愚僧は鄆州に生まれ、若くて僧となり、仏の教を説くことを仕事としてまいりました。銭明逸様のために ^{しょうじゃ}精舎(仏教寺院)を鄆州の東の ^{あ ほくしんきやうちん}阿北新橋鎮に創り、高さ百二十尺の鉄の仏像を十三体造りました。それが完成しますと、^{ちやうがい}趙概様が朝廷に願ひ出てその寺院に『^{せんせい}薦誠』の名を付けてくださいました。愚僧はその寺院を守り続けてまいりましたが、いまは ^{せんとう こう}五百羅漢像を造って船に載せて持ち帰るために ^{せんとう こう}錢塘(杭州)に行くところです。このためには五百万銭を要しますが、^{ぶんげんはく}文彦博様より下されました。皆様方は愚僧の施主にございます」

私はそれで応言はますます優れた人であるのを知った。

それから六年、私は ^{こう}黄州から ^{じょ}汝州に遷るにあたって ^{うつ}南京応天府に来たところ、ちょうどまた応言がいて、このように言った。

「五百羅漢像はすでに完成しました。どうか愚僧のためにそれを記念する文章を書いてください」

^{あ あ ひと こうみよう}嗚呼、士は功名を挙げることを貴いとする。事を論じるのは易く、事を為すのは難しい。事を為すのはまだしも易く、事を成就させるのは難しい。天下の士が誰もが応

言のようであれば、論じて必ず為し、為して必ず成就する。そうであれば、功名だらけとなって、いちいちそれを言うことはなくなるだろう。

(1) 蘇軾が徐州知事であったときに黄河が決壊し、大洪水に襲われたことは第5章215ページ以下で詳しく見ている。(2) ここに名前が挙げられている錢明逸、趙概、文彦博の3人はいずれも宋朝の重鎮である。(3) 興味深いのは、応言が五百羅漢像の制作を杭州で行ったことで、先に見たように仏典の版木を刻むのを杭州で行ったことと合わせて、やはり杭州が文化の先進地であったことがわかる。(4) 蘇軾が杭州で治水工事に関わったときに仏教界の力を借りたと記したが(第4章122ページ)、この文章からも僧が土木建築に深く関わっていたことが知れるであろう)

■書画壁易石

蘇軾は3月末ないし4月初めに南京^{なんけいおうてん}応天府を発って、常州^{じょう}に向かった。再び^{れいへきちん}霊壁鎮(本章136ページ)を過り、この文章を書いた。

^{れいへき}霊壁では、表面に変わった模様のある石が出る。

^{りゅう}劉氏の庭園の見晴らし台の下に、尖った独特の形状をした石があり、繰り返し眺めると、鹿が首をくねらせているありさまが見えてくる。

^{とうぼこじ}東坡居士はこれが欲しくなり、園内の^{りんかく}臨華閣の壁に、奇怪な石と風に吹かれる竹の画を描いたところ、主人は喜んでその石を与えてくれた。東坡居士はそれを舟に^{ようせん}載せて陽羨に帰るのである。

げん ほう

元豐八年四月六日。

（蘇軾は、若い頃には書画が欲しくてどうにもならないようなこともあったが、いつしか物に対する執着心がなくなったという趣旨のことをかかつて書いていた（本章 43 ページ）。しかし、ここでは石が欲しくたまらず、それを得るために壁に画を描いている。そこまでのしたのは、鹿の形が見えたからだろうか。蘇軾はしばしば自分の本性は鹿であると言っていて、常州の陽羨^{ようせん}ではその本性のままに生きてみたいと考えていたのだらう）

■漁父

「漁父^{ぎょ ぽ}」もしくは「漁翁^{ぎょうおう}」は人の本性のままに生きる象徴的存在だった（第 5 章 62 ページ）。窮屈な地上社会に縛り付けられている人間からすると、水の上で自由に生きている（ように見える）漁師は憧憬の対象となった。中国の四大奇書の一つである『水滸伝^{すい こ でん}』（書かれたのは明代だが、舞台は蘇軾の時代のすぐ後の北宋末^{ほうそう}）には、阮小二^{げんしょう じ}、阮小五^{げんしょう ご}、阮小七^{げんしょう しち}の漁師の三兄弟が登場し、胸のすくような活躍をし、梁山泊^{りょうざんぱく}のリーダーの宋江^{そうこう}が朝廷に帰順する決断をしたときに、阮小二はその方針に最後まで納得しなかった。この詩は阮小二と比べたらずっとおとなしいけれど、自由に振る舞う漁父を、3・3・6・7・6 の特殊なリズムで歌っている。

其の一

漁父飲、(漁父は飲む)

誰家去、(誰の家にゆくのか)

魚蟹一時分付。(魚と蟹をいっぺんにぶちまける)

酒無多少醉為期、(酒は多い少ないではない、酔うまで飲む)

彼此不論錢数。(どの獲物がいくらとか言ったりはしない)

其の二

漁父醉、(漁父は酔う)

蓑衣舞、(蓑をまとして舞う)

醉裏却尋歸路。(酔ったところで帰り路を尋ねる)

輕舟短棹任斜橫、(舟は輕く、棹^{さお}の動きに任せるだけ)

醒後不知何處。(醒めたときには、はてどこにいるのやら)

其の三

漁父醒、(漁父は醒める)

春江午、(春の川の昼とき)

夢斷落花飛絮。(夢は終わり、花が落ち柳絮^{りゅうじょ}が飛ぶ)

酒醒還醉醉還醒、(酒が醒めたらまた酔い、酔ったらまた醒める)

一笑人間今古。(一笑する間に、人間世界の今はすでに昔)

其の四

漁父笑、(漁父は笑う)

輕鷗拳、(鷗が輕やかに拳がる)

漠漠一江風雨。(川一面がぼんやりと雨に包まれる)

江辺騎馬是官人、(川べりをゆくのは馬の上の官人)

借我孤舟南渡。(わしの舟を借りて、南に渡りたいのだとさ)

(漁父に舟を借りて南に行こうとする官人は蘇軾自身であろう)

■寄吳德仁兼簡陳季常

なんけいおうてん ふ 南京よう 応天府から揚州に至る間に詠まれたとされる 3 首の詩を並べる。この詩の題には懐かしい名がある。ちん き じょう 陳季常 ほうさん し (方山子) だ。陳季常と別れたのは前年の 4 月 (第 6 章 499 ページ) だった。詩題は「ご えい あざな とくじん 吳瑛 (字は徳仁) に寄せ、兼ねて陳季常に書簡を送る」。蘇軾自身の注記で、「詩中に云う『きゅう こ じ 竜丘居士』は陳季常のこと、『ぼくようこう し 濮陽公子』は吳瑛のこと」とある。陳季常を「竜丘居士」と呼ぶことは第 6 章 498 ページなどで見ている。吳瑛は官を退いてき すい 蕲水県に隠棲し、かつて蘇軾はその近くを訪れたのだが (第 6 章 280 ページ)、吳瑛には会わなかったことをこの詩の後半で歌っている。この詩をこの時期に吳瑛と陳季常に送ったきっかけは不明である。

とう ば
東坡先生は貧乏で一銭もない。

しかも、わずか一銭の値打ちのものさえ作り出せない。

俗にいわれているのは、

黄河を塞ぐことができ、黄金を作り出せるのなら、不老不死の薬もできるだろうと。

東坡先生は、それを真に受け、

十年間、家でちょろちょろ鉛を焼いてみたのだが、

髪が白くなるのをどうすることもできなかった。

竜丘居士(方山子)も気の毒なことに、

空を談じたり有を説いたりして夜も眠らずにいる。

ところが、河東から訪れた客人(柳簿という人物であるらしい)が、

獅子が吼えるような声で説法したのに驚き、

杖を手から落とし、心は茫然となってしまった。

それに引き換え、

濮陽公子(呉瑛)の賢さには誰も及ばない。

酒は飲むし、肉も食らっているが、

我は仙道の極意を得たと言っているのだ。

物に宿る真理は会得するけれど、

己の心を物に留めることはなく、

家にも、家にあることを忘れる禪を学んでいる。

門前には稲が揺れる十頃(十ヘクタール)の田があり、

清らかな溪流が家を繞り、天に連なって花が開いている。

かつて、春風によって落花が雪のように降る下で、
濮陽公子は、呼んでも起きないまでに酔って眠っていた。
そのとき、私は近^{らんけい}くの蘭溪^{せいせん}に遊んで清泉寺を訪れ、
世間を離れる旅装束を纏う気になって、
こころあたりの山で老いるのもよからうかと考えもしたのだが、
たまたま興が尽きて船を返してしまった。
そのために、残念ながら、
私は濮陽公子に会えず、濮陽公子は私に会えなかった。
いつしか、洛陽^{らくよう}の道でたまたま三人が出会ったならば、
手を握り、笑い合っ^てこう言うのだ。
「あれから、ほんの三千年でし^ようかなあ」

(末尾の原文は「銅駝^{どうだ}陌^{はく}上^{じょう}会^{たい}相^あ見、握手一笑三千年」(銅駝陌上 会たま相い見るなら、
手を握^{いっしょう}って一笑^{らくよう}す 三千年)。「銅駝陌」は洛陽にあった街路の名で、「銀座通り」とい
うように最も繁華な街路の象徴的名称。「三千年」は概数で、仙人になれば三千年もほ
んの一瞬ということである。なおこの句は江戸時代初期の詩僧、元政の詩に「銅駝陌上^{げんせい}
坡翁句、一笑吟春感^{どうだはくじょうはおう}転多^{かんうた}」(銅駝陌上 坡翁の句、一笑 春を吟じて 感 転た多し)(銅
駝陌(=京都の二条通り)で再会して、蘇軾の詩句にあるように、一笑して春を吟じ
と、いろいろに感じるが多い)として引かれている。蘇軾のさほど有名でもないこ
の詩がさりげなく用いられるまでに、蘇軾の詩文は当時の文人の間で親しまれていた
のだらう)

■題王逸少帖

「書聖」とされた王羲之の墨蹟を集めた冊子に記した詩。

ふうてん ちやうぎやく おう ぎ し かい そ
 瘋癲の張旭、酔っぱらいの懷素法師、

二人の禿翁(たくおう)さんの筆を使ってちびらせた翁)は書工と称されたけれど、

世間の好みを追っただけのことで、

夢の中でも王羲之や鐘繇のような本物の書家を見たこともなく、

やたらと飾り立てて、眼の利かない連中を欺いたのだった。

言ってみれば色街の娼(あそびめ)が青やら紅やらを顔に塗りたくり、

妖しく歌ったり舞ったりして若者を眩惑させるようなものだ。

しょうぜん
 蕭然として自ずと林のもとに立つ風情がある――

そのように讃えられた南朝の謝家(しゃ)の婦人がいたけれど、

王羲之の書はまさしく気品があり、

草書となると、天の門より竜が躍り出る勢いがあり、

ピーチク轉る小鳥(張旭や懷素法師)どもは一掃されてしまうのだ。

私はその書法を継ぎたいと思うのだが、

早々にできることではないのでしばらく待ってもらいたい。

(1) この詩のオチは、王羲之の墨蹟を見せに來た人が蕪穢(うせ)に草書を所望したのを断つたということであろう。(2) 草書は無造作に書いているように見えて、実は最も難しい

ものであるというのが蘇軾の考え方であった。それを示すために、草書^{とう}を得意とした唐代の有名な書家の張旭と懷素法師をさんざんにコケおろしている。(3) 鐘繇^{しょうよう そうそう}は曹操に仕えた武将であったが、書家としても超一流で、王羲之以前の第一の書家とされる)

■書林逋詩後

林逋^{りん ぽ}の詩の後に書いた詩。林逋^{こう}は杭州の人で、蘇軾をより 70 年ほど早く生まれ、西湖^{せい こ}の孤山^{こ ざん}に隱棲して清らかな詩を詠んだ。

「呉^ごの人である儂^{おいら}は、

湖と山との間に生まれ、

湖の光を呼吸し、

山の緑を飲んで成長した。

わざわざ世間の外へと出て隠れ君子を気取るまでもなく、

ここでは、雇われ小僧も、行商のおばさんも、みんな氷玉^{ひょうぎょく}のように清らかなのだ」

このように言った先生こそは実に絶俗^{ぜつぞく}の人である。

精神は清く、骨の髄まで冷涼で、俗っぽさは一切ない。

私は会ったことがないけれど、夢でなら見たことがある。

瞳^{ともしみ}が明るくて燭のように光っていた。

遺された詩や字があちこちにあり、

西湖をいくら歩いて見て回ってももう十分ということはない。

詩は唐代の孟郊とう もうこうに似るとされるが、それほど寒々しくはなく、
 書は南北朝時代の李建中り けんちゅうに似るとされるが、それよりほっそりとしている。
 平生こうせつの高節は誰も継げるものではなく、
 終わりに臨んでこの句をつぶやいたという。

茂陵異日求遺草、(後になって、この地に書き残したものを探しにきても)

猶喜初無封禪書。(もとより「封禪ほうぜんの書」などはないのを喜ばしく思う)

おかしいのは、呉には物好きな人がいないことで、
 先生の住まいの跡し どうに祠堂を作ってその傍に青い竹を植えたりなどしないのだ。
 ならば、西湖すいせんおうの水仙王の廟に先生を合祀して、
 冷たい水の一杯、野菊の一本でも捧げたいものである。

((1) 林逋りん ぽの言葉として訳した中にある「傭兒販婦皆氷玉」(傭兒 販婦 皆氷 玉)よう じ はん ふ みなひょうぎよくの句を非常にすばらしいと思う。世俗の一般庶民に非常に高い価値を置いたのである。これは貴族および軍事中心の唐代以前の社会と、庶民および経済中心の宋代の社会との圧倒的な差異から生まれ出て言葉であるのだろう。(2) 後半に引かれている林逋の臨終の詩にはやや詳しい説明が必要であろう。漢の時代かんに司馬相如し ばしょうじょという人がいて、歴史上の著名人ではあるけれど蘇軾の評価がかなり低いことは本章44ページですで見えているが、ここでもやはりひどくけなされている。司馬相如は、茂陵もうりょうの家で死にそうになったときに、妻に「私が死んだ後で、もしも朝廷から使者が来たならば、かねて書いておいた皇帝ほうてんに『封禪』を勧める文章を出して示してくれ」と言った。「封禪」とは皇帝たいざんが泰山に登って地の神と天の神を祀る儀式で、それを行えるのは王朝の最盛期を現

出した最高の指導者に限るとされていた。皇帝に封禪の儀を勧めるのは、皇帝へのこの上ない賛辞、もしくは諂いである。司馬相如は、封禪の書を遺すことが皇帝への忠誠心の証になると考えたのである。林逋が生きていた時代に、実際に真宗皇帝が封禪の儀を行い、側近連中が諂いの珍レースを繰り広げ、およそ奇怪な封禪フィーバーを演出した（第4章 61 ページ）。林逋はそういうことには背を向け、西湖畔で静かな日々を送っていたのである。なお王鞏の祖父の王旦は名宰相として真宗皇帝の治世を支えたのが、死に際して、封禪フィーバーを止められなかったのは一生の痛恨事であったと述懐している（諂い連中が巧みに王旦の口を封じ、王旦も皇帝の意向を慮って強く抵抗しなかったのである）。(3) 原詩には林逋の詩の引用の次に「更肯悲吟白頭曲」（更に肯てせんや「白頭の曲」を悲吟するを）の句が置かれているが、わずらわしいので訳さなかった。司馬相如は晩年、若い女性を家に迎え入れようとしたので、妻の卓文君は悲しんで「白頭の曲」（白髪になるまで愛が続かなかったことを嘆く歌）を泣きながら歌ったという伝説がある。林逋は終生独身であったから、そのような不人情なことをするはずもなかったというのである。(4) 常州に向かう蘇軾が見習うのは、断じて司馬相如（郷里の蜀の先人）ではなく、林逋（呉の人）なのである。(5) この詩を書いた蘇軾の真蹟が現存している）

■代呂申公上初即位論治道

蘇軾は3月の終わらないし4月の初めに揚州に到着し、しばらく滞在した。その間に、呂公著（呂申公）に会い、政治について論じ合った。前回

(本章 96 ページ) と異なり、もはや世間を憚ることなく大いに語ることができた。そして、新たに即位したばかりの皇帝に向かって政治の最も肝要なところ説く二つの文章を、呂公著のために代筆した。2 番目の文章のごく一部だけを見ておこう。

(前略)

そのために、近年は水害や旱魃が頻発し、盗賊が横行し、民衆は土地を離れて流浪し、地方は不安な状況に陥っているにもかかわらず、人々は宰相の責任を問おうとせず、中央官庁の幹部は膨大な書類に一日中埋もれて力を尽し、書類の隅に字を書くだけで時間を費やしてしまっています。これは全て官僚を厳しく管理することにした弊害で、変えなければならないのであります。

(後略)

(改革を速やかに実行するために、改革派は官僚の成績を厳しく評価する仕組みを作った。蘇軾は、そのようなことをしたら、官僚は上の意向がどこにあるかを懸命に見定めて、それに沿うよう振る舞おうとし、さらには偽の結果報告さえするようになると、改革の当初から警告していた (第3章 55 ページ)。そして、実際に蝗の甚大な被害を隠して中央に伝えなかった悪例を見て、朝廷に報告している (第5章 11 ページ)。そうした官僚政治の弊害を直ちに改めなければならないと、呂公著と蘇軾は考えたのである。なお呂公著はこの文章を朝廷に提出した後すぐに朝廷に呼び戻された)

■雲師無著自金陵来見余広陵且遺余支遁鷹馬図将帰以詩送之且還其画

詩題は「雲師無著が金陵から来て広陵（揚州）で私と会い、支遁（晋の時代の高僧）が養うところの鷹と馬の図を贈ってくれた。雲師が帰るときにこの詩を渡し、その画は返した」。

雲師は將軍の家の三代目である。

「三世の将は必ず敗れる」との諺を嫌って家を棄て、

それから十年、今や壮年に至った。

容貌が秀でているのは、さすがに富貴の家の生まれであることを隠せず、

漆黒の瞳は、人間界を超えて天をも照らし出している。

去年、金陵の長干橋でお会いしたときには、

衆人の中から抜きん出て飛び立つ鳳の勢いがあったのだが、

今年、揚州の竹西寺に来られたのを見ると、

病によって痩せてもしたのか、

霜をかぶった松のようになっておられる。

朱を注いだような若々しい顔色は、

歳月に持って行かれ、

風の中の蒿の火、あるいは湯の中の雪のようにして消えてしまうのだろうか。

さあ、問われるがよろしかろう、

貴僧が帰依する黄面翁（釈迦）に、

いかにして明珠^{めいしゅ}のような知恵^{しやうめつ}をもって生滅^{ことわり}の理を照らすのかと。

そして、学ぶ必要はないだろう、

支遁^{しとん}やその友人の王羲之^{おうぎし}が、

鷹^{ひじ}を臂に乗せたり、馬を走らせたり、その神駿^{しんしゅん}を愛したようなことは。

だから、この画は貴僧にお返しする。

土をこねて作った牛に木で刻んだ人に乗せたのを見ても、

何かしら悟るには十分であるのだから。

■ 帰宜興留題竹西寺

蘇軾^{しよ}は1カ月ほど揚州で過ごした後、5月1日に常州宜興^{じやうぎこう}県に向けて出発した。その際に竹西寺^{ちくせい}に書き残した詩。竹西寺は有名な寺で、上の詩で見たように雲師無著^{うんしむちやく}に会ったのも同じく竹西寺だったし、前回の揚州滞在中にも訪れていた（本章96ページ以下）。

其の一

十年の間、

故郷に帰る夢を、西に向かう風に寄せていた。

ここを去って、真に田舎の翁になる。

竹西寺の井戸の新鮮な水を汲むとしよう、

それは郷里の川の水と同じ味がする、

だからそれを携えて常州に行きたいのだ。

其の二

寺の道人は紫蘇^{し そ ジュース}の水を勧めてくれ、

寺の童子は罌粟^{け し スープ}の湯を煮てくれる。

藤^{とう}を編んだ寝台と枕をしばらく借りるとしよう。

竹の間から吹き来る涼しい風に、

知らん顔をして行ってしまうわけにはいかないから。

(旧暦の 5 月は夏の盛り、紫蘇のジュースは清涼飲料として供せられたのだろう。罌粟^{け し}＝芥子はいまは栽培が禁止されているが、薬効があるとして用いられていた)

其の三

この身は、きっと、全て何事もないなかにあるのだろう。

しかも、今年は大豊作の年に当たりそうだ。

この寺に来てからは好い言葉ばかりを聞く。

野の花も啼く鳥も喜んでゐるではないか。

(第一句は「此身已覺都無事」(此の身 已^{すで}に覺ゆ 都^すべて事無^なしと)。蘇軾の心は軽い。皇帝が代替わりするとは予想もしていなかったけれど、常州に行けば、実り多い日々が確実に待っている。なぜなら黄州^{こう}の東の坡^{おか}ですでに経験済みだからである)

■到常州謝表

5月22日、蘇軾^{じょく}は常州^{じょう}に到着し、宜興^{ぎこう}県陽羨^{ようせん}に居住することを許してくれたことに感謝する文章を書いて朝廷に提出した。皇帝宛^{こうたいこうたい}てと高太皇太后^{こうたいこうたい}宛^{ごう}ての2種類があり、趣旨は同じであるので、二つを適宜合成して訳す。

臣^{わたくし}蘇軾^{じょく}が申し上げます。先に御恩^{ごおん}を蒙^{まう}って汝州^{じょしゅう}団練副使^{だんれんふし}本州^{ほんしゅう}安置^{あんち}を授かり、ついで表^{さげふみ}を提出^{ていしゅつ}して常州^{じょう}に居住することを乞いましたところ、聖旨^{せいし}を頂戴し、願^{ねが}うところをお許^{ゆる}しました。かくて臣^{わたくし}は今月二十二日に常州に到着し終わりました。

臣^{わたくし}の積もり積もった曇^{きず}は磨き難く、いまだ洗滌^{せんてき}されておられません。罪はあまりに大きく、臣^{わたくし}はあまりに微小で、永久に棄て去られ当然でありました。ここに陛下の御聖断^{ごせいだん}を奉じ、御恩を感じて涙を止めることができません。

伏^{おも}して念^{ねん}いますに、臣^{わたくし}は凡材^{みだ}でありながら猥^{わだ}りに早くから朝廷にお仕えし、聖政の御世に逢いながら、独り愚かさを改めることなく、臣^{わたくし}の犯しました罪は誅せられてしかるべきでありました。先帝陛下の至明によらなければ、今日生きながらえることはできなかったのであります。

廃棄されること六年、田野に我が身のあることも忘れて過^すごしておりましたが、万里の彼方より生命を保ったまま脱することができたのは、あるいは太皇太后陛下の厚い徳の賜り物でありましょうか。太皇太后陛下の至仁は天に代わって春に生命を育み秋に実りを成すもので、虫や魚に至るまでその真心を感じているのであり

ます。伏して皇帝陛下の仁孝聡明にお遇いし、縲囚より稍く出て、これよりは田を耕
 やし井戸を鑿^{うが}って農民とともに老い、門を閉ざしひたすら自省するものであります。
 先帝陛下の銜恩に報いることもできないままに身を沈め、残骸^{ちんがい}を魑魅^{ちみ}に寄せるば
 かりでありまして、いずれ首は碎かれ、肝は抉^{えぐ}られ、死ぬところはどこであるのか知
 れないのであります。

■与孟震同遊常州僧舍

上で見た 表^{ささげぶみ} は、まだ宜興^{ぎこう} 陽羨^{ようせん} に着く前に、常州^{じょう} の州庁のある町で書
 いたようだ。このころに偶然にも孟震^{もうしん}（字は亨之^{あざな きょうし}）と再会し、ある寺に
 遊んでこの詩を詠んだ。孟震はかつて黄州^{こう} の副知事をしていた人物であ
 る（第6章 115 ページ）。なお、次の詩も含めて、陽羨に行く前なのか、一
 度行ってからまた常州の町に戻ってきたのか、そのあたりの詳しい経緯
 はわからない。

其の一

このところますます思うのは、
 この生は浮いて流れるようなものだということ。
 かくて三呉^{さんご} の地で浪漫と遊んでいると、
 たちまち東平^{とうへい} の孟君子^{もう}と会い、
 夢の中で黄州^{こう} での日々を語り合うのである。

(「三呉」とは常州、蘇^そ州、湖^こ州あたりをいう。「東平」とは鄆^{うん}州のことで、孟震は鄆州の人である)

其の二

水を湛^{たに}えた清らかな谿は五月も寒く、
 小さな山ながらも、碧^{みどり}の岩が無数にそそり立っている。
 並び立つ杉は三千本、
 湧き立つ雲が山を抱え込んでいるかのようだ。

其の三

貴君はこれより去って帰耕するという。
 笑って指さすのは、
 一枚の葉よりも軽そうな一艘の舟。
 ならば神に霊雨を乞い、
 水かさが増した流れに乗り、
 貴君が行くのを見送るのである。
 (何らかの事情で孟震もまた官職を離れて帰郷する途中だったようだ)

■常州太平寺法華院薔^{せう}葛^{がい}亭^{てい}酔^い題^{だい}

常^{じょう}州^{ちゅう}の太^{たい}平^{へい}寺^じの法^{ほっ}華^け院^{えん}の薔^{せん}葛^{ぼく}亭^{てい}で酔^いって作^{さく}った詩^し。薔^{せん}葛^{ぼく}は仏典に出てく

る植物で、クチナシの一種であるという。

六弁の花が咲く^{せんぼく}薔^{せん}萄^{ぼく}の林、
九つの節のある^{しょうぶ}菖蒲が生える石、
そこにおられる禅僧と、
この^{とうばこじ}東坡居士と、
^{のぎつね}野狐どもが怖がるのはどちらであろうか。

東坡居士は^{てつしやじょう}鉄拄杖で、^{にせ}狐の偽の禅問答を一喝してしまうのだ。

((1)「狐の偽の禅問答」と訳したのは^{やこぜん}「野狐禅」。本来は、狐が有難い法話を聞いて人身に変じたことを「野狐禅」というのだが、ここでは、それから転じていかさまな問答を「野狐禅」といっているようだ。見せかけは高遠で、実はわけのわからないことを並べているだけの言説を蘇軾が嫌ったことは前に見ている（第6章218ページ）。その一方で、蘇軾は意味のよくわからない禅問答のような詩をしばしば作っているのだが、蘇軾に問えば、自身の詩は深い思索があつてのことだと言うのだろう。この詩と同じ時期に^{ほうおん}常州の報恩寺の長老に贈った詩があるが、訳者のみならず碩学の漢学者も意味不明と匙を投げている。(2) 鉄拄杖は禅僧が行脚修行のときに使う鉄の杖で、それを使って狐ども（まやかしの禅僧）を驚かせてやると蘇軾は息巻いてみせたのである。)

■墨花

^{ぎこう}宜興^{ようせん}県陽羨での新たな暮らしが始まった。^{こう}黄州に行ったときには、これか

らいかなることになるのか非常に不安であった（第6章486ページなど）のだが、今回は精神的にゆとりがあった。どこに行ってもすぐに豊かな人間関係を新たに築ける自信が蘇^し軾^{たい}にはすでに具わっていた。黄州では、士大夫^{しだいふ}仲間に限らず、社会の様々な階層の人々との交際範囲を広げてゆくありさまを見たが、陽羨でも同じようなことになった。この詩は、尹白^{いんはく}という墨で花を画くのを得意とする人に贈った詩。短い序文がある。

墨で山水、竹石、人物を画^{べん}く者は世に多いが、花を画^{いん}く者はいない。汴^{べん}の人の尹^{いん}白^{はく}はそれが上手にできる。それで一首の詩を賦した。

（先に墨だけで花木を描いた徐熙^{じょき}の名を挙げた（本章116ページ）が、そういう者はいなかったかのようにここで書いているのは、尹白の独自性を強調するためであろう）

造物者はもとは何も造らずにいた。

忽然と何かを造り出すや、

いかなるものもたやすく造ってしまうのだった。

尹白^{いんはく}の墨は、

ほんのり花の芯を画き出すや、

線の端々から春の気配が生じ、

形はまだ縹緲^{ぽんやり}としているのに、

扶疏^{ふきふさ}とした花木のありさまがすでに完全にそこに具わっている。

蓮の花は風を受けてことごとく傾き、

あんず
杏の花は雨に打たれて半分が碎かれ落ちる。

ここに、頭のおかしな東坡居士とう ぽ こ じがやってきて、

真っ黒な牡丹を画いてほしいと求めた。

その画と合わせて、

かん だい ちやう こう
漢代の張衡の作った『帰田賦』き でん ふを書いて、

せつ どう
「雪堂」に帰って掲げようと思うのである。

(1) この詩の終わりの部分は、いわゆる楽屋オチの類である。蘇軾こうが黄州の東の坡おかに雪堂せつ どうを建てたことは第 6 章 243 ページなどで見ている。雪堂には雪の画を飾って白づくめにした。この詩でいう「雪堂」は陽羨よう せんでの新たな住居を指すのだらう。そちらは、黒々と書いた文字と黒い牡丹で黒づくめにしようと洒落たのである。(2) 張衡の『帰田賦』は、文字通り故郷の農園に帰ることを歌った賦である。その中に「仲春令月、時和氣清」の句があり、令和の元号の出典とされる『万葉集』の当該の箇所と関係するのではないかと一時注目された)

■送竹几与謝秀才

しゃしゆうさい
謝秀才という人に、竹几ちく き（竹夫人、竹で編んだ抱き枕）たけ ふ じんを贈り、それに添えた詩。時期は6月の暑い盛りである。

日常の暮らしにやたらと立派な物があるのは、

人間の本性を乱すことになる。

老いてこの身一つになって田に帰って来た私が、

留め置くのは、

常に同行する一本の杖だけ。

貴君にこの竹夫人を贈ろう。

秋になると、扇とともに不要となる物だが、

また次の夏にはなくてはならない。

夫人の名はあっても、夜ごとに艶^{えん}を競う煩わしさはない。

笑ってしまうのは唐代^{とう}の蘆^ろ堂^{どう}で、

老いてのちに家において口をきく相手といったら蛙しかいないと、

珍妙な句を吐いたものだ。

何も語らない竹几こそが貴君にはふさわしかろう。

(この詩からすると、謝秀才は科挙をあきらめ、(もしかしたら独身のまま) 余生を静かに村里で送ろうとしていたのだろう)

■贈章黙

しょうもく
章黙という貧乏な僧に贈った詩。序文がある。

しょうもく こ じ あざな し めい
章黙居士の字は志明である。

こうこう
公侯の家(かつて官職に就くような者を出した家筋)に生まれ、才高く、爽やかな性格で

ある。家を棄てて道^{みち}(仏教)を求め、妻はなく、世間との煩わしい繋がりはない。しかし、父母と兄が亡くなり、貧乏のために葬儀を行うことができず、眷眷^{ひたすら}に世間にすがりつき、人に援助を求めないわけにはいかなかった。

私はその志を深く哀れみ、わずかにだけ助けたのだが、その言葉を取って詩を作り、その振る舞いに対して贈ることにした。この詩によって、章黙居士を哀れむ者があることを願う。

(本章 162 ページで見た詩に続いて、親の葬儀を営めずに苦しむ者を、蘇軾はここでも支援している。葬儀は一生の一大事であった。長年蘇軾に従ってきた馬正卿も貧乏のために両親をきちんと葬ることができずにいた。用意なく亡くなった場合には、仮の棺に亡骸を納めて一時的に寺などに預かってもらい、後に立派な棺や埋葬地を得てから正式な葬儀を行う。この序文にあるような「公侯の家」であるのなら、それにふさわしいだけのことはしたいし、手厚く葬ることが死後の世界で安らかに過ごすことと直結することからも、安直なことではできないので、葬儀にかなりの費用がかかってしまう。仮の棺のまま地上に置いていたのでは、死後の世界でいつまでも宙ぶらりんの状態で、子としてはとてつもなく不孝なのである)

章黙居士^{しょうもく}はいまだに親を葬れずにいる。

章黙居士その人は、生きながらえてはいるもののひどく病弱である。

朝には村里で悲しく吟じて嘔^{むせ}び泣き、

夜には涙で寢床を腐らせている。

悲しみの余り、先の年には眼を患い、今年は髪が真っ白になった。

身は歳月とともに老いに向かって逝き、

親を葬れずにいる恨みは天地が^{おわ}畢るまでも続く。

章黙居士が願っているのは、

どれほどの不毛の土地でもよいから田を得て、我が力で墓を築くこと。

章黙居士は言う――

「昔のある人は死ぬに際し、

『わしは「^{しん}真」に帰るのであるから裸のままで葬ってほしい』と言いました。

昔のある人は死ぬに際し、

『わしの屍は焼いて灰にし、大地を棺としてほしい』と言いました。

ああ、私はそのどちらも忍び難くてできません。

都には大金持ちが大勢いて、

一度の賭けに百万両を^{なげう}擲つことだってしています。

でも、私は知っているのです、

そうした人たちは、義のためとなるとこれっぽちだって出そうとしないのです。

ですから、貧乏のお仲間に頼むしかないのです。

一粒の粟の施してもよいのです、

積みばいつかは丘となり山となるでしょう。

この思いを朝に遂げられたなら、夕べに死んでも構いません。

私自身は誓って、『^{む しょう}無生の理』(仏教の真理)を求め、

『有^{ゆう}為^いの跡^{あと}』を踐^ふむ(眼前^{がんぜん}の物に惑^{まど}わされる)ことはありません。

我が身は山に棄^すて、鳥が狼籍^{ろうしやく}するの^のに任^{まか}せるまでです」

(仏教徒の間では火葬も行われたが、国の法はそれを禁じていた。遺骸を損なってしまうと、死後の世界では、損なわれた状態の体を使わなければならないと考えられていて、まして焼いて灰にしてしまったなら、死後の魂^{たま}は宿^{やど}るところを失ってしまうのである)

■次韻答賈耘老

以上の 3 篇の詩から、陽羨^{ようせん}で新たな人々と親しみ始めた蘇軾^{そし}の姿を窺^{うかが}い知ることができるのだが、残念ながらこれ以上に発展することなく、陽羨での日々はたちまち終わってしまった。蘇軾が常州に到着した頃にはすでに朝廷において、「本州安置不得簽書公事^{ほんしゅうあんちふとくせんしやうこうじ}」(居住の自由がなく、公務に携^{たづな}わることができない)の禁を解^とき、登州知事に任じるとの決定がなされていて、6 月の終わりにその知らせが蘇軾のもとに届いた。湖州知事の滕甫^{とうほ}(本章 66 ページなど)はそのことを知ると、祝いのメッセージを賈耘老^{かうんろう}(本章 85 ページ)に託し、賈耘老は急ぎ陽羨にやってきた。これは賈耘老が詠^よんだ詩に次韻^{しやくん}しもの。

五年の間、

黄州^{こうしゅう}で一つの夢のなかにあった――

我が身を襲^{おそ}った饑寒^{きかん}、疾病^{しつびやう}……

それを貴君は憂^{うれ}いてくれた。

私が東^{とう}(陽羨)に来たのは六月、

井戸には水がなく、

ほんぎゅうだい

奔牛台の古い堤防を見ると、

その名はあっても奔^{はし}る牛の姿はなく、日照りにぐったりしていた。

かねてから「管^{かん}鮑^{ぼう}の交わり」ともいうべき貴君と私であるからこそ、

この困窮のときに貴君は訪ね来てくれた。

貴君は、流れの滞った泥水を夜に渡ろうとして、

押し^ひたり挽^ひいたりしながらようやくここに着いたのだった。

貴君は言う、

「酒の飲みすぎで、中風を患ってしまいました。

それでも、故郷で安楽に過ごしているだけでなく、

溝に臥すような困窮に陥った人々を救いたいとの思いくらいはいまもあります。

老いと病のためにかつてのように楽しめずにいたのですが、

今年になって、「臥^が竜^{りゅう}」といわれた諸葛孔明^{しよかつこうめい}のような新たな知事(滕甫)が湖州
に來られまして、

その言葉は炎天^{ひょうてん}に雹^{ひょう}が降るような清々しさがあります。

そのお方が九尺の蒼い髯を垂らし、

なんと私のちっぽけな水辺の家を訪ねてくださり、

貴君のことを知らせてくれたのです」

私は言う。

「友人たちが、顔を改めて次々に祝いに来てくださいます。

しかし、子供のように驚かされた私は、

まだ疑って信じることができずにいます。

貴君のために酒を置きましょう。

飲んで歌おうではありませんか。

草の間にいる秋の虫だって歌うのですから。

憐れむべきは、

老いた馬は真に老いてしまったのです。

遠く地の果ての天山^{てんざん}にまで駆けて、天下に功名を挙げるような気持ちは、
さらさらないのです」

（この詩には、蘇軾の複雑な心情が未整理のままに詠まれているようだ。次韻という作詩法が、他人の作った詩の韻の位置に縛られて、ともすると求心力の働かない散漫な詩になりがちなうえに、登州知事の辞令をどう受け止めたらよいのか、蘇軾の心がまだ定まっていなかったために、このような詩になったのだろう。蘇軾はしばらく（あるいはずっと長く）田園生活を送るつもりで陽羨に來た。黄州の東の坡^{こう}での日々と同じく、豊かな精神生活を享受できることが確実に約束されていた。しかも、江南^{こうなん}の温和な風土を蘇軾はこよなく愛していた。州知事になるということは、完全な名誉回復であるのだが、復職すればその先には政争の場に再び立つであろうことが容易に予想できた。8歳のときに4人のスーパースターに憧れて以来の初心は、国のため民のために働くことであ

るのだから、登^{とう}州^{しゅう}に行く以外に進むべき道はないのは明らかであっても、田園生活を送り始めて直ちに中断させられたのは残念といえば残念なのだった。だから、辞令を信じなくなかったのである)

■次韻許遵

新たな任務^{とう}先の登^{とう}州^{しゅう}は山東半島^{さんとうはんとう}の北東部^{ほつとう}、渤海湾^{ぼつかい}に臨む北^{こうなん}の地で、江南とは気候、風土が大きく異なる。いつまた戻って来られるかわからないので、陽羨^{ようせん}で落ち着きを得てからしようと思っていた最小限のことを果たすべく、蘇軾^{そし}はあわただしく潤州^{じゆん}、真州^{しん}、金陵^{きんりやう}の各地を巡った。これはお潤州知事^{きよじゆん}の許遵^{きょしゆん}（本章 81 ページなど）が官職を去って金陵に帰る送別の宴での詩。

潤州^{じゆん}の蒜山^{さんざん}の下^{した}の渡し場^{わたりば}で、

この夕暮れに帰り行く船を見送る。

金陵^{きんりやう}の朱雀橋^{しゅじやくきやう}のたもとで、

旅姿の貴君が見られることになるだろう。

ここでの送別の宴に、長い帳^{とばり}を廻らし、

すでに大金を費やしてしまっただろうから、

新鮮な魚を振る舞おうと多くの料理人を煩わすようなことはしないでよい。

向こうに着いてからは、

禪を問うために長干寺に行ったり、
閑な時間に緑野堂で酒を飲んで過ごしたりすることだろう。
そうした味わいは、年若な連中に覚えさせるのはまだ早すぎる。
まして、北向きの窓辺で涼しい風に吹かれていると、
太古の人になったような楽しさがあるなどと、
行きずりの人に語ってはならないのだ。

(1) 詩の冒頭に蒜山さんざんの名が出ているが、そこを退隱の地にしようと一時期考えたことは本章 76 ページで見ている。(2) 詩の終わりの部分は、退隱の楽しさをうっかり若い連中に知らせてしまうと、真面目に働く者がいなくなってしまうということを恐れるのであって、そうした発想はこれまでも何度か見ている。「北向きの窓辺云々」は陶淵明えんめいの詩句を踏まえている。文明が発展する以前の遠い太古の時代には、人間が本来ある通りに生きていられたという思想がその背後にある。(3) 登州とうに行く前にすませておくべき最も大切なことは張方平ちやうほうへいに頼まれた『楞伽經』(本章 149 ページ)を書き写すことだった。潤州きんざんの金山寺にしばし籠りようげんって書き上げ、了元ぶついでん (仏印) に託した)

■溪陰堂

蘇軾ちやうこうは長江を遡きんりやうって金陵に向かった。あるいは許遵きよじゆんに同行したのかも知れない。途中の真州しんで溪陰堂けいいんどうに立ち寄ってこの詩を詠んだ。

秋の水が満ちてきた池に、二羽の鷺が下る。

緑の槐えんじの高いところで、蝉が一声鳴く。

酒が醒めると、

門の外には日が傾き、

川の向こうの十畝ぼの田に長く影が落ちるのを、

臥したまま見渡す。

(この詩に描かれているような静かな風光のもとでの日々を陽羨ようせんで過ごせるものと、蘇軾は期待していたのだろう。それは手の内からすると抜けて消えてしまったのである)

■跋蔡君謨書

金陵きんりやうは五代十国時代には南唐国なんとうの都であった。南唐国は長江沿いの豊かちやうこうな地を版図におさめ、唐文化の伝統を受け継ぎ、金陵は杭州こう、成都せいと並んで文化の先進地であった。南唐国の最後の皇帝であった李煜りいくは書や詞に優れた才能を発揮した風流人で、蘇軾は金陵で李煜の書を見る機会があったのだろう、この短文を蔡襄さいじやう（字は君謨あざま くん ぼ）の書の後ろに記した。蘇軾が蔡襄の書を高く評価していることは第6章 149 ページなどで詳しく見ているが、ここでもその主張を繰り返している。

かつて私は蔡襄さいじやうの書が本朝第一であると論じた。一家言ある者の多くはそうではないと言い、ある者は蔡襄の書は弱いと言った。これは特に書を知らない者の言

い分である。外見は^{つよ けわ}勁く険しいけれど、中身が何もないのを真に弱いというべきである。世間の者は^{り いく}李煜の書は^{つよ}勁いとするのだが、その論で蔡襄の書を弱いというのであろう。

^{げん ぼう}

元豊八年七月四日。

(蘇^{しよ かつ}軾は諸葛氏が制作する筆を礼賛していた(第6章80ページ)。諸葛氏の技術は、李煜とその父が文化芸術の愛好者で、その保護のもとで発展したのだった。この短文で、李煜の書は「外見は勁く険しいけれど、中身が何もない」と厳しく断じているのは、あるいは^{とう}登州知事として政界に復帰する己への戒めであるのかも知れない)

■蝶戀花

蘇軾が^{きんりよう}金陵から^{ようせん}陽羨に戻って^{とう}いよいよ登州に向かって出発したのは7月下旬であった。そのときの思いを託したのがこの詞。

雲水縈回溪上路。(雲と水が^{めぐ たに}縈る溪のほとりの道)

疊疊青山、(重なり合う青い山々)

環繞溪東注。(環り繞って溪の水は東へと注ぎます)

月白沙汀翹宿鷺。(月の光に白く照らされる水際の沙で、鷺が羽を休めて眠ります)

更無一点塵来处。(ここには一点の塵さえることがないのです)

溪叟相看私自語。(溪に住む老人が私を見てつぶやきます)

底事^{せかいせか}区区、(「どうして区区と」)

苦要^{くよう}為^な官去^{くわんきょ}。(官職のために去って行くのかね)

尊酒^{ほんしゅ}不^な空田^{くうでん}百畝^{ひゃくあ}。(百畝の田があれば酒樽をいっぱいにできるだろうに)

帰来^{きらい}分得^{ぶんとく}閑中^{かんちゅう}趣^す。(閑中の趣を分かち合えるのはこんど帰ってきたときでしょうか)

■贈杜介

蘇軾^{じょく}は常州^{じょうちゅう}から潤州^{じゆんしゅう}に行き、杜介^{とかい} (字^{あざな}は幾先^{きせん}) に出逢い、この詩を贈った。杜介の名は本章 100 ページなどですで見ている。短い序文がある。

元豊^{げんぽう}八年七月二十五日、杜介^{とかい}は先に浙東^{せつとう} (杭州^{こう}の南のあたりの地) に行き、揚州^{ようしゅう}へと帰りつつあったところで、金山^{きんざん}において出会った。杜介^{とかい}は天台^{てんたい}山の奇異なありさまを話してくれたので、私はこの詩を贈った。

私はかつて夢の中で天台山に遊んだ――

空の彼方に、石の橋が小さく浮かび、

草の上の露に、秋の風が吹き寄せ、

山の翠^{みどり}の潤^{やわやわ}いが裊裊と香る、

応真^{おうしん} (真理に応じた僧) が錫杖^{しゃくじょう}を飛ばして傍らを過り、

見る見る鳥のように絶壁の間の雲の上へと渡って行く、

私は意を決して、これに従おうとし、

たちまち

こそえ

倏然のうちに松の杪の先を超える、

さんぜん

僧の微かな言葉は珠玉のように燦然と輝き、

こころ

まだ何かを説かないうちに、私は意に了解する――

空から堕ちたように目が覚めると、

窓にほんのり暁の白さがあった。

しょうるい

諸々の生類は迷いの網に陥り、

独り真理に達する者は昔から少ない。

と そう し と かい

杜叟子(杜介)はいかなる人であるのか、

うそぶ

万物の外側に出て長く嘯き、

妻子はなく、家はただ四方の壁があるばかり、

おも

杖を振るって軽やかに行くことを念い、

せきじょうざん

あそ

ついに赤城山(天台山の一峰)に遊び、

ひょうびょう

しの

縹緲と空を凌いで飛んで歩いたのだった。

禅を問うて僧舎に帰ることを忘れ、

時に飲食をつなぐために下界に降りた。

し

杜叟子の志を識る者が誰一人いなくても、

仏の眼は自ずと照らし出してくれる。

貴君が実際に見たのを私が夢に見たのは、

ま たぶん

まさか魔に誑かされたのではないだろう。

ここに貴君とともに茶を煎れて御仏に捧げ、

これからは馬に乗ることもなく戸を閉ざし、

きんざん

金山の内に籠るとしようか。

そして時に、天台^{ぶつちやうがん}山の仏頂岩へと飛び行き、

そうねんしやう

雙蓮沼へと馳せ下るのだ。

(1) 前の詞と合わせて蘇軾の本心がここに現れていると見てもよいのだろう。(2) 蘇軾は杭州副知事だったときに天台山に登りたいとの思いがありながら果たすことができなかった(第4章82ページ)。今回も天台山から遠く離れた地に移ることになり、名残惜しさがあつたのだろう)

■送^{しやう}穆^{ぼく}越^{えつ}州^{こう}

じゆん潤州に滞在する間に、蜀^{しやく}の地から越^{えつ}州^{こう}(杭州の近く)へと転任する穆^{ぼく}珣^{じゆん}に出逢い、送別の詩を作った。

じよ(汝州への量^{りやう}移^いの命を受けてから、潤州を経由して東西南北に移動することこれで6度目だった。水上交通の要で、人の往来も多く、こうした出逢いを生んだのである)

川を隔て、陸を隔て、貴公を仰ぎ見ること十五年、

いまようやくに会い、

羨ましく思うのは、

貴公^{しやうはく}が年を経た松柏^{うつぜん}のようにますます蔚然と盛んであること。

貴公は四朝^{し ちやう}(仁宗、英宗、神宗、哲宗)に仕え、冰霜^{じんそう てつそう}を耐え抜いた長老、

このたびは蜀^{しよく}から越^{えつ}へと、両郡^{ふりゅうぐん}の風流水石^{ふうりゅうすいせき}の間を移り行くこととなった。

蜀の父老はいまなお貴公の善政を語り合い、

越の溪山にはすでに貴公を待ち望む声が鳴り響いている。

送別の盃の前^{ほうらい たいしゆ}にいるのはともに「蓬萊の太守」、

高楼から眺める雪や月をなおざりにすることはこれからもないのだ。

(詩の終わり「蓬萊の太守」とあるのは、越州^{ほうれいけく}には蓬萊閣^{とう}があり、登州にも蓬萊閣があることから、2人がともに海の彼方の蓬萊(仙境の地)の太守(知事)になると洒落たのである)

■金山妙高台

潤州^{じゆん}に来ればやはり金山^{きんざん}を訪れる。妙高台^{みょうこうだい}に登って、この詩を詠んだ。

私は飛ぶ車に乗り、

東^{せきしょうし}に赤松子(伝説の仙人)を訪ねと思う。

しかし、三万里の海を隔てた蓬萊山^{ほうらいさん}にはとても行けない。

というわけで金山^{きんざん}に渡るのがよからうと、

風に帆を上げるなら、

半分開いただけでもう着いてしまう。

金山^{みょうこうだい}には妙高台の高楼があり、

雲の峰が一つ抜きん出た上に立っている。

仰ぎ見て最初は路がないようであるのだが、

信じられないことに、

峰の上は砥石のように平らである。

妙高台には老いた僧がいて、

碧い眼から窓や机を照らす光が発せられ、

玉を削って骨となし、凜凜と霜を齒としている。

語を発する鋒先は触れるべからざる鋭さがあり、

水をひっくり返すような勢いで、千の偈を自在に吐き出す。

徳雲(法を説いた古代インドの僧)に尋ねるまでもなく、

この僧にこそ教われればよいのである。

長生(仙道の不老長生)を学ぶよりも、

長不死(仏教の不生不滅)こそを学ぶべきなのである。

(仙人になる方法を問うよりも、仏教を教わるべきだとする妙高台の僧とは仏印(了
げん)元(本章 67 ページ)であろう)

■記焦山長老答問

潤州(鎮江)には金山、焦山、北固山の鎮江三山があり、かつて蘇軾が
その三山に登ったことは第3章 140 ページで見ている。登州に向かうに
あたって、再び三山を巡ったようだ。

とう ば こ じ うわぎ しょういんざん
東坡居士は酔って背にひとえの衫をはおり、招隠山に遊んだ。酔いから醒めて、
うわぎ だいし ば
衫をひっかけて寺の大衆に問うた。

「たまたまた酔っぱらいはどこに行くのか」

誰も答える者はいなかった。

翌日、東坡居士は焦山しょうざんに向かって、同じ問を發した。すると、焦山は両手を交差させて挨拶してくれた。

■別石塔

蘇軾じゆんは潤州を發って長江ちやうこうを横切り、大運河を北上して揚州ように至った。前年の秋から南北に行き来して 3 回目の揚州である。これは揚州せきとう じの石塔寺での問答を記した短文。

せきとう とう ば こ じ
石塔が東坡居士と別れた。

私は言った。

「慌たたく過ぎ去るために、石塔を一見できないのを残念に思います」

塔が起立して言った。

「では、これは塙かわらの塔なのですか」

私は言った。

「いえ、縫い目がありますな」

塔は言った。

「もしも縫い目がなければ、どうやって世間の^{けら}蜚^いや蟻を容れることがででしょうか」

私はその言葉に^{うなず}肯いた。

(この文章はこのままでは意味が取りにくい。いろいろと補って冗漫に訳すと次のようになるだろう)

石塔(石塔寺の長老のこと)と東坡居士(私)が別れることになった。

私は言った。

「慌ただしく過ぎ去るために、石塔(石塔寺の名の由来となった石塔のこと)を一見できないのを残念に思います」

塔(石塔寺の長老)が起立して言った。

「では、愚僧を石の塔ではなく、^{かわら}磚の塔とても御覧になるのですかな」

私は言った。

「いやいや、貴僧は衣を纏い、縫い目がありますな(石の塔でも^{かわら}磚の塔でもない)」

塔(石塔寺の長老)は言った。

「もしも縫い目(のような隙間)がなければ、どうやって世間の^{けら}蜚や蟻(救済を待つ衆生)を受け容れることがででしょうか」

私はその言葉に^{うなず}肯いた。

■余將赴文登過広陵而挾老移住石塔相送竹西亭下留詩為別

上の短文にあった石塔寺の長老は、本章 103 ページで見た挾長老で、蘇^{たく}

軾が常州^{じょう}に行っている間に、竹西寺から石塔寺^{ちくせいじ}に移っていた。この詩の題は、「私は文登^{ぶんとう}県^{こう}（登州^{とう}）に赴^{こう}こうとして広陵^{こうりょう}（揚州^{よう}）を過^{たく}った。挾長老は石塔寺に移っていて、竹西寺まで同行してくれ、この別れの詩を書き留めた」。この詩は上の問答の翌日の作であろう。

竹西寺^{ちくせいじ}はすばらしい僧を失い、

石塔寺^{せきとうじ}は恵照^{えしやう}師^し（唐初^{たう}の名僧^{めいそう}で挾長老^{かくちやう}になぞらえる）に出逢^{でう}ったのだった。

私も変化^{へんげ}する身、

東海^{とうかい}のほとりへと行く。

我が姓名^{せいせい}が世の人に知られないようにできないものだろうか。

（（1）「東海^{とうかい}のほとり」とあるのは登州^{とう}のこと。登州^{さんとう}は山東半島^{さんとう}の北東^{ぼくとう}の端^{はな}、渤海湾^{ぼっかい}に面する海辺に位置するのだが、中国大陸の人々にとって海洋は東にあるので、「東海」と総称する。（2）挾長老^{かくちやう}は無挾^{むたく}とも戒和尚^{かいおしょう}ともいい、石塔寺に移ったので石塔長老ともいうようになり、元の姓名で呼ばれることはない。蘇軾もそのような変化を望むということがこの詩の終わりに歌われているのだろう）

■楊康功有石石如醉道士為賦此詩

先に揚州で会った呂公著^{りこうちや}は朝廷の高官として都に復帰し、代わって揚州知事として赴任^{しゅうにん}したのが楊景略^{やうけいりやく}（字は康功^{あきな こうこう}）であった。その楊景略の所蔵する石が、酔っぱらい道士^{どうし}の形をしているのを見てこの詩を詠んだ。

この界隈の山にはもとはたくさんの猿がいた。

なかでも青い猿ずるがしこは、黠なかにきくて寿で、

頭のおかしな道士へんげに変化し、

山や谷ほしいままを恣に駆け巡り、

誤かって華陽洞かうどう(神仙のすまい)に入り込み、

大茅君だいぼうくんが造った神聖な酒をこっそり飲んでしまった。

大茅君はその猿いわおを巖に閉じ込め、

岩かせを械とし、松の根を足に絡ませ、藤の蔓で肘を縛り、

目に苔いばらを塗り付け、口を棘で塞いだ。

かくて三年で石になり、玉ぎよくに匹敵するほどの堅さとなり、

もはや雲に叫ぶ声もなく、杯を舞わした手は空しく形だけが残ったのだった。

樵さこりはこれを見つけて笑い、

抱き帰って売り払い、米と酒に換えた。

楊知事は、俗な連中は友人とはなりえない方で、

かつて高麗国こうらいに行ったときに、

海辺で姑射仙人こやせんじんに会い、互いに笑ってわずかにうなずきあった。

それから、「海中の仙」と呼ばれるようになった。

どうしてそのときに姑射仙人を船に載せて帰らずに、

いまこの醜い石を手元に置いているのだろうか。

楊知事は、この石の奇異なることを詩に詠むよう私に求め、

この詳しい本末を聞かせてくれた。

私がここに詠んだのは全くもって妄言ではない、

なぜなら、亡^{ぼう}是^し叟^{そう}という立派な御仁^{ごじん}に確かめのだから。

(1) 最後の「亡是叟」は読み下せば「是亡^{これ な おやじ}き叟」で、つまり「ほらふき男爵」というようなもの。この詩は嘘八白を並べたものだと白状したのである。(2) この詩に詠まれている猿^{さいゆう き}は『西遊記』の孫悟空^{そん ごくう}を彷彿とさせるものがある。岩垂憲徳・釈清潭・久保天随^{てんじよう}訳解『蘇東坡詩集』(1927年)は、玄奘法師^{だいてうせい いき き}の『大唐西域記』に基づく講談本^{だいい}『大^{とう}唐^{きやう}三^{さん}蔵^{ざう}取^{しゆ}経^{きやう}詩^し話^わ』(南宋時代の本で日本だけに残った)の前身となるようなものを蘇軾が読んでいたのではないかと推測している。(3) なお、酔っぱらい道士の画に付した跋文を第2章119ページで見ている)

■送楊傑

楊傑^{ようけつ}という朝廷に仕える人^{よう}に(恐らく揚州で)出逢^{でう}って詠んだ詩。序文が付いている。

楊傑は無為子と号し、かつて勅使として泰山の絶頂に登り、鶏^{けい}が一^{いち}鳴^{めい}するとともに日^ひが昇^あり出^でるのを見た。また、かつて朝廷の御用で華山^{かざん}に行き、重九^{ちゆうきゅう}の日に蓮花^{れんげ}峰^{ほう}の上で一杯飲んだ。いまは皇帝の詔^{こうらい}を奉^ぎじて高麗^{こうらい}国の僧^{ぞう}、義天^{ぎてん}とともに銭塘^{せんとう}に行^いくところである。いずれも朝廷の仕事で、方外^{ほうがい}(世俗の外)の楽しみをなすのであ

ぜんざい み そ う
て、善哉未曾有のことである。詩を作って楊傑に送る。

たいざん てんもん
夜の間に、泰山の天門から登り、

昇り来る日を出迎えた。

紅い波が万里に広がり、天の半分が赤く染まった。

山から降り来た後は、

平地において見る日の光は弾丸が跳ぶがごとく、

あたかも黄金で鑄た橘の実のようになった。

かざん ちようきゆう
華山の峰の絶頂で重九の宴を催し、

天からの風が艶やかな菊の花の酒を吹き、

崩れるような絶壁の上で、

すいぶ
大声で歌い、手を揮って酔舞し、崖を一気に駆け下った。

こころ はっきよく
そのとき神は八極(大宇宙)に遊び、現世との万縁は全て虚しく消え、

下に視るのは、汚れた溝でぶんぶん飛ぶ蚊の群れであった。

だいせん せ かい
大千世界を一息に八十回往復し、

笑って東の海に渡り、鯨の背にまたがったのだった。

こうらい き てん
ここに高麗の王子(義天)が西に仏法を求めに来た。

いしえ び てん
それは古の弥天のような高僧で、

さくし
貴君は古の鑿齒のような学者であるから、まさに好敵手である。

高僧には仏難がつきもの、

ちょうこう

長江を過ぎるときに強風が吹き荒れ、

山のごとき浪に襲われることもなくはないであろう。

船頭に頼むのは、

どうかこの兩人を大切に看てくれたまえ。

(上の詩に続いて高麗国こうらいのことが詠まれている。僧ぎてんの義天は高麗王の子で、釈迦しゃかのように王子の位を棄てて仏法を求めた。蘇軾の詩は高麗国にも評判が聞こえていたことは前に見ている(第5章185ページ)ので、義天が蘇軾に会うことを希望して、この詩が作られたのかも知れない)

■次韻孫莘老斗野亭寄子由在邵伯堰

揚州ようを発って、邵伯堰しょうはくえんにあった孫覺そんがく(字は莘老あざな しんろう)の斗野亭とやていを訪れた。孫覺(本章138ページ)はこのとき都にいて不在で、留守番役の老僧から孫覺の詩を見せられ、それに次韻して弟の蘇轍に送った。

(邵伯堰しょうはくえんはかつて晋の時代に謝安しゃあんが築いた堤がもとになっていた。それで詩の冒頭に「謝公しゃこうの渚」とある。謝安は蘇軾の憧れの人物として時折登場する。弟の蘇轍そくけいは績溪县の知事として2月に着任していたが、8月の初めに都に召喚する辞令が下り、そのことがこの詩の終わりに詠み込まれている)

帆を降ろしたのは謝公しゃこうの渚、

東西に広がる平らな川面ひあしに、日脚が落ち下る。

ぽつんとたつ斗野亭^{とやてい}で少し憩うと、

暮れなずむ景色はさらに清らかさを増す。

僕がそのまま座り続けていると、

斗宿^{としゅく}、牛宿^{ぎゅうしゅく}の星々が南の麓の上に現れ出る。

ここを守る老僧は、ひとたび笑うと、

昔からの知り合いであるかのように感じられ、

すでに意が傾^{こころ}くの覚える。

孫覚殿^{そんかく}の新しい詩を見せていただき、

かつての日々が前世のことであったかように疑われる。

思えば僕は今生^{こんじょう}の世において七回ここを往来し、

老いを海のほとりの町で送ろうとしている。

人に逢うと、このような自分であることを思わず晒^{わら}ってしまい、

魚を得ても、我が身に重ねて、煮^にて食べるのは忍び難く思えてしまう。

聞^{きこ}くところでは、

績溪^{せきけい}の老人はまた都に行くとか。

僕は秋の菊のような小さなこの詩をここに置いて行くから、

霜の中でもきっと明らかに君は見出してくれるであろう。

僕の詩に感じるがあったなら、

春^{さかえ}の栄を呼び起こす長篇の詩を詠んでくれたまえ。

（詩のなかほどに「七回」とあるのは、かつてすでに4回来たことがあるからだ。「績

溪の老人」とは弟のこと。弟も同じ経路で都に行くので、ここに詩を置いておくのだ)

■贈葛革

葛革^{かつ い}という人に贈った詩。次の詩の王寂^{おう せき}とともに、どこのどのような人であるのかは不明で、揚州^{よう}から登州^{とう}への旅の途中でたまさか知り合ったのだろう。

竹^{たけ}の椽も茅^{ちの}の屋根も半ば碎け半ば傾いている。

貴君は蜂の巣^{ちゅう}ほどのほかない住居に暮らし、

川波によってさらわれてしまうのではなからうかと、

私は恐れるあまり、

何なら貴君を船尾に載せて連れて行こうかとさえ思う。

貴君がさっと作ってくれる詩は唐^{とう}の孟郊^{もう こう}のように渋い味わいで、

さらさらと書いてくれる字は晋^{しん}の張伯英^{ちやうはく うえい}の草書を見るかのような。

百年の人生はいかにして使い尽くすのがよいのか。

貴君は帰耕^{き こう}しそこなった私を憐れむのである。

(「帰耕しそこなった」とは陽羨^{よう せん}での暮らしがたちまち終わってしまったことをいう)

■贈王寂

王寂^{おう せき}という人に贈った詩。

貴君としばし別れるのは嘆くまでもない。

俯仰する間にまた帰ってくるのだから、

鬢の毛が白くならないだろう。

覚えておこう、

江南の煙る雨の中、

青い山の途切れたところに貴君の家があることを。

(ここでいう「江南」は広く淮^{わい}河^が以南の南中国をいうのだろう)

■ 迨作淮口遇見詩戲用其韻

淮河^{わい が}の流れへと船が乗り出したところで、次男^{そ たい}の蘇迨^あが「風に遇う」という題の詩を作り、それに次韻した。我が子の詩を手放して褒めているので、詩題に「戯れ」と記している。蘇迨はこのとき16歳であった。

私の詩は病気になった馬のようなもの、

枯れかけた草に向かって、悲しげに嘶いている。

我が子は真に駿馬、

噴^{ふん}と息を一つ吐くだけで、群がる馬どもは倒れてしまう。

とはいえ、

いまは氣^きを養うとき、

やたらと吟じたりうなったりしない方がよいだろう。

世に名が知れるのが早すぎるのははなはだよろしくない。

わい が

淮河を波立たせる風は、

君の筆力を借りて、ますます勢いを増し、

雲を残らず吹き払った。

どうえんめい

陶淵明は、息子がいつまでたっても梨や棗なつめを求めて走りまわっていると嘆いたけれど、

我が子とどっちがましだかわかったものではない。

それでも君が強引わざにも韻を踏んでしまう技を見ると、

私にはどうももうこう か どう孟郊や賈島よりも勝っているように思えてしまうのだ……。

もうこう

か どう

かん ゆ

(孟郊、賈島は韓愈の高弟である)

■書遺蔡允元

風のために上の詩と同じ場所に留まっている間に蔡允元さいいんげんという人の訪問を受け、この短文を書いて与えた。蔡允元は古くからの友人とあるが、他にその名は見えず、いかなる人であるか不明であるという。

私は閑居すること六年、また出仕することとなった。六月に朝廷の命を受け、いま初めて淮河のほとりに至った。しかし、大風のために、三日の間、河を渡れずにいる。

古い友人の蔡允元さいいんげんが来て、船中で別れた。蔡允元けんげんは眷眷としてなかなか帰ろうとしない。私も遅回ぐずぐずと出発しようこころとしない。意では風がずっと続くことを願っているのだ。一座の人々が口を揃えて、東坡居士とうば こじが官の仕事に赴く様子は、小児のちのちが遷延と勉強場に行こうとしないのにそっくりだという。

その語が実にぴったりであるのを愛し、ここに書き記し、蔡允元けんげんに与える。後に帰休したときにこれを見て笑うのもよいだろう。

（ここにある「殆似小児遷延避学しょう に せんえん がく ほとん」（小児の遷延として学を避けるに殆ど似る）とは実にうまいことを言ったものである。前年の春こうに黄州を発ってから蘇軾の足取りはまさにこの通りの印象を与える）

■次韻送徐大正

いつまでも淮河わい がの入り口に留まっているわけにもいかず、船は北上して楚州そ じょたいせいに至り、そこで徐大正と別れてこの詩を詠んだ。この詩には蘇軾自身の注があつて、「徐大正とはかねてから長江と淮河ちやうこう わい がの間の地で隣同士に住もうと約束していた。登州とうに赴くに当たり、同じ舟で山陽さんよう（楚州）に至った。徐大正が送別の詩を作り、私は詩を残した」とある。徐大正は、黄州知事の任にあった徐大受じょだいじゅの弟で、先に揚州のあたりで会って一度別れている（本章 103 ページ）ののだが、いつどこで再会したのかは不明である。

別れの蓋さかづきが燈火とう かに照らされている。

そこにたまった蠟ろうの形状から占うと、遠からず私は帰ってくるはずだ。

去年、一緒に長江ちやうきやうを渡ったときに、升ますのように大きな萍うきくさの実を食べた。

今年、それぞれが海辺の地に向かうときに、瓜のように大きな棗なつめの実を食べる。

情こころある明月は貴君のためにここに来てくれている。

値なき青山あたひ(無上の価値のある自然)は私のために遥かまで続いている。

千首の新しい詩と一本の竹の釣り竿がここにある。

いつかともに川に槎いかだを浮かべようとの約束は空しいものではないはずだ。

■次韻徐積

楚州で徐積そ じよせきという人に会い、その人の詩に次韻した。

(徐積さんようについては次のような記録があるという。「徐積は山陽の人で、幼いときに父を喪い、母に仕えて至って孝行で、四十歳になっても結婚しなかった。村人たちの支援で科挙を受け、母とともに上京して合格した。ところが、官職に就く前に母が亡くなり、郷里に帰って喪に服し、そのまま官に仕えなかった。お上は徐積の振る舞いを見て、楚州の学校の教授にした。しばらく務めた後で郷里に帰り、初めて妻を娶った。その後、天寿を全うして終わった」。蘇軾が楚州に着いたのは徐積が教授となった直後であったようだ)

子路し ろ こうし(孔子の高弟で至って親孝行であった)のような貴君を、

鶏を絞めて招くようなことはしないで、

飯を包んで自ら訪ねに行った。

貴君は、中年に至って、校庭に槐^{えんじゅ}を植えた学び舎に隠れているけれど、
本来なら朝廷で立派な文章を書くお方である。

私は、海のほとりの地に向かって東へと去り行く身、
風雨が引き留めたくれたお陰で貴君にお目にかかることができた。

峨眉山^{が び さん}が眼の前にあるのならば、
敢えて故郷に帰るまでもないのだ。

(恐らく徐積の詩に、蘇軾の故郷の峨眉山^{が び さん}は遙か遠くだといったことが詠まれていて、
最後の部分はそれに応えたものであるのだろう。蘇軾はかつて密州^{みつ}知事であったとき
に、障日峰^{しょうじつほう}という山に、形状が峨眉山に似ることから「小峨眉山^{しょう が び}」と名付けていた(第
5章37ページ)。楚州から登州^{とう}に至る途中で密州を通り、「小峨眉山」を目の前に見るこ
とになるので、そこが我が故郷である、つまり地上のどこもが故郷なのだと言ったのであ
る)

■過泗上喜見張嘉父

船は泗上^{し じょう}に至り、張大亨^{ちやうだいきやう あざな か ぷ}(字は嘉父)に会った。張大亨はこの年の科挙
に合格したばかりの人。2首のうち1首を訳す。

其の一

眉の間に氷雪のような気配が宿り、

わい が

淮河のあたりを照らし出す。

筆を下せば、波瀾を引き起こす勢いがあり、

いずれは老成し、平穩になってゆくことだろう。

かくて貴君の持つものを全うする妙を得るならば、

いますでにがやがやと評判が高いことなど気に掛けるまでもあるまい。

■蝶恋花

蘇軾は東シナ海に近い海州^{かいしゅう}に至り、この詞を詠んだ。「漣水^{れんすい}（海州の南の地）
を通り趙咏^{ちようゐ}に贈った」との副題がある。趙咏^{あざな かいし}（字は晦之）はこの地の人
で官職にあったようだ。

自古漣漪佳絕地。^{れんすい}（漣水はその名の通り昔から漣漪^{さざなみ}がくすばらしいところ）

繞郭荷花、^{めぐ はす}（町を繞る荷の花は）

欲把吳興比。^{ごこう}（吳興に比べることができましよう）

倦客塵埃何処洗、^{じんあい}（旅に倦んだ人はどこで塵埃を洗ったらよいのでしょうか）

真君堂下寒泉水。^{しんくんとう}（真君堂の下の冷たい泉の水でしよう）

左海門前酤酒市。^{いち}（海辺の町の門前の酒を売る市）

夜半潮来、（夜半に潮が満ちて）

月下孤舟起。（月の下で一艘の舟が漕ぎ出します）

傾蓋相逢拚一醉、(招き合ってわずかに酔うと)

雙鳧飛去人千里。(二羽の鳧^{けり}に乗って飛び去るのです)

((1) 呉興^{ごこう}は江南^{こうなん}の町で、かつて湖州知事であったときにその美しい風光を愛でた(第5章361ページ)。(2) 「鳧^{けり}に乗って飛び去る」とは仙人の姿で、前にもその故事を見ている(第1章58ページなど)。前半に「真君堂^{しんくんどう}」(真君は真に道に達した人)の名があることから、趙昀^{ちやうあい}は道教に通じていたのだろう。(3) 原詞の後半の冒頭に「左海^{さかい}」とあるのは、天子が南向きに坐したときに、大海は左側にくるからだ)

■元豊七年有詔京東淮南築高麗亭館密海二州騷然有逃亡者明年軾過之嘆其壯麗留一絶云

先に楊傑^{ようけつ}が高麗^{こうらい}国の僧^{そう}を送って杭州^{こう}に向かうのに出会っている(本章211ページ)。このころ宋^{そう}は北方^{りやう}の遼国^{きやうたん}(契丹)の動きを牽制しようと、朝鮮半島にある高麗国との友好を深めようとしていた。陸路を使うと、宋と高麗の間には遼が挟まるが、海路を使えば朝鮮半島は向かい側である。そこで、海州^{かい}に高麗国の使者を迎えるための施設が作られた。詩題は「元豊七年^{げんぽう}、京東^{けいとう}と淮南^{わいなん}に高麗亭館^{こうらい}を築くよう詔^{みつ}が下った。密州、海州の二州は騷然となり、逃亡する者も出る事態となった。その明くる年、私は高麗亭館を見て、その壮麗な建築に嘆息し、一絶句を詠んだ」。

堀の外からも、高麗亭館^{ひさし}の檐^{はしら}や楹が空に飛び舞うありさまが見える。

村々は土木工事に疲弊し、ひっそりと静まり返っている。

我が民衆を高麗国の奴隷として使役したに等しいのではなからうか。

そのような犠牲を償うのが果たしてあるのか。

(改革政治は積極的な対外政策を採り、西方では夏国^かと開戦して失敗した。北方では遼国^{りょう} (契丹^{きったん}) に対して何とか優位を築こうと模索し、高麗国との友好関係を深めようとした。遠くの国と手を結んで、間に挟まる国を叩こうとする考え方は、その後、宋国を亡ぼすことになる。これより数十年後に、遼国よりも北の地に俄かに勃興した金国^{きん}と同盟を組み、遼国を挟み撃ちにしてまんまと遼国を滅ぼすことに成功するのだが、金国の圧倒的な強さの前に宋国の都も陥落してしまうのだった)

■懷仁令陳德任新作占山亭二絶句

蘇軾^{かい}は海州^{かいじん}の懷仁県を過り、県知事の陳德任^{ちんとくにん}が新たに作った占山亭^{せんざんてい}を訪れてこの詩を詠んだ。

其の一

昔むかし太公望^{たいこうぼう}は南征して穆陵関^{ぼくりやうかん}にまで至り、

この海辺の地を自身の領地とした。

まさか誰も思いもしなかっただろう、

そうした太公望の苦勞を尻目に、

ここにきた詩狂いの人が、

こうせい

膠西^{こうせい}県の山々の半分までもやすやすと占拠^{せんぎょ}してしまうとは。

せんざんてい

(詩の後半は占山亭^{せんざんてい}が、その名の通り山々の景色を独り占めにしてしまうところから

こうにし みつ

洒落^{しや}たもの。膠西^{こうにし}県は密州^{みつ}に属することから次の第2首が続く。

其の二

こうせい

私は膠西^{こうせい}のもとの知事である。

だから、私だってこれらの山々を貴君と半分ずつにしたってよいはずだ。

むしろ「山中の宰相」を密かに名乗ろうかと思っているくらいだ。

はくうん

あの山に隠棲^{はくうん}し、時折、白雲^{はくうん}に詩を寄せるのだ。

とうこうけい

なんせい

(「山中の宰相」とは陶弘景^{とうこうけい}の故事による。陶弘景は若いころは南齊^{なんせい}の朝廷に仕えたが、

ぼうざん きんりょう

36歳^{ぼうざん}で茅山^{きんりょう}(金陵^{きんりょう}の山)に隠棲した。陶弘景の詩に「山中に何があるのか、嶺の上に

はくうん

多くの白雲^{はくうん}がある」との句があり、それ以来、「白雲」は隠者の清らかな心の象徴とな

った。皇帝はしばしば陶弘景に手紙や礼物を贈って厚く遇したので、人々は「山中の宰

相」と呼んだ)

■再過常山和昔年留別詩

みつ

じょうざん

密州^{みつ}の南に常山^{じょうざん}がある。蘇軾^{そしつ}は密州知事であったときに何度か常山に登

って雨を祈り(第5章38ページ)、密州を離れるに当たって常山^{じょうざん}の零泉^{う・せん}で送

別の詩を詠んだ(第5章138ページ)。登州^{とう}に向かう道で再び常山を過り、

かつての送別の詩に和した。

常山の前で老人達が深々と頭を下げる。

私を出迎えるのは初めてであるかのようにしている。

夢幻の内を駆け巡る身は、

一念一念ごとにもう昔の人でないのだ。

長らく川や湖を放浪し、

朝廷ばかりでなく街にも親しい人はもはやいない。

ここから^{う せん}零泉の源を尋ね、俗世を避けた^{とうげんきょう}桃源郷に逢おうかと思う。

(このあたりの一連の詩から、蘇軾^{とう}が登州に赴任することによりあまり積極的でなかったと推測しても、あながち見当違いではないであろう)

■再過超然台贈太守霍翔

蘇軾は9年ぶりに^{みつ}密州を訪れた。州庁の北側には蘇軾が築いた^{ちようぜんだい}超然台があった(第5章81ページ)。超然台に登り、州知事の^{かくしろう}霍翔にこの詩を贈った。

昔、私は^{う せん}零泉の水を飲んで^{じようざん}常山と別れた。

そのとき天は冬に向かって寒く、歳は^{たつ}辰と^み巳の間にあった。

山中の児童は手を拍って笑い、

「西に去って、いつ還ってくるのですか」

と私に尋ねた。

児童らとは竹馬の遊びを再びする約束をした。

それににもかかわらず、十年もの間ここに来ることがなく、

私は小舟に乗って独り遠くで釣りをしていたのだった。

ようやく重ねてここに来ると、

老人たちは幼い子に支えられながら、道を遮って出迎えてくれた。

かつて赤ん坊であった者もすでに七尺の丈に成長したのを見れば、

私はどうしたって若いままではいられない。

人々に、いまの知事殿はどのような人であるかと尋ねたところ、

「漢かんの時代の趙充国ちょうじゅうくに將軍のようなお方です。

それでいて、お年はまだえらくお若いのです。

その上、民衆を労働に使うときには、

知事様御自身が酒や食べ物を用意して慰労して下さいます」

と言った。

私が密州知事であったときには、

「超然台ちょうぜんたいの記」に、

「台所はいつもすっからかんで、

杞くこの葉やら菊の花やらを毎日食べなければならない」

と、書いたくらいであったから、

「うちの知事様はしみったれた」

と、嘲りを受けていたのだが、
いまの知事殿はそういうことは全くないのだ。
かくて超然台に旧跡を尋ねて酒を置くと、
当時の詩賦を刻んだ石がそのままに残っている。
雲が飛んで馬耳山に日が落ちゆき、
超然台の碧の壁が霧の中で金色に輝く。
邦其の水は古からのままに北に向かって流れ、
波を立てて瀬を下りつつ環飾りがぶつかり合う音を響かせている。
知事殿に願うのは、
談笑の内にその川に石の埭を築き、
居ながらにして城郭の周りに新田を生み出すことである。
(蘇軾の注記で、密州知事の霍翔は熙河(夏国との戦いの前線地)で屯田を開く功績があつたと自ら語つたとある。それで、西方諸国を平定するのに偉大な功績があつた漢の時代の趙充国になぞらえた句を詠んだのである。詩の終わりは、遠く辺境の地ではなく、むしろ身近なこの地において新たな農地を開くことを霍翔に勧めたのである)

■過密州次韻趙明叔喬禹功

ここに懐かしい名を見る。趙杲卿(字は明淑)(第5章117ページなど)と喬敘(字は禹功)(第5章19ページなど)で、2人とも密州知事であつたときに交流があつた。

ちよう

趙先生は普通り貧乏のまま、

きよう

喬知事もやはり酔っぱらっては門番に叱られている。

世間を笑わせるだけの価値すらないのに、

こうして我等三人はまた向き合っている。

鶏の声を曉に聞けば、悲しい曲を歌っているかのようだ。

白髪を見ると、秋はこの身にこそあると驚かされる。

こうせい

膠西の旧い友ともう別れるのだが、

いつかの春に小舟に乗ってともに釣りをしようではないか。

ちようこうけい

きようじよ

((1) 趙早卿が学校の教授で貧乏であることは第5章118ページの詩で、喬敘が門衛に馬鹿にされるような目に遇うということは第5章20ページの詩でそれぞれ見ている。(2) 釣り竿を並べるのは、徐大正との別れの詩(本章218ページ)でも見ているように、自由人同士の楽しい遊びの象徴である)

■海市

とう

蘇軾は10月15日に登州に到着した。着任したことを報告する感謝状をその日のうちに書いて皇帝に差し出し、また地域の実情を調べて現今の課題を記して朝廷に書いて送るなどして、久しぶりに知事としての職務に意欲的に取り組み始めた。伝聞によれば、天下に名高い蘇軾の赴任を登州の人々は大いに歓迎したとある。ところがわずか5日後の10月20日

に朝廷に召喚するとの辞令が届き、たちまち都に向かうことになった。あまりにも短期間で去らねばならないことに蘇軾としては心残りがあったということがこの詩の序文に記されている。

私は登州の「海市」(海に町が浮かんでいるようなありさまが見られる現象、すなわち蜃気楼)について以前から聞いていた。土地の父老によると、春から夏に出て、今年はもう冬になったので見られないという。私は着任して五日で去ることになり、「海市」を見られないのを残念に思い、海神の広徳王の廟に祈った。その明くる日に「海市」が現れたので、この詩を作った。

(登州の州庁は渤海湾を北に臨む海辺の町にあった。中国は広大な国で海岸線も長い
が、大半の人々にとって海は遠い存在である。蘇軾も海辺の地に住まうことを珍しく感じ、有名な「海市」を見ることを一つの楽しみとしていた)

東方の雲と海、

空にしてまた空、

その空明の中に群仙が出没し、

ゆらゆら揺れる浮き世が現れ出て、

万象が生じるという。

よもや貝が真珠の宮殿を吐き出すのではないだろう。

心に知り抜いているのは、

見るものすべては幻影であるということ。

それでも、我が耳目を驚かすために、

わざわざ神の工たくみを煩わしてみることにした。

「天地が寒さと水の冷たさに閉ざされたこの季節、

私のために冬籠ぎよりゅうりしている魚竜を鞭打って起こしてください」

すると、霜降る暁に、重なり合う楼閣みどり おかと翠の阜が出現した。

この異事に百歳の翁もぶっ倒れんばかりに驚いた。

人間世界で得られる物なら、我が力を取ることもできるだろう。

この世の外には物はなく、誰であれたくさん物を取って誇示することはできない。

私はいきなり頼んだのだが、神はなぜか拒みはしなかった。

それで知ったのは、

私は人から厄わざわいを受けたのであって、天が窮こまるせたのではなかったのだ。

唐どう代だいの韓かん愈ゆは遠く南方の潮ちよう州しゅうに流された後、

都に帰還する途中、霧に閉ざされた道で神に祈ったところ、

石廩せきりんと祝融しゅくゆうの二つの峰うづたかが堆たかく聳そえる姿が現れ出たので、

「我が心が正しく素直であることが山の神を動かしたのだ」と豪語した。

実際のところは、韓愈の竜鍾げっそうとしたありさまを造物者が哀れんだのだろう。

顔をほころばせて笑うのだってそうそうあることではない。

神が山を見せてくれただけでその報いは十分に豊かであったのだ。

まして私は世にない物までも見せてもらえたのだ。

日が斜めになり、万里の彼方に鳥が飛び去った後は、

あお
碧い海が青銅を磨いたように広がるばかり。

きらびやかな言葉を並べて新しい詩を作ったところで、

何の役にも立たないのはわかっている。

結局は、風とともに全て変化して消えてしまうのだ。

(詩の半ばに「信我人厄非天窮」(まこと われ じんやく てんきゆう あら信に我は人厄にして天窮に非ざるを)とある。つ

まり、流罪の身になったのは人によって与えられた災厄であって、天の定めによるもの

ではないというのである。かくて蘇軾は胸を張って都に帰還するのである)

■登州孫氏万松堂

とう
登州にいたわずかな日々のうちにあちこちを訪ね、幾つかの詩を詠んだ。

これは登州の町中にあったそん まんしょうどう孫氏の万松堂で詠んだもの。

一万本といわれる松を誰が植えたのか。

さわさわと風に鳴り、

みね あお
嶺に積む蒼い雲のようにこの邦を覆っている。

堂に登って見るなら、

松より滴る露が家々の屋根へと降りかかり、

冬の川からは、石の歯が水を噛み砕く音が風とともに聞こえてくる。

だいちく しょうちく 南の部屋では、大竹、小竹の二つの島が空に浮かぶさまが見え、
くう

北の窓辺では、夕陽を受けて松の影が伸びるのを見る。

平安を告げるタペの^{のろし}烽が海の向こうに上がるのを見てから、

^{ほうほう}逢逢と鳴る太鼓の響きを踏んで帰ろうと思う。

^{ぼっかい}（渤海湾の北側は^{りよう}遼国の、東側は^{こうらい}高麗国の領地である。国境地帯で何事もなければ
^{のろし}狼煙（平安火）が上げられるという）

■留別登州挙人

^{とう}登州を去るに当たって、科挙を目指しているとある受験生に贈った詩。恐らく、蘇軾の到着を心待ちにして自作の詩文を見せに来たのだろう。

身も世も忘れるという^{そうじ}莊子の哲学はかねてから知っていながら、

なおも官界を旅し、古来名高いこの地に来た。

^{かん}漢の時代にこのあたりに避難していた^{たいしじ}太史慈は、

^{こうゆう}孔融が赴任して来なければその才能は世に^し識られなかった。

貴君が筆を下すなら、世の風流人を驚かし、

貴君が琴を演奏するなら、^{いせい}古の名人の弟子にもなれるであろう。

わずかで五日で匆匆に去ってしまう私を嫌わないでほしい、

都に帰ったならば、貴君の詩を皆に伝えるであろうから。

（この詩を与えた^{きよじん}挙人の名が伝えられていないことから、この人の詩が都の人々の間で評判になるようなことはなかったのだろう）

■蓬萊閣記所見

^{とう}登州の町から北に三里の海^{ほうらいかく}辺にある蓬萊閣を訪れてこれを記した。登州に蓬萊閣があることは本章 204 ページですでに触れていた。

^{とう}登州の蓬萊閣^{ほうらいかく}に上って海を望むと、鏡の面のように広がり、遠く天と境目を接している。その中に、たちまち黒い豆のようなものが数点現れ出た。土地の人が言うに、「海^{かいほく}舶が来たのです」。飯が炊けるよりも短い時間で、船はもう蓬萊閣の下にまで来た。

^{げん ほう}元豊八年十月晦日、^{み そ か}眉山の^{び ざん}蘇軾が書く。

(内陸の眉山に生まれ育った蘇軾にとって海^{び ざん}辺の風光は珍しいものがあつたのだろう。

「海^{かいほく}舶」は外海を航行する船で、小川環樹・山本和義『蘇東坡集』(1972 年)は「貿易船」と訳している)

■遺直坊

^{とう}これも登州滞在中に詠んだ詩。短い序文がある。

^{ふ ひつ}富弼の知り合^{とう}いに登州の李^{り じょう}常という人がいた。かつて李師中が登州知事であつたときに、李常の住むところを「遺直」と名付けた。李常の子の李^{り だい ほう}大方が私に詩を求めたので、この一首を作った。

(ここに見える李常は、本章でもしばしば登場した親友の李常とは別の人である)

李^り師^し中^{ちゅう}知^{みだ}事は浪りに外出する人ではなかったけれど、

李常に対しては師弟の礼をもってその門を叩いた。

李先生はただ座っているだけであっても、

挙止がすでに多くを語って教え、

当時のこの邦の人々はそれによって教化され、

町で朝から飲んだり食べたりして騒ぐような不届きな連中はいなくなった。

それからどれほどの歳月が経ったのか、

李先生も李知事も九^{きゅう}原^{げん}(あの世)の人になってしまった。

国の衰えを嘆いた孔^{こう}子^しの声はいまも伝わっているけれど、

李先生の魂を呼び戻して再び人々を教え導くことができないものだろうか。

私はここに「遺^い直^{ちよく}」(正しいことを遺す)の詩を作るので、

この地を過ぎる者は必ずここを敬って礼を捧げてほしい。

(4行目の原文は「薤^{かい}水^{すい}已^い多^た言^{げん}」(薤^{にら}水^{みづ}已^に多^に言^に)で、薤^{にら}を引き抜く仕草(薤^{にら}は精神の強さの象徴)、水を汲む様子(水は心の清らかさの象徴)からも人を教え諭すものがあるという意味)

■鰻魚行

「中国三大珍味」といわれるものがある。フカヒレ、海ツバメの巣、それ

に干しアワビだ。^{とう}登州はアワビの産地であり、輸入基地でもあった。これ
は^{あわぎょ}鰻魚（アワビ）^{うた}の行。

^{かん}漢王朝（^{ぜんかん}前漢）から^{おうも}皇位を奪い取った王莽は、
最後は^{ぜんだい}漸台に籠り、矢が尽きるまで戦った末に殺された。
そのとき、憂憤のあまり酒と^{あわび}鰻魚しか喉を通らなかったとか。
やはり漢王朝（^{ごかん}後漢）から^{そうそう}皇位を奪い取ろうとした曹操は、
死に際に、^{とばり}帳を廻らせて女性たちに歌わせた。
そのとき、息子は父が好む^{あわび}鰻魚を届けようとしていたが間に合わなかったとか。
二人とも同じく皇位を盗むような人間であっただけに、
嗜好も同じだったのだろうか。
私は^{あわび}鰻魚を前にすると、いつもため息が出る。
それは、「^{あわび}鰻魚の味はかさふたの味に似ている」などと、
妙なことを言った人がいたので気分が悪くなるだけでなく、
この二人のことを思うからだ。
覇者が林立して通行が遮断された時代には、
^{あわび}鰻魚一枚の値が千金にもなった。

幸いにもここ百年は南に北に魚も野菜も運ばれ、
^{あわび}鰻魚も下々の者に至るまで口にしてあり余るほどにある。
さらには、東からは海船に載せられて、倭国の^{わこく}鰻魚までも届き、

^{わら}
「倭螺」と呼ばれている。

^{とう}
その他にも、登州には異国のいろいろなところからたくさんの珍宝がくる。

^{ほうらくかく} ^{だきとう}
蓬萊閣の先にある駝棋島では、

八月になると遠国から吹き来る強風に備えなければならない。

海の怪物が威力を震い、船舶は浪にもまれ、

人々は崖や谷に倒されてしまう。

^{あわび}
鰻魚の採集や運搬には苦勞を伴うのだが、

ひとたび料理人の手に渡ると、

上手に調理されて皿の上で輝く光を放ち、

立派なお屋敷の食卓に乗る。

^{にくし} ^{せきじ}
世の珍味とされる肉芝とか石耳とかも、

^{あわび}
酢に合えた鰻魚の皮に比べたら物の数ではない。

都会の貴人たちがこの味を珍重するので、

酒粕や油に漬けて遠くまで送られる。

^{あわび}
とにかく鰻魚にはいろいろな話がある――

昔、日に一万錢を厨房で費やしても、

世に旨いものがないと抜かしていた大金持ちがいたのだが、

^{あわび}
鰻魚を食べると、目をひんむいて千日の酔いも醒めたとか、

^{さんかん} ^{かなえ}
かつて三韓(朝鮮)の使者が金の鼎を朝廷に献じたときに、

^{あわび}
箱一杯に鰻魚を詰めて返礼にしたとか、

あるいは、遼東の太守が遠くから朝廷に鮓魚あわびを献じたとか、
臨淄りんしの役人が褒美として鮓魚あわびを下げ与えられたとか……。

この私は生きながえて東の地に来ることができ、

いささかなりとも鮓魚あわびを食べられれば満足で、

葉に包んでその筋の方々への付け届けにしようなどとは思っていない。

鮓魚あわびのスープは眼によいというから、

人々に分け与えて、

細かい字も読めるようにしてやりたいと思うのである。

(日本から干しあわびが運ばれ、登州とうが交易のルートになっていたようだ。このころの
日本は平安時代の院政期であった)

■書吳道子画後

唐代とうの吳道玄ごどうげん (吳道子ごどうし) の画について、蘇軾はしばしば詩や文章において
言及している (第2章 30 ページ、第5章 150 ページなど)。この文章は登州とう滞
在中に史全叔しぜんしゅくが所蔵する画を見て、それが間違いなく吳道玄の真筆であ
ると鑑定して書いたもの。

知恵のある者が何かを創造し、能力のある者がそれを敷衍し展開する。一人の力
だけで成就するのではない。

学問における君子にしても、技術における百工(職人)にしても、創造と敷衍があっ

て、三代(古代の理想の時代)から漢代を経て唐代に至って何事も完備するようになった。だから、詩は杜甫に、文は韓愈に、書は顔真卿に、画は呉道玄に至って、古今の変化が尽され、天下の能力のある人のすべきことは完了したのである。

呉道玄が人物を画くのは、燈火を掲げて影を取ることに喩えられるであろうか。光線が来るのを迎えたり往くのに従ったり、傍らから見たり側面から出て行ったり、横に斜めに平らに直に、各おのを乗除して、自然の本質となる数(法則)を得て、それと毫末も違えることなく画くのである。こうして、新意を法度の内より出し、妙理を豪放の外に寄せたのである(奔放自在に新味を生み出しているように見えて実は理に適っているという意味)。いわゆる「刃を余地に遊ばせ、斤を運らして風を成す」を為したことに就いては、古今において呉道玄一人であろう。

私は他の人の画では、それを描いた人の名を必ずしも言い当てることができない。しかし、呉道玄の画は、さっと見るだけでその真偽がわかる。ところが世間に本物は減多にない。史全叔の所蔵するものは、これまでに一つか二つしか見たことのないほどのものである。

元豊八年十一月七日、書く。

(いくつか補足する。(1) この文章の前半に、蘇軾の文化史観が簡潔に述べられている。冒頭に置かれた「知者創物、能者述焉。非一人而成也」(知者は物を創り、能者は述べ、一人にして成るに非ざるなり)の14文字は、力強くかつ当時としては大胆な主張である。「述」の原義は、「人に付いて従う」で、そこから「人の意見を重ねて言う」という意味が出て、さらに単に「言う、告げる」という意味が出た。この文章で「述ぶ」とい

っているのは、原義に近く、「祖述する」(先人を手本として受け継ぐ)という意味である。古い中国の歴史観はおおむね尚古主義で、大昔(よく「三代」(夏、殷、周)という)に聖人が完璧なものを人間世界に示し、時代が下るとともに悪くなっていくと考えていた。ところが、蘇軾は、知者(聖人)が提示したものを能力のあるものが継承、発展させることによって完成すると主張し、唐代に至って完備したと言っている。ここでは蘇軾は言及していないが、唐代に完備してしまった後を受けて、後世の者は何をしたらよいのかというのが、蘇軾たちの大きな課題であった。(2) 中段にある「燈火を掲げて影を取る」とか「乗除して数を得る」とかの表現は、いわゆる「理系」的な発想とってよいだろう。土木に秀でていたり、医術に深い関心があったり、化学実験に熱心だったりすることも合わせて考えると、蘇軾は実はずこぶる理系人間であったのではないかと思えてくる。(3) その後にある「新意を法度の中より出し、妙理を豪放の外に寄せる」という文章はそっくりそのまま第6章 402 ページで掲げた「呉道玄の地獄变相図の跋文」で見ている。呉道玄の画をいうのにこれ以上の表現はないということなのだろう。(4) 続いて「刃を余地に遊ばせ、斤を運らして風を成す」とあるのは、『莊子』に記された二つの寓話に基づくものである。牛を解体する名人は、自然の法則に従って刃を使うので、骨と肉の間に刃を自由に動かせる広々とした空間があると言った。また、大工の名人は、人の鼻先についたわずかなしっくい、風を起こすように斤を振って削り取っても、人の鼻を少しも傷つけなかった。両者とも達人の技の最高の境地である)

■過萊州雪後望三山

上の文に11月7日の日付があり、蘇軾^{とう}は登州を発ったのはその直後だったようだ。西に進んでやはり渤海湾^{ぼつかい}に臨む萊州^{らい}に来て、雪が降った後に三山島^{さんとう}を沖に見てこの詩を詠んだ。

東の海は碧い環^{あお　わ}のように、

西北^{はて　とう}の果の登州と萊州を取り巻いている。

雲からの光と天の色とが回転しながら、三山島^{さんさんとう}へと落ちかかる。

我が旅はちょうど冬の真中にあたり、

うっすらと雪が積もって、地上に浮く埃^{ほこり}を収めてくれた。

黄昏^{たそがれ}時になって風が収まり、

夜中に海が明るく開けた。

三山島は華山^{か　ざん}の頂^{いただき}のように見え、

雲と波の間に見え隠れする。

古^{いにしえ}の仙人^{はて　あん　き　せんもん}である安期も羨門も、

竜に乗ってあのあたりから飛び去って、

いまはいったどこにいるのだろうか。

神仙の世界に憧れて、諸仙人に一献勧めたいと願っていた漢^{かん}の武帝^{ぶ　てい}も、

虚しく茂陵^{も　りょう}に葬られてしまった。

私にしても天帝の住まいで会う約束はできかねるので、

せめて諸仙人の魂を招き寄せる詩を作ってみようと思うのである。

(大陸の人々にとって大海は神秘の世界で、仙人が住んでいるとされた)

■書文与可墨竹

蘇軾は、萊州から内陸に入り、青州を経て黄河に面する齊州に出て、都に向かったようだ。その途中のどこかで文同(字は与可)の描いた墨の竹の画を見て、この詩を記した。短い序文がある。文同は郷里の先輩にして親友であった。

亡き友の文同には四絶(非常に優れた四種の技量)があった。一は詩、二は楚辞、三は草書、四は画である。文同はかつて私にこう言った。「世の中に私を知る者はいなかった。ただ君だけが一目で私の妙所を識ってくれた」。文同が没して七年、ここでその遺した画を見て、この詩を作った。

筆は貴君とともに逝ってしまった。

いま詩を新たに作るのは誰なのか。

斤を運らした妙技の跡が空しくここに遺っている。

聴いてくれる友を喪って琴の弦を断った昔の人と同じ思いで、

私は貴君のこと偲ぶのである。

(1)「斤を運らす妙技」についてはすぐ前に見ている。(2)「琴の弦を断つ」とは伯牙

という人の故事。親友の鐘^{しょう}子^し期^きが死ぬと、自分の音を知る者はもういないと、伯牙は琴を弾くことをやめてしまった。序文で、蘇軾が一目で文同の妙所を知ったと書いているが、その逆も同じことであったのだ。(3) 流罪となって都を出た直後に文同の書を見て短文を書いたこと(第6章5ページ)を思い起こすと、都に帰還する直前に文同の画を見てこの詩を詠んだのには不思議な巡り合わせを感じる)

(ある考証によれば、齊州から都に至る間に、南京応天府で張方平^{なんけいおうてん あ ちやうほうへい}に会っているようだ。そうした道筋のどこかでなかなかの珍事があったと伝える書物(『西^{せい}畚^い瑣^さ録^{ろく}』や『東^{とう}皋^{こう}雜^{ざつ}録^{ろく}』)がある。かなり眉唾物ではあるが、もしも事実であれば相当程度におもしろいので見ておこう。

蘇東坡は元豊^{げんぽう}年間に獄に繋^{げんゆう}がれ、元祐^{げんゆう}の初め(実際は元豊の末年)に起用されて登州^{とう}知事になり、すぐに礼部員外郎として都に召還された。登州から都への道の途中で、かつて獄中^{ごくちゆう}にあったときの獄官(獄の番人)に遇った。獄官には非常^ひに愧^はじる様子があった。

蘇東坡は獄官に戯れて言った。

「一匹の蛇^かが人を螫^{めい}んで殺した。蛇は冥官^{めいかん}(あの世の裁判官)の審理を受け、法に拠ると死刑に相当した。蛇は前に進み出て冥官に訴えた。『まことに罪はあります。しかし、某^{それがれ}には功績もあります。その功績と合わせて罪を帳消しにしてはいただけないでしょうか』。冥官は言った。『どのような功績があるのか』。蛇は言った。『某^{それがれ}には黄色い肝^{きも}がございます。それで病気を治すことができます。すでに数人を活かしておるのでございます』。役人が調べると、嘘ではなかったので、蛇は死刑を免れることができた。しばらくして、一頭の牛が牽かれてきた。獄吏が言った。『この牛は人を突いて殺しました。罪は死に当たります』。牛

は冥官に言った。『わたしにも黄色い肝があります。それで病を治すことができます。数人を活かすことができます』。牛も死刑を免れることができた。またしばらくして獄吏が一人の人間を引いてきて言った。『この者はもっぱら人殺しをしていました。ところが、生きている間は死罪になりませんでした。いまこそこの者の命を取るべきであります』。その人は大慌てで「おいらにも黄色い肝があります」と言った。冥官は大いに怒り、問い詰めてこう言った。『蛇には蛇黄^{じゃこう}、牛には牛黄^{ぎゅうこう}があつて、どちらも薬になることは天下の人のみな知るところだ。おまえは人間ではないか。黄色い肝などないのだ』。その人は困り果て、苦しまぎれに言った。

『わたしめに確かに人黄^{じんこう}はございません。しかし、いささかの慚惶^{ざんこう}ならございます』

最後は、人黄^{じんこう}と慚惶^{ざんこう}（恥じること）の地口落ちである。恥じらいがあるのなら、かろうじて赦されることもあろうかということであろう。このときに会った獄官は、かつて獄中で詠んだ詩の題に「獄吏によっていささか酷い扱いを受けた」（第5章403ページ）と記していたその人であったのだろうか。蘇軾は、当意即妙のジョークを飛ばす達人であったから、この話が事実であった可能性もないわけではない（逮捕されたときに、妻に向かってみごとなジョークを飛ばしたことは蘇軾自身が記している（第5章389ページ））